

[出土遺物] 第16図1の埋設土器の他、数点の縄文土器片が出土した。1は深鉢の体部で、上部、下部が欠失している。胴下部が強く張り出し胴上部でせばまるが、口縁部は再び開くものと思われる。外面には断面三角形状に調整された隆線によって曲線文が区画されている。地文の回転は文様区画の後、不整方向に行われている。無文部、内面は丁寧なミガキが施されている。

F J 56炉跡（住居跡）（第15図、写真図版4-1）

[遺構の確認] F I 56炉跡の南方に位置する。耕土排除後南北4.0m×東西4.5mに渡る黒色土の広がりが確認され、遺構の存在が予想されたが黒色土は非常に薄く、なだらかに傾斜する程度で、住居跡の壁、周溝等は発見できなかった。しかし石組の炉跡とその周辺に散在する柱穴状のピットが検出されている。

[規模] 軸長1.55m

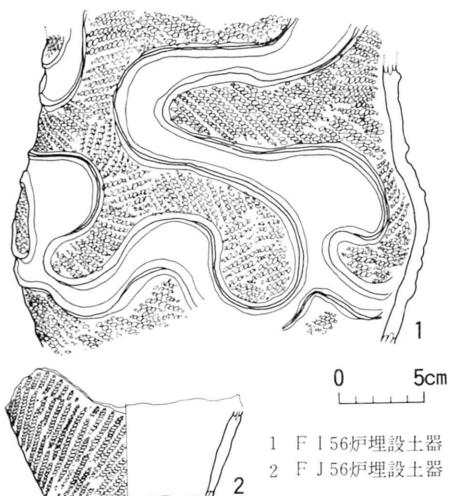
[方向] N-41°-W

[埋土] I部の埋土は黒褐色を呈し、炭化物、土器片を含み、焼土も含まれている。II部はI部に比べてやや褐色味のある黒褐色土が堆積している。

[形状] I部は方形、II部は長方形の平面形を有する。

[構造] 石組み内部に埋設土器を有するI部と、側壁に石組みを行ったII部とにより構成される。I部石組は掘り込みの壁の上方に小さめの河原石をならべたもの。埋設土器は底部を持たない。II部との境界は河原石によって仕切られているが、I部、II部とも底面はほぼ平坦である。

[柱穴状ピット] 第15図①、②、④～⑥のピットは床面からの深さがほぼ一定しており、形状は柱穴状を呈している。配置の形態が、炉の軸をはさんで配置していることから、F J 56住居跡の柱穴であろうと判断された。さらにF H 56炉跡の西方向に位置する③ピットは炉のほぼ延長線上にのることから、あるいは住居に伴うピットである可能性も考えられる。



第16図 F I 56・F J 56炉跡出土土器実測図

第4表 F J 56炉跡周辺ピット一覧表

ピットNo	①	②	③	④	⑤
深さ	36	50	44	48	44

高畠遺跡

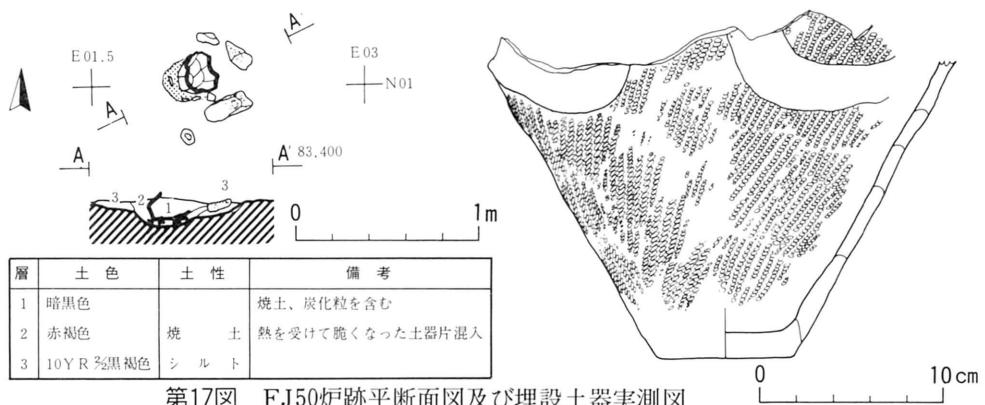
〔出土遺物〕 極めて少ない。16図2は炉の埋設土器である。深鉢の体下部を使用し、底部は欠いている。外面にはR Lの単節縄文が見られる。加熱を受けて脆くなっている。

F J50炉跡（第17図、写真図版3-2）

F I 56炉跡とピット群の西方向に、埋設土器を伴う炉跡を発見した。炉跡は上部を削平されていて僅かな部分が残存したにすぎない。

〔構造〕 第III層面を浅く皿状に掘り込み、土器を斜位に埋設したもの。土器の周囲に数個の河原石が埋置されていることから、石組みを伴う埋設土器炉であったと考えられる。埋設土器の周囲は加熱を受けて焼土化していた。

〔出土遺物〕 埋設土器の他若干の土器小片が出土したにすぎない。17図右は埋設土器実測図



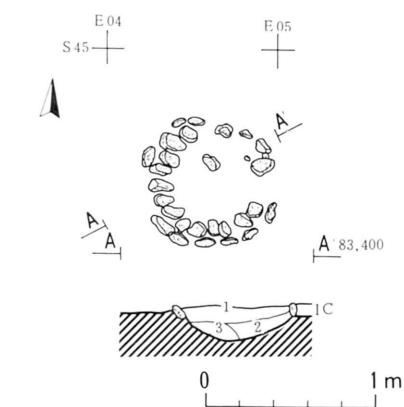
第17図 FJ50炉跡平面図及び埋設土器実測図

である。土器は上半部を欠失した深鉢で体部外面に降帯状に作られた無文部が見られる。地文はR Lの単節縄文である。

GB53炉跡（第18図、写真図版4-3）

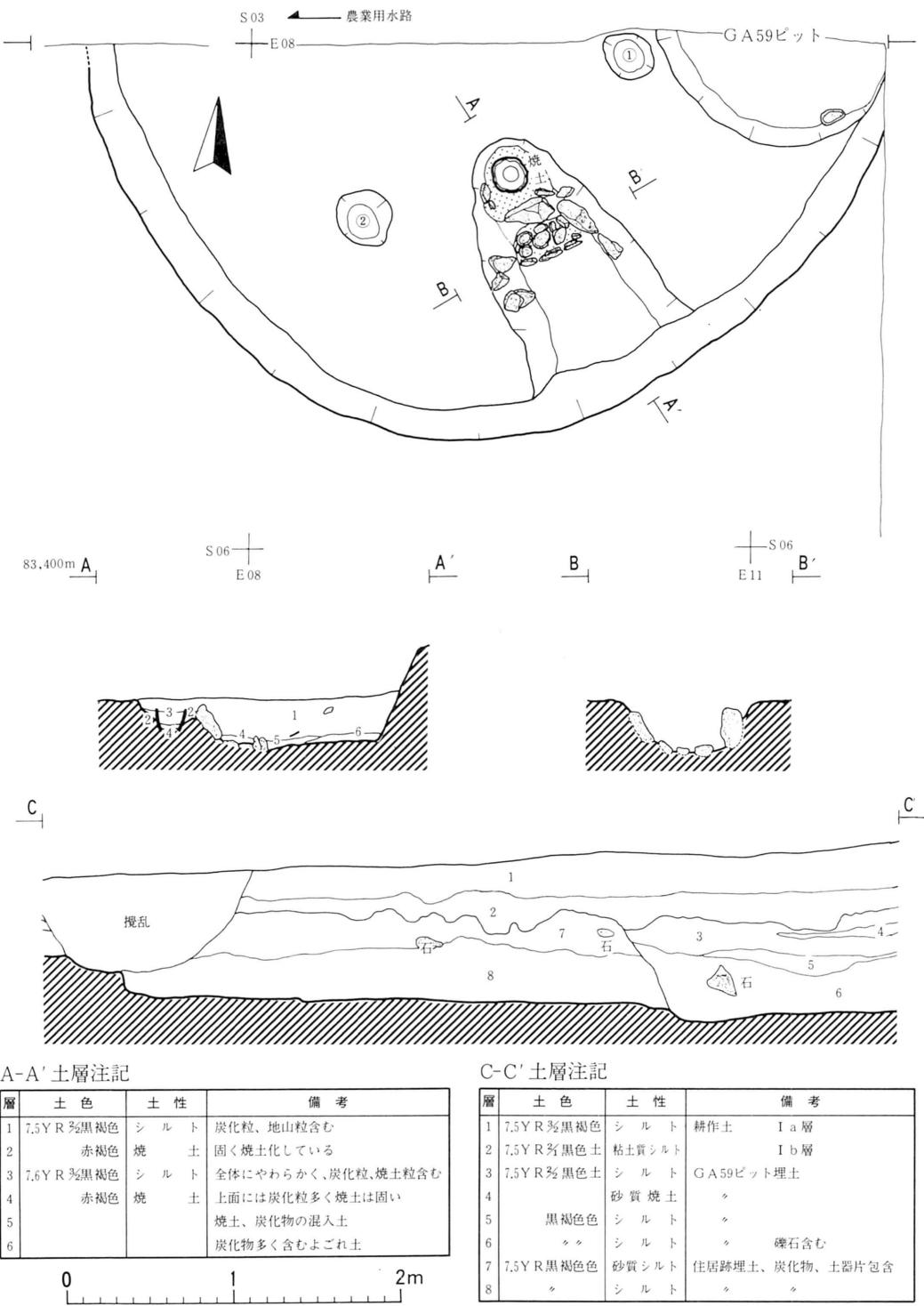
〔遺構の確認〕 G区はリンゴ畠として使用されていた所で、遺跡全体で最も比高の高い部分であり、遺構の保存が比較的良好な部分でもある。このG区粗掘り後、I c層上面で、円形の石組み炉を検出した。住居跡に伴う他の施設は検出されていない。

〔構造〕 地山を直径80cm程円形皿状に掘り窪めて円周部に石組みを行ったものである。石組みは基本的には2列に行なわれているが、部分的には1列となっている箇所もある。内側には丸い厚みのある河原石を



第18図 GB53炉跡平面図

高畠遺跡



第19図 GA56住居跡平面図

高畠遺跡

使用、外側には平たい石を縦に埋めこんである。

〔埋土〕 埋土は大略2層に大別される。上層から東方向の底面までを覆った土層は黒褐色土層で、このうち上層部には焼土、木炭片などを多量混入している。西方向の底面には壁の崩れ土と思われる暗褐色土が堆積していた。

〔出土遺物〕 数片の土器小片が出土したにすぎないが、いずれも中期末葉の土器であった。

G A 56住居跡（第19図、写真図版7）

〔遺構の確認〕 F区、G区の間を流れる用水路のすぐ南側に発見された住居跡で、遺構の北半分は用水路にかかり、検出することができなかった。遺構の検出確認面はIc層上面である。

〔重複〕 本住居跡の東壁付近に重複してG A 59ピットが検出された。このピットは住居跡に伴うものではなく、住居跡の埋土を切り込んでいることから、より新しいものである。

〔平面形・規模〕 遺構の約半分が未検出のため、明言できないが、恐らくは円形～隅丸方形の平面形を呈するものと思われる。軸長は不明だが、幅は4.6～4.8m程度と思われる。

〔主軸方向〕 N-38°-W

〔埋土〕 住居跡の埋土は2層に大別される。上層は黒褐色(7.5YR 2/2)土で、シルト質土。砂質土を含み、軟質。土器片を包含する。下層は上層と近似した色調を呈するが、砂質土の混入が少なくしまりがよい。炭化物を若干含む。

〔壁・周溝〕 検出面からの深さ約30cmで床面に至る。周溝は存在しない。

〔床面〕 第II層面を直接床面とし、貼り床は行っていない。

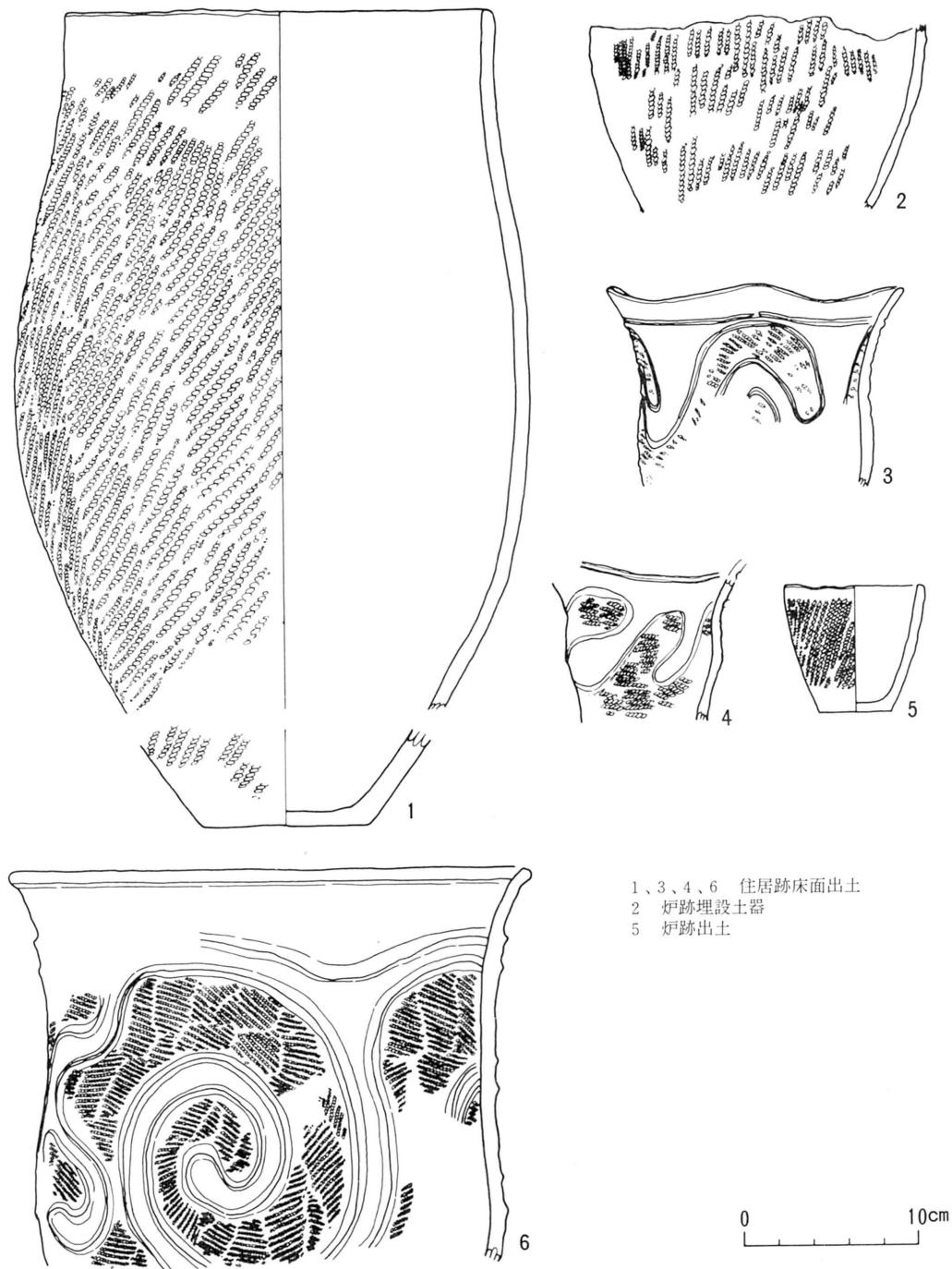
〔柱穴〕 炉の埋設土器部の左右に2つのピットが検出された。いずれも柱穴状のピットで、主柱穴と思われる。

〔炉〕 土器を埋設したI部と、石組み、石敷きを行ったII部とそれに後続するIII部がある。

平面形はI部が半円形を成し、全体では逆「U」の字形に開く。I部…掘り込み中央部に土器が埋設されたもので、土器の周囲は固く焼土化している。II部との境界は大きな河原石によって仕切られている。II部…I部底面よりさらに15cm程掘り下っており、底面に平らな河原石が2列に敷かれ、III部との境にはやはり平らな石が2列立てて埋められている。側壁も大きめの礫が組まれ、この位置までの底面は固く焼土化している。III部は底面が平坦で、焼土の堆積もないが、底面直上の埋土に炭化物が若干混入している。III部の東南端は住居の壁に直接接続する。I～III部ともに埋土の上層は黒褐色土（地山の砂質土粒が混入）が覆い、I部～II部の底面直上は焼土が覆う。

第5表 G A 56住居跡
ピット一覧表

ピットNo	①	②
深さ	4.8	4.0



第20図 GA56住居跡出土土器実測図

高畠遺跡

〔出土遺物〕 床面、埋土から多数の土器片、フレーク（4点）が出土した。土器片は隆線、沈線文主体の縄文中期末の土器片である。第20図に図示した土器はいずれも床面、炉跡から出土した土器類である。1は器高の高い粗製の土器である。胴が大きく脹らみ、口縁部はやや細めに作られほぼ直立する。外面は口縁直下を無文として、RL単節縄文を縦回転している。内、外面にススが付着し、加熱を受けた痕跡が見られる。2は炉跡の埋設土器で、器面の磨滅、剝落が著しく、脆弱化している。口縁部、底部欠失。外面にはRL単節縄文が見られる。3、4はともに沈線により文様区画された小形の深鉢である。3は口縁が波状をなし、頸部に一本の沈線がめぐるもので、体部の文様は4単位で施されている。地文はLRの単節縄文である。4は口縁部、底部とともに欠失しているが、類似した器形と思われる。体部文様にはあまり統一性が見られない。地文はLR単節縄文である。5は炉跡内から出土した小形の粗製土器である。外面はRLの単節縄文が縦回転されている。6は口径30cmと大形の深鉢の上半部である。口縁は平縁をなし、幾分外反している。頸部付近には波状の隆線文がめぐる。体部はやはり隆線により、大渦巻状の文様が展開しているが、隆線はすべて断面三角形状の調整隆線となっている。地文は細かいLRの単節縄文で、隆線による文様区画のち地文回転をしている。この他、床面等から出土した土器片はいずれも3、4、6に代表される様な沈線や調整隆線による曲線文が主体の土器片類であった。

G D 03住居跡（第21図、写真図版8、9）

用地内の西端付近に黒色土の広がりが確認されたため調査を行ったが、降雪等の悪条件も支障して遺構の完全なプランを確認するには至っていない。従って不明瞭な点が少なからず残った。

〔遺構の確認〕 Ib層を精査した結果小石や土器片を多量に混入した黒色土の広がりを発見したもので、遺構の検出確認面はIc層上面となった。

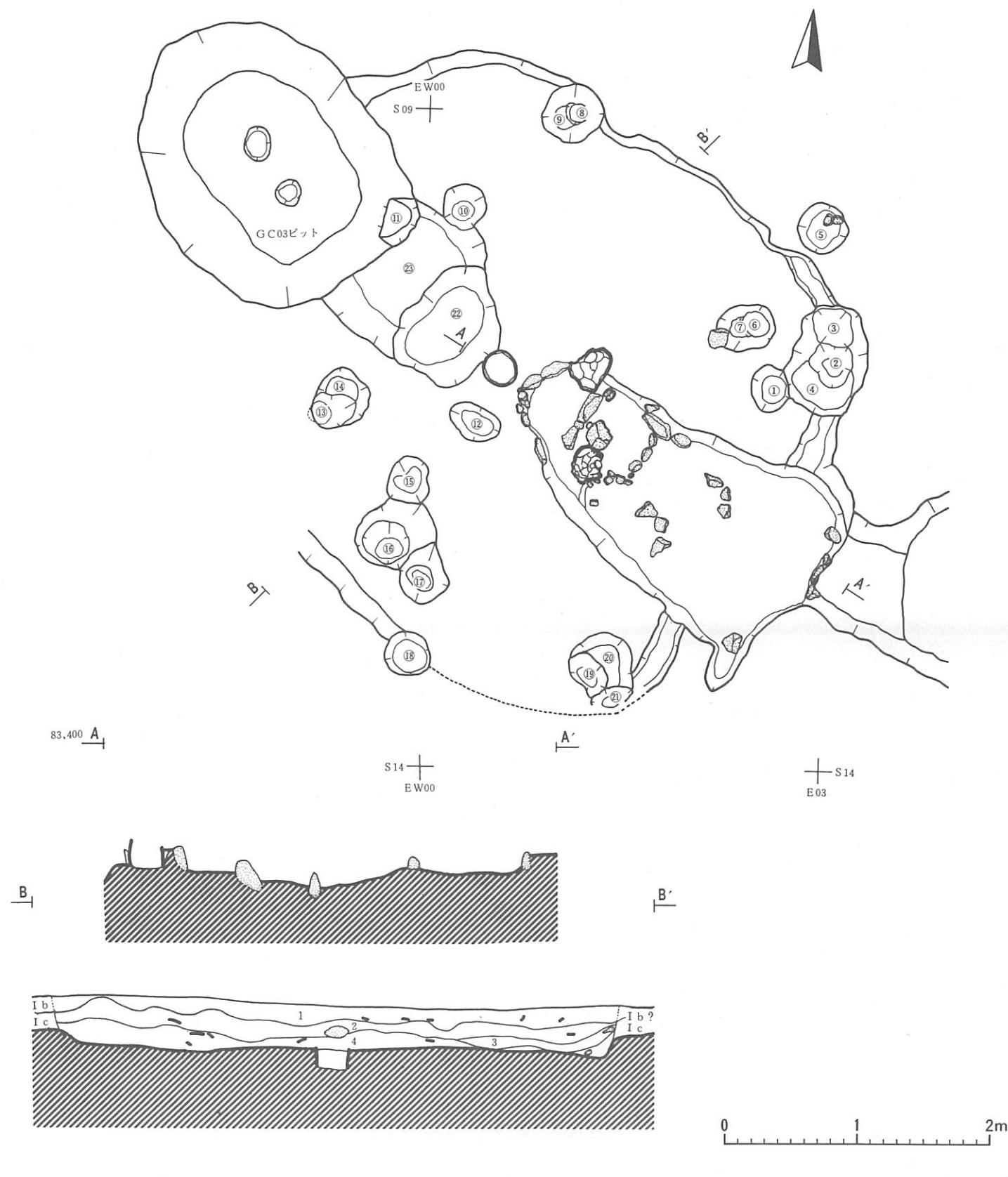
〔平面形・規模〕 平面形は一部不明だが隅丸の長方形を呈すと思われる。規模は軸長 5.2m (炉III部先端から)、幅 4.2m を測る。

〔主軸方向〕 N-51°-W

〔埋土〕 3層に大別される。1層は攪乱、植生根の及んだ黒色土で、軟質である。小石、土器片、木炭を含んでいる。2層は多量の土器片や河原石を包含した黒褐色土層で、焼土ブロック、木炭片も含まれる。廃棄層と考えられた。3層は黒褐色土層で、焼土や木炭層が点在するが、遺物の包含は少ない。

〔壁・床〕 壁高は約10~15cmと浅い。床面は貼り床は行われておらず、僅かな高低差はあるものの大概平坦である。

〔周溝〕 周溝は炉に近い部分にのみ見られ、全周はしていない。深さは床面より5~10cm程



層	色調	土性	備考
1	黒色1 10YR 2/1	シルト	小石、土器、木炭含む軟質。住居跡埋土I層
2	10YR 2/2黑褐色	シルト	土器片、木炭を多量混入。焼土ブロック含む。住居跡埋土II層
3	10YR 2/3黑褐色	シルト	黄褐色(10YR 3/4)との混合層
4	10YR 2/4黑褐色	シルト	焼土、木炭が点在。住居跡埋土III層

第21図 GD03住居跡平面図

度である。

〔柱穴〕 住居跡内及び周辺から23個のピットが検出されている。ピットの深さにはばらつきが見られるが、このうち深さ、形態により柱穴と考えられるピットには②、③、⑤、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑬、⑯、⑲、⑳ピットがあげられる。住居の一画及び周辺に未調査部分を残したため、完全な柱穴配置を得ることはできなかったが、類似した柱穴類をピックアップすると、壁際に位置する②（又は③）、⑧（又は⑨）、⑲と主軸を狭んで対象形に位置する⑩、⑬とによる配置形態が想定できた（⑧に対応する北西壁は未調査）。また②、⑧、⑲等の様に柱穴状のピットが重複する点については柱のつけ換えも考えられるが不明である。

〔その他のピット〕 住居の床面から大型の㉑、㉒ピットを検出した。深さは床面から24cm（㉑）13cm（㉒）と極めて浅いピットである。時期・性格については不明である。

第6表 G D O 3住居跡ピット一覧表

ピットNo.	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
深さ	8	45	47	33	12	50	32	57	47	38	37	6
ピットNo.	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	㉐	㉑	㉒	㉓	㉔
深さ	43	19	7	33	10	23	52	20	27	24	24	13

〔重複〕 明瞭な重複関係が得られた遺構としてはG C 03ピットがある。G C 03ピットは本住居跡を切っており、より新しいものである。他に性格不明の㉑、㉒ピットがあるが、住居跡との時期差は不明である。また前記の様に柱穴状のピットが多数検出されていることから住居跡自体の重複も考えられたが、断定できなかった。

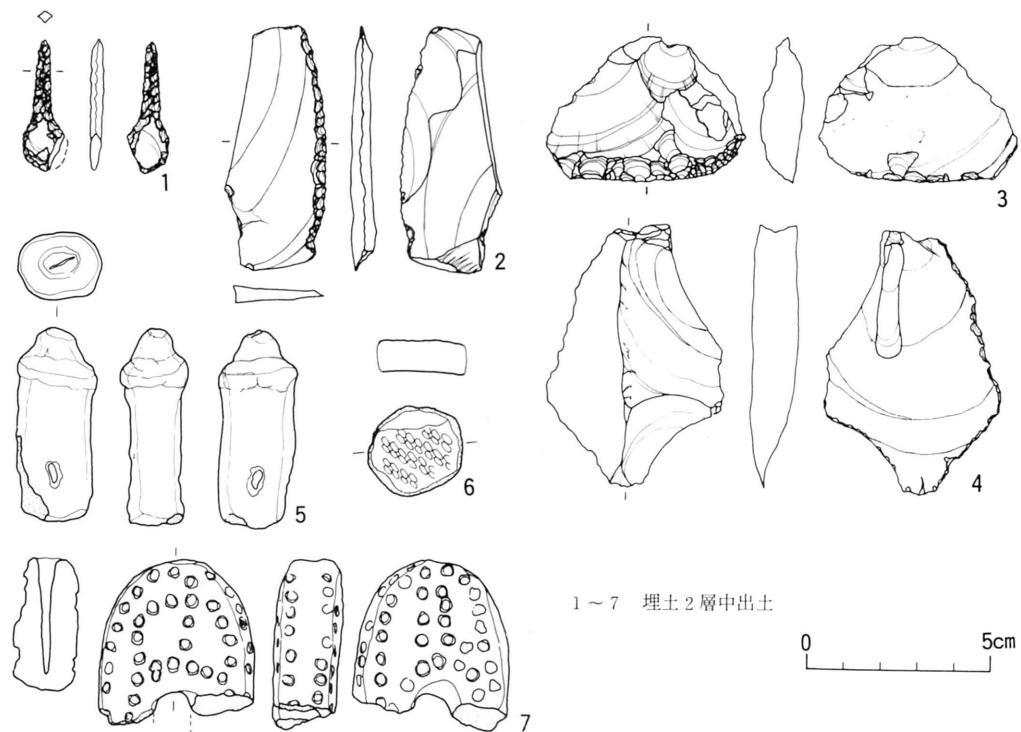
〔炉〕 I～IV部に区分され、最も規模の大きい炉跡である。I部…炉本体からはやや離れた位置に付設された土器埋設炉である。土器は無底で内部には焼土が多量に堆積し、土器の周辺も床面が焼土化していた。II部…石組みを伴う土器埋設部である。掘り込み底面は床面より約15cm程掘り下っており、底面には約6cmの固い焼土が堆積していた。土器は掘り込みの北東壁に横位に埋設されたものである。土器の内部は木炭、焼土がつまっており、周辺も加熱が浸透し焼土化していた。II部との境界は細長い河原石によって仕切られている。III部…III部底面はII部底面より約5cm程さらに掘り下っている。III部もII部同様に簡単な石組みと埋設土器とによって構成される。埋設土器は深鉢の下半部を使用したもので、有底である。IV部…広い前庭部となっている。端部は周溝をつき抜け、住居跡プランの外部に張り出している。IV部の南東壁にも数個の河原石が連ねられていた。IV部底面は床面より約20cm程下っており、周溝底面よりさらに下っているものである。

〔出土遺物〕 本住居跡は最も多数の遺物を出土したが、床面からの出土は少く廃棄層と考えられる2層中からの出土が多かった。土器は床面、埋土出土共に中期末葉のものである。

高畠遺跡



第22図 GD03住居跡出土土器実測図



第23図 GD03住居跡出土遺物実測図

土器（第22図）：1、2、5は2層出土の深鉢形土器である。1は粗製深鉢の上半部で口径41cmと大形である。外面にはLR単節縄文が施され、内面は磨かれている。2は完形で出土した。胴張りのした深鉢で左右に上下2対の釣手状の把手が取り付けられたものである。胴部の下半には1個の貫通孔が見られる。平縁口縁をなし体部上半には隆線状の文様区画線が走り、地文部、無文部の文様区画がなされている。5は口縁が緩やかな波状をなす形態である。沈線による文様区画が行われ、沈線の一部が弧状隆起文に変化している。地文はRL単節縄文縦回転。7は口径9cm、器高8.5cmの小形土器である。内外面とも無文でナデ・ミガキにより器面調整されている。3、4、6は炉跡埋設土器である。3は底部欠損、全体に加熱により赤色化し、極めて脆い。口縁は波状をなし、体部上半に細い沈線による文様区画が展開している。地文はLRの単節縄文縦回転である。4は口縁、底部ともに欠損。外面には断面三角形状の調整隆線が施され、隆線間はナデられて無文部となっている。地文はRL単節縄文で不整方向に回転されている。6は深鉢下半で、外面はRL単節縄文縦回転。器面にカーボンが付着している。

石器（第23図）：1は石錐（II類）である。錐部は断面菱形に両面から作り出されている。基部は一部欠損しているが、周縁を両面からの押圧剝離によって加工したものである。使用による磨耗はほとんど見られない。2はサイドスクレーパー（IV類）である。縦長のブレード様の

高畠遺跡

剝片を素材とし一辺にのみ押圧剝離による刃部加工を行ったものである。刃部は肉薄である。基部の一部は両面からの僅かな押圧剝離による抉入が行われツマミ状の形態が作られている。3はIVc類に含まれるスクレーパーで横長の台形状の剝片を使用し、長辺に片面からの刃部加工が行われている。刃部は肉厚である。4は使用痕のあるフレークである。

土製品 (23図5~7) : 5は異形の土製品である。粘土を棒状にまるめて形作った男根状の土製品で、長さ5cm、径1.5~2.0cmを測る。上部は亀頭状を呈し先端には長さ5mm程の沈線がみられ、下部には 5×2 mm程の孔が1個貫通している。6は円盤状の土製品で、土器の小片を利用し周縁を擦って形作ったものである。7は欠損品であるが、残存部は橢円形状を呈し、中央部が丸く抉入されている。表裏側面ともに竹管状の工具で刺突が行われている。頭部から一本の孔が穿たれているが、貫通はされていない。

GE 53住居跡 (第24図、写真図版10)

〔遺構の確認〕 G区粗掘りの結果、Ic層上面で、G F 53グリッドを中心に、土器片が集中出土したため、周囲の精査を行った所、円形に近いと思われる黒褐色土の括がりが認められた。住居跡と判断して内部の掘り込みを行ったが、遺構の保存状態は良好であった。

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ隅丸方形を呈し、軸長5.4m、幅5mとやや東西に長い。

〔長軸方向〕 N-31°-W

〔埋土〕 大略2層に大別される。上層は黒褐色シルト質土である。粘性がなく、土器片・小石を多量に包含している。下層は暗赤褐色を呈したやや粘性のある粘土質シルトで、やはり土器片・小石を含む。

〔壁〕 壁高約40~30cm、約78°の傾斜で床面に至る。

〔周溝〕 北西隅付近を残して、壁際をめぐる。床面からの深さは一定ではなく6~20cm程の深さをとる。また炉に続く部分の周溝は床面からの深さ約50cmと一段と深く掘り込まれている。周溝部の埋土は砂まじりのシルト質土で暗褐色(7.5YR 3/3)を呈す。

〔柱穴〕 住居跡内から合計11個のピットが検出されているが、ピットの埋土や深さの度合から②、③、⑥(又は⑧か?)、⑪が主柱穴にあたり、④、⑤が加わるものと考えられる。この柱穴の配置はFG 50住居跡と全く同様で、炉の延長線をほぼ中心線として左右に2個ずつ、炉の反対方向に2個(④、⑤)を配置した規則的な形態をとっている。

〔重複〕 住居の床面、壁際に柱穴以外のピットが数個検出されている。これらは性格が明瞭ではなく、明確な重複とはいえない。

〔炉〕 炉はI部に埋設土器、II部に石組みを有するものである。平面形はI部が半円形、それに続くII・III部が扇形に開くという形態をとる。

I部…床面より深さ10~15cm程浅く窪めた底面に土器を埋設したもので、土器の周囲の底面



第24図 GE53住居跡平面図

第7表 GE53住居跡ピット一覧表

ピットNo.	①	②		③		④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
深さ	31	46		50		23	22	40	22	37	35	9	50	
(層)	上層	上層	下層	上層	下層									
土色	黒褐色 7.5YR 3/1	黒褐色 7.5YR 3/1	黒褐色 7.5YR 3/1	黒褐色 7.5YR 3/1	黒褐色 7.5YR 3/1						黒褐色 7.5YR 3/1		黒褐色 7.5YR 3/1	
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト						シルト		シルト	
備考	炭化物 焼土 多量混入	炭化物・褐 色シルトブ ロック混入	褐色シルト ブロック混 入無	炭化物・褐 色シルトブ ロック混入	褐色シルト ブロック混 入無				擾乱か?		炭化物・褐 色シルトブ ロック混入	焼土下 検出	炭化物・褐 色シルトブ ロック混入	

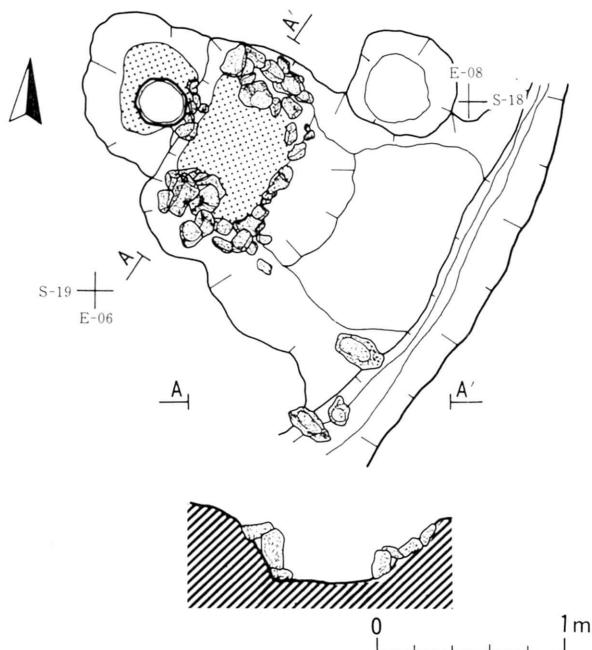
直上には焼土が堆積している。II部… I部底面よりさらに15cm程下がった面がII部底面となる。II部は、I部に接した壁と両側壁とに河原石が乱積みされており、III部方向の落ち込み底面にも一列に石組みが行われている（第25図）。調査途上、II部の埋土中には多数の河原石が落ち込んでおり（第24図平面図参照）、これを取り除いた結果石積みが明らかになったものである。第24図の集石は恐らくは住居廃絶後に炉の施設が崩壊して落ち込んだものであり、かつては炉の施設はより堅牢なものであったと思われる。II部にも焼土の堆積は顕著である。III部… II部に比して底面は一段高くなっている。

平坦で、焼土の堆積は見られない。

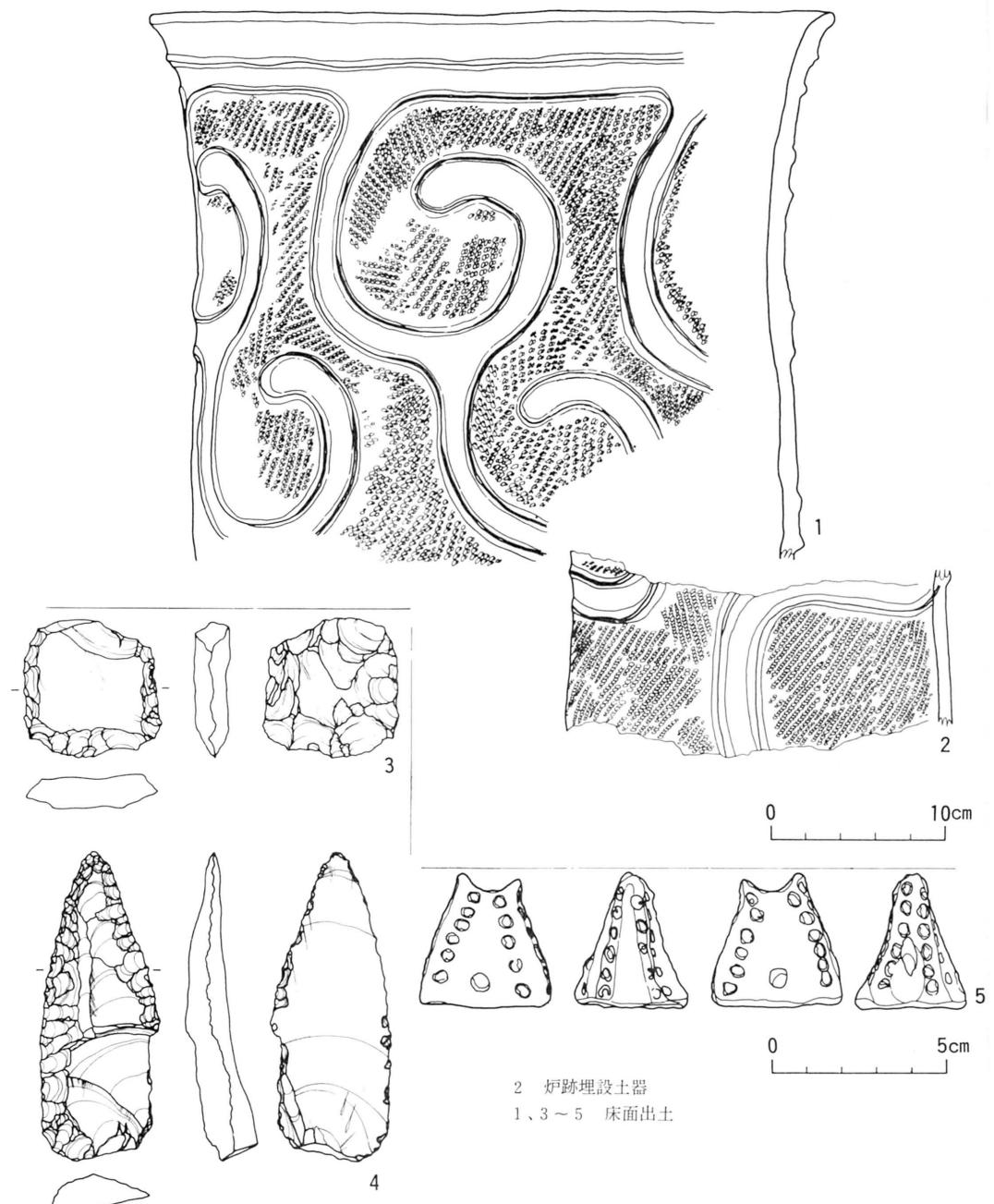
III部の端部は周溝に接続する。

〔その他〕 ピット①は炉の壁に接して作られたピットで、埋土中に炭化物や焼土が多量に包含されていた。他の柱穴状ピットとは性格が異なり炉に付随した某かのピットである可能性が濃い。

また床面中央部には1.3×1.1mの範囲に渡って焼土が堆積していた。焼土の厚さは3～4cm程あり、焼土下には直径約40cm、底径約20cm、深さ10cm程の浅いピットが検出された。ピット内にも焼土が堆積しており、



第25図 GE53住居跡炉跡平断面図



第26図 G E53住居跡出土実測図

このピットを中心に地床炉として使用されていた可能性が考えられる。

〔出土遺物〕

土器：第26図の他土器片は多数出土したが、調整隆線や沈線によって描かれた文様区分を有する縄文中期末の土器片であった。26図1は口径約40cmと大形の土器であるが、上半部の約 $\frac{1}{2}$ が残存したにすぎないものである。口縁は平縁をなし、僅かに外反する。頸部は一本の隆線がめぐり、体部は渦巻状の文様が上下に描かれている。文様単位は5か？地文はR L Rの複節縄文が施されている。隆線による文様区画の後に地文回転されたもの。焼成は良好で堅緻である。床面の壁際から出土した。2は炉の埋設土器で、深鉢の体部である。外面には調整隆線による文様区画が見られる。地文はR L 単節縄文である。

石器：3は尖頭形の形状を呈する石器である。下面にプラットホームを残し、縦長剥片を素材として両側縁及び尖頭部を片面からの加工により刃部調整している。裏面は第一次剥離面をそのまま残すが、両側縁には使用によると思われる小剥離が見られ、側縁は刃滑れも顕著である。これに比して先端部の損耗は甚しく、側縁の刃部が第一義的な機能を有したと考えられた(IV b類)。4－不整の方形状を呈する石器で、上下、両側縁に刃部様の加工が行われている。両側縁は刃滑れの痕跡、及び使用の痕跡が明瞭であるが、上下は剥離が新しく二次的である。欠損後、上下を調整し、再利用を意図したものと考えられるが、使用の痕跡は見られない。

土製品：5は三角形状の土製品で、上端はUの字状をなしている。正・背・両側面には2列の刺突文が施され、正面から背面にかけては1個の貫通孔が穿たれている。用途は不明である。

G H 56住居跡（第28図、写真図版11、12－1）

〔遺構の確認〕 I c層上面で遺構が検出された。遺構の東側は用地外に伸びており、プランの約 $\frac{1}{3}$ の検出となった。

〔平面形・規模〕 平面形は不整円形～隅丸方形になると想定される。規模は推定値で軸長4.7m、幅4.5～5m程と思われる。

〔主軸方向〕 W-40°-N

〔埋土〕 埋土は大きく4層に大別される。

1層：黒褐色シルト質土で、部分的に黄褐色シルト質土が混入する。

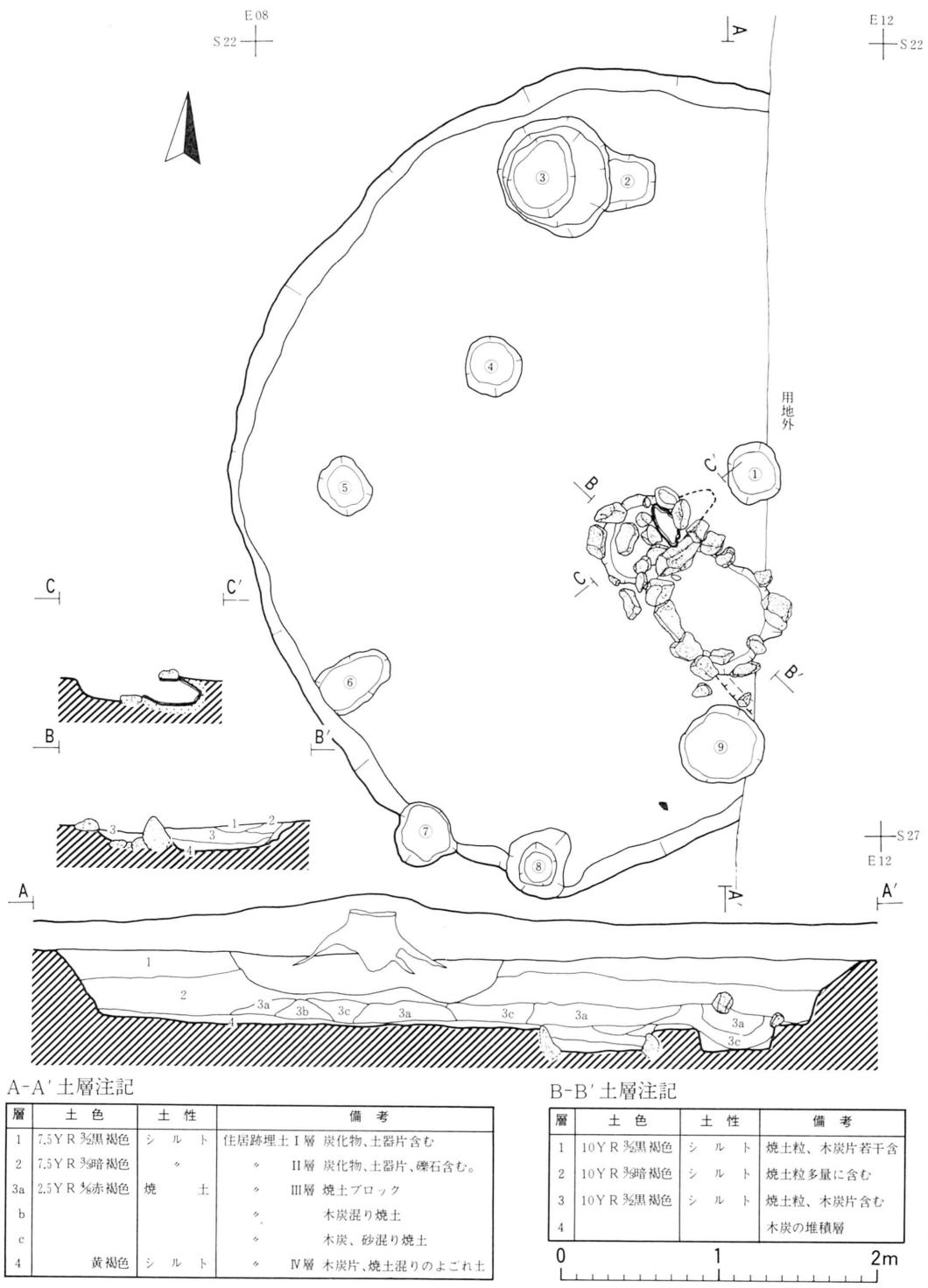
2層：暗褐色シルト質。木炭粒混入。土器片、礫等を包含している。

3層：床面上を覆う焼土・木炭層である。厚さは約25cm程に及ぶ。焼土の検出状況は第27図に図示した様に大きなブロック(3a)となって床面上に広がっていたもので、焼土のブロックの周辺は木炭混りの焼土(3b、3c)が広がっていた。焼土、木炭の検出状況から、3層は住居が火災によって焼失したことにより形成されたものと考えられる。



第27図 GH56住居跡焼土分布図

高畠遺跡



第28図 G H56住居跡平面図

4層：住居の底面直上に広がる薄い層で黄褐色シルトの汚れ土で形成されている。4層上面が住居の生活面と考えられ、3層下、4層上面に土器片・石器・礫などが散在していた。

〔壁〕 残存壁高約40cm、壁の上部は崩れ落ちて緩やかな傾斜となっているが、下部は約54°の傾斜で床面に到る。

〔周溝〕 存在しない。

〔柱穴〕 住居跡内からピットが9個検出されているが、いずれも深さ、埋土に差異があり、また配列に規則性も認められず、明確に柱穴を断定できるものはなかった。(③)のピットについては床面からの深さ54cmと深く、ピットの埋土中に木炭を含み、さらに上部に焼土を混入していることから、恐らく火災によって焼失したものと考えられ、柱穴にあたるものと思われる。同様の埋土から④、⑤、⑧(土層の注記不備のため深さより推定)を柱穴に想定した。④は炉の延長線上に位置するピットである。

第8表 GH50住居跡ピット一覧表

ピットNo.	①	②	③		④	⑤		⑥	⑦	⑧	⑨
深さ	26	10	54		14	19		12	7	23	16
(層)			上層	下層		上層	下層				
土色			暗褐色 7.5Y R3/3	黒褐色 7.5Y R3/2	黒 7.5Y R2/1	黒 10Y R2/1	褐色 10Y R4/4				
土性			砂質土混 入 シルト	シルト	シルト	シルト	砂質土混 り シルト				
備考			焼土・木 炭混入	木炭混入	木炭混入	焼土・木 炭混入					

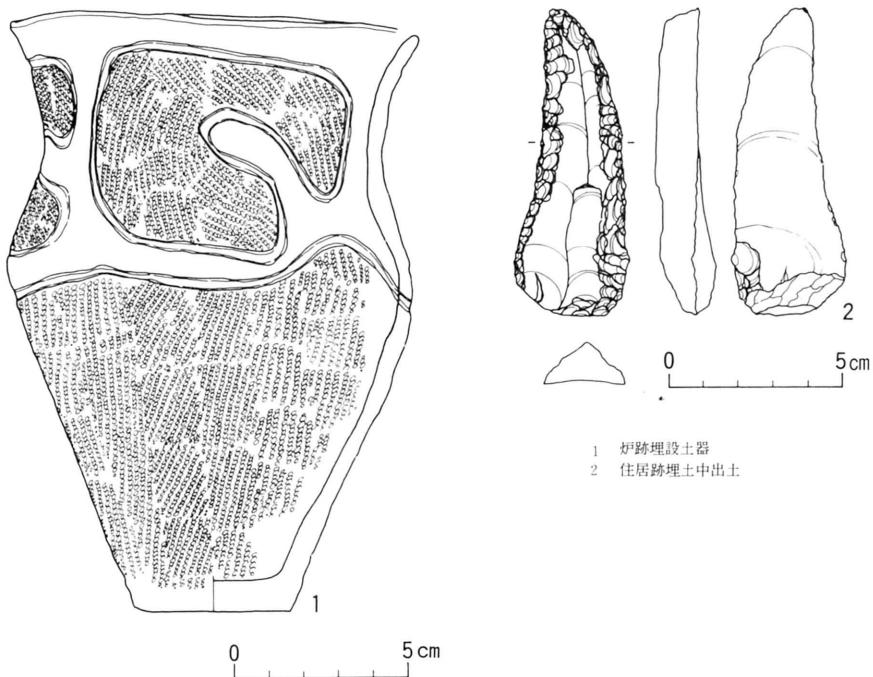
〔炉〕 炉はI部、II部は明瞭に検出できたが、III部はほとんどが用地外にかかっていて検出ができなかった。I部…円形に石組みがなされ、東壁に土器が埋設されている。埋設土器はI部の壁を掘り込んで、土器を横位に設置し、上部を土と石で固定したものである。埋設土器の周囲の土は固く焼土化し、使用の痕跡が明瞭である。石組み内の底面には数個の石が敷かれているが、焼土はほとんど堆積していない。II部…長さ80cm、幅60cm、床面よりの深さ15cmの規模で掘り込まれており、壁には石組みがなされている。II部の底面上には木炭が厚さ6cm程度で堆積しているが、焼土は見られなかった。

〔出土遺物〕 出土遺物は土器・石器ともに比較的少なく、図示遺物の他は縄文中期末の土器片とフレーク一点が出土している。

土器：1は炉の埋設土器である。底径が小さく、器高の高い深鉢で、胴部が強く張り出し、一

高畠遺跡

度内傾し、口縁部が再び外反する器形をとる。文様帶は頸部付近から体部中半で終結し、波状の沈線によって地文部との境界線をなしている。文様単位は4。外面の無文部、内面ともに丁寧なミガキが施され、胎土・焼成ともに良好である。地文はR L 単節縄文縦回転である。



第29図 G H 56住居跡出土遺物実測図

石器：尖頭形を呈したスクレーパー（IV b類）である。下面にプラットホームを残し、縦長の剥片を素材として、両側縁、先端部に刃部加工が行われている。しかし先端部の損耗は少なく両側縁の刃滑れの痕跡が顕著である。刃部角は大きく剝挫器としての機能を有すると考えられる。

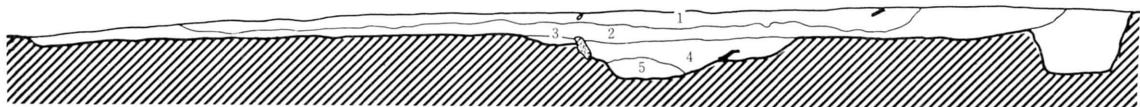
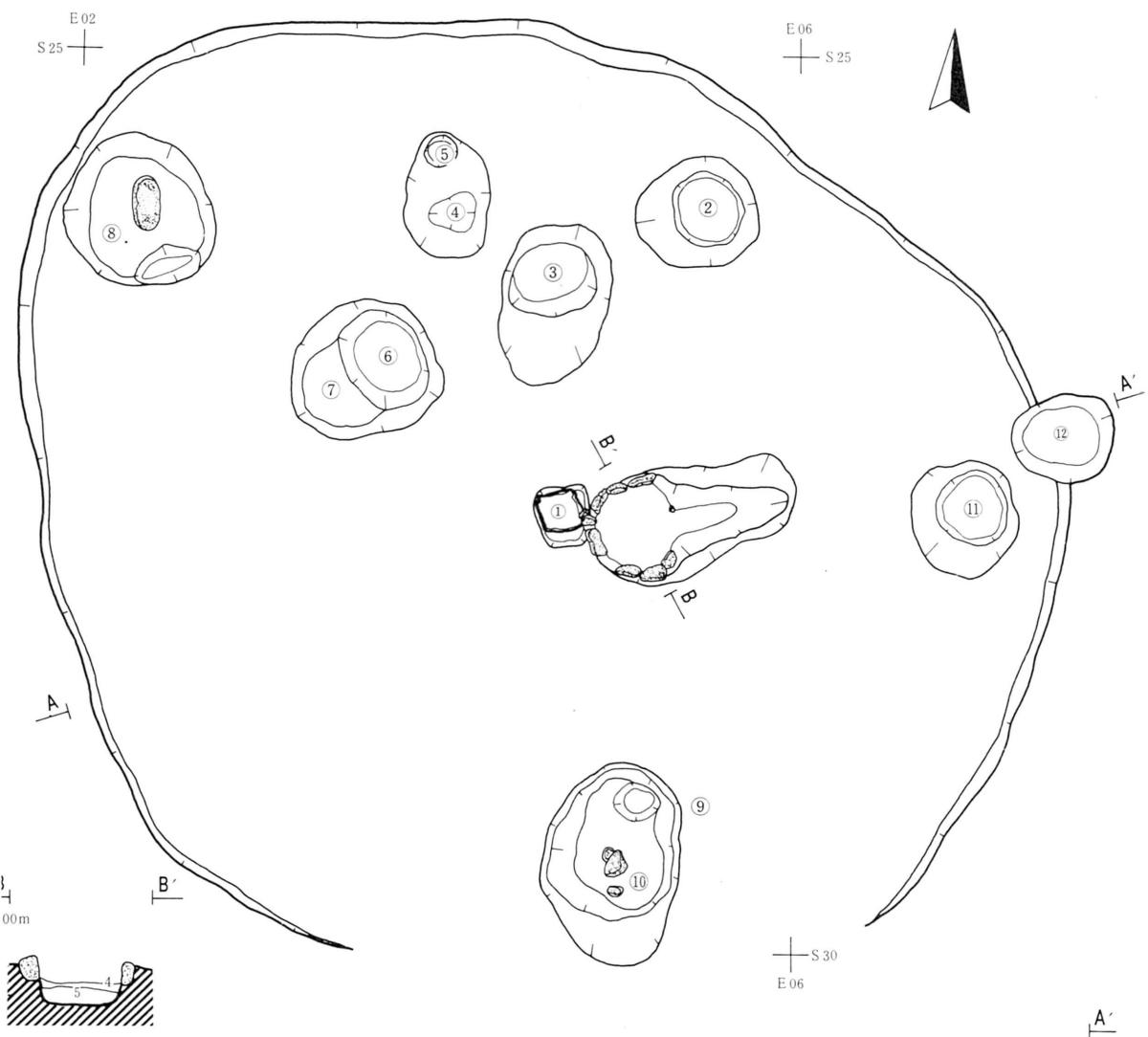
G I 50住居跡（第30図、写真図版12-2、3）

〔遺構の確認〕 耕土排除後の第I c層上面でG I 53、G J 53グリッドを中心に土器片、礫が集中散布する黒褐色土の広がりを発見し精査を行った結果、住居跡が確認されたものである。遺構の残存部は浅く、壁の立ち上がりも不明瞭であった。

〔平面形・規模〕 平面形は不整形を呈していて、軸長が約6.1m、幅約5.2mの規模を有する。

〔主軸方向〕 W-21°-S

〔埋土〕 埋土は上下2層に大別される。上層は畑の耕作によって攪乱を受けて植物痕が多く混入している。色調は黒色を呈し、多数の土器片、礫を含む。下層は黒色土を混入した褐色の砂質土層である。遺物の混入は極めて少ない。



層	土色	土性	備考
1	10YR 3/2黑色土	シルト	耕作による擾乱及び土器片包含
2	10YR 4/2褐色土	砂質シルト	
3		砂質焼土	
4	褐色土	砂質シルト	土器片、焼土粒、木炭片若干含む
5	暗褐色土	ク	木炭片 多量に含む
6		ク	木炭片 若干含む

0 1 2m

第30図 GI50住居跡平面図

高畠遺跡

〔壁〕 壁は約5 cmと極めて浅く、さらに南端では削平されて消失しており、保存状態は不良である。

〔床面・周溝〕 床面は平坦で貼床は持たない。周溝は存在しない。

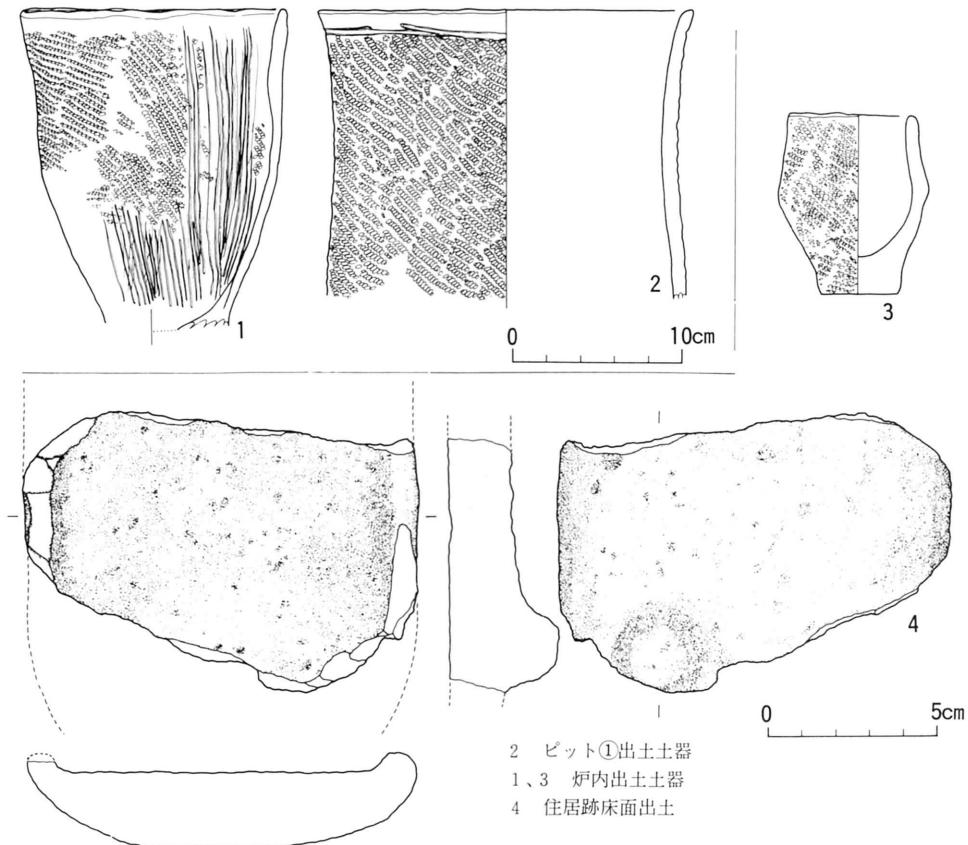
〔柱穴〕 住居跡内及び壁付近から12個のピットを検出しているが、③ピットと⑨（あるいは⑩ピット）が深き、埋土の状況から柱穴にあたると考えた。その他のピットについては深さ、埋土状況にそれぞれ差異があり、柱穴と認定するには到らなかった。この結果、炉跡を狭んで左右一対の柱穴配置が得られた。

第9表 G I 5 0住居跡ピット一覧表

ピットNo.	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
深さ	20	36	55	26	18	57	24	34	53	46	20	21
土色		褐色 7.5YR 4/4	黒褐色 7.5YR 2/2		黒褐色 7.5YR 2/2	黒褐色 5YR 3/1	赤黒色 2.5YR 1.7/1			黒褐色 5YR 2/1	黒褐色 7.5YR 3/2	
土性	砂質 シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト				シルト	シルト	
備考		土器片 含む	木炭混入 土器片混 入				攪乱か ?	木炭 焼土 少量混入		木炭少 量混入	木炭少 量混入	

〔炉跡〕 炉跡は住居の床面中央部付近より検出された。半円形の石組みを伴う落ち込みとそれに後続する細長く浅い落ち込み部分とからなる。石組み内部の落ち込みには焼土は堆積しておらず、木炭が多量に堆積していた。炉跡の北西に隣接する①ピットはピット内に大型の土器片が横倒しの状態で入り込んでおり、この上部に焼土が見られた。また①ピットの周辺も焼土化していたことなどから、本住居跡の炉 I 部を①ピットに置き、石組み部分を II a 部、それに続く落ち込みの部分を II b 部とした。

〔出土遺物〕 床面からの出土遺物は極めて少ない。第31図 1、3 は炉跡内出土土器である。1 は小形の深鉢で、底部欠損品。外面は L R の単節縄文を回転の後、一部櫛歯状の沈線文が刻まれている。焼成は良く堅く焼きしまっているが、加熱、使用のため器面が剥落している。3 は器高 5.4cm のミニチュア土器である。ほぼ完形で出土した。底部は厚く作られ、胴張りした器形をとっている。外面は L R の単節縄文が施されている。2 は①ピットから出土した土器である。外面の口縁部に一本の沈線がめぐり、その下方は地文帯となっている。地文は L R 単節縄文で縦回転。加熱により脆弱化が著しい。4 は床面出土の石皿で両端を欠失している。石質は粗粒凝灰岩を使用。上面は隆起させた周縁を持ち内部は平坦である。下面には丸い小さな足



第31図 GI50住居跡出土遺物実測図

を持つ。

〔2〕 土壌（第32・33図、写真図版13）

F I 区～G C 区に集中して 9 個の土壌を発見した。形状や埋土にはそれぞれ差異があり、一律に述べられない向きがあるため、主として埋土状況からグルーピングして記述する。また個別の土壌類の規模については第10表に提示した。

〈A〉 平面形は不整円形～不整楕円形を呈し、断面はシャーレー型を呈する土壌類で、埋土中に多量の焼土（あるいは炭化物）を含み、土器や礫を混入したもの。

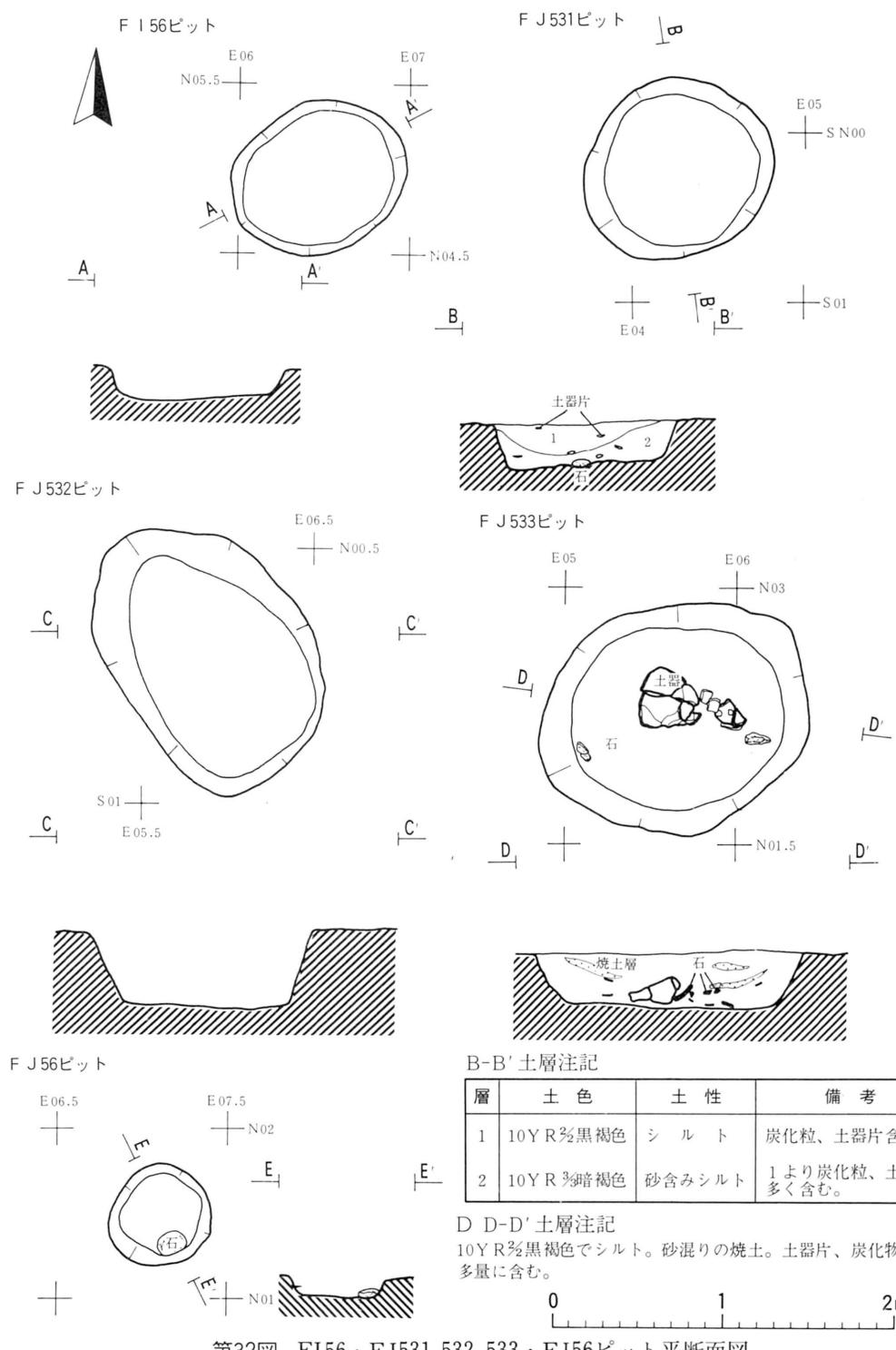
F I 56ピット 極めて浅く詳細は不明瞭である。

F J 531ピット 基本的にはほぼ单一な埋土で占められている。底面に土器片、河原石などが見られ、埋土中には多量の炭化物、土器片、川原石を含むものである。

F J 532ピット 不整の楕円形を呈しているが、ほぼ F J 531 と同類のピットである。

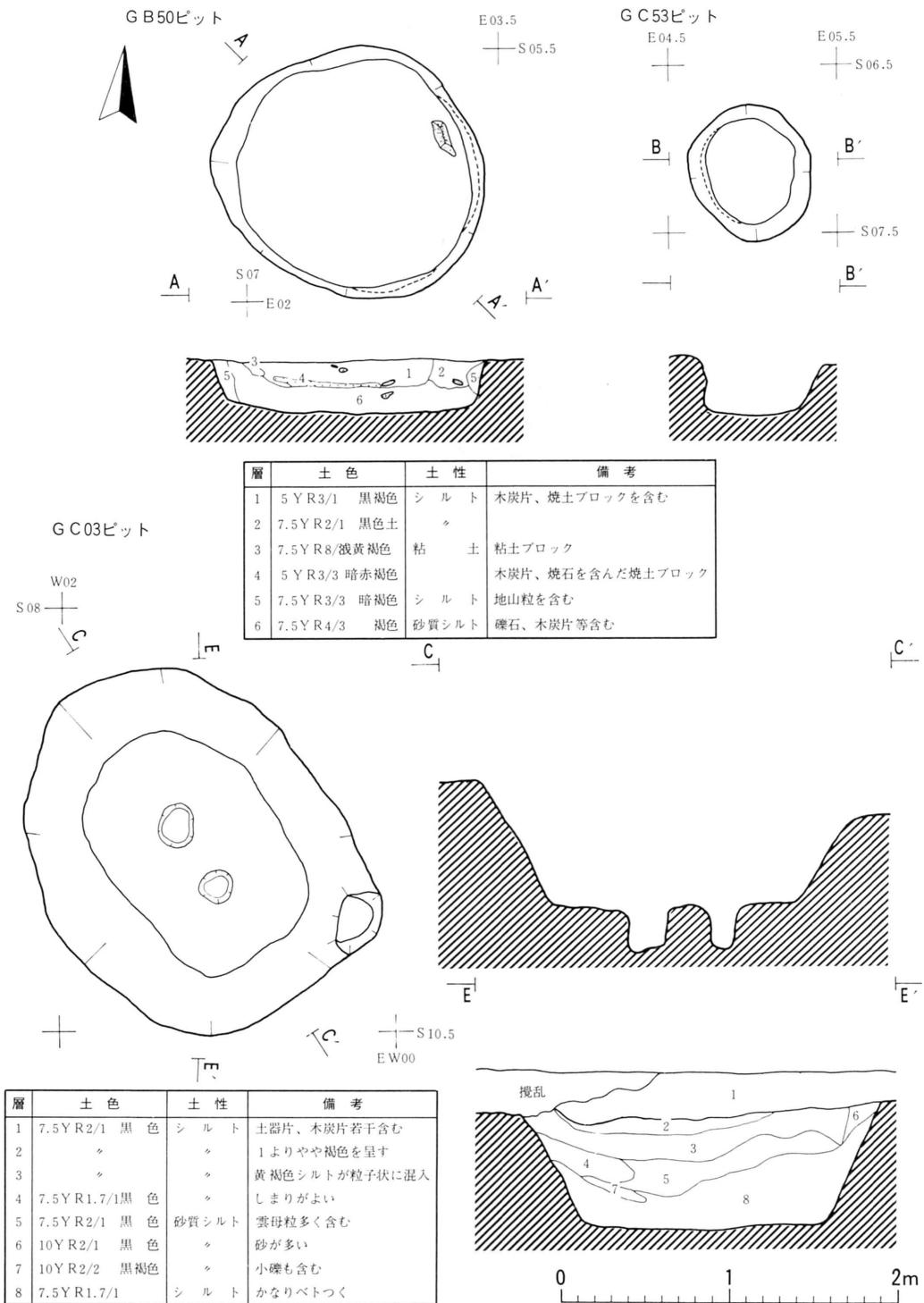
F J 533ピット F J 531ピットと同様にほぼ单一な埋土で占められている。埋土中にレンズ状に入り込んだ焼土ブロックが見られる。焼土は固くしまった純粹な焼土ブロックではなく砂質

高畠遺跡



第32図 FI56・FJ531,532,533・FJ56ピット平断面図

高畠遺跡



第33図 GB50・GC53・GC03ピット平断面図

高畠遺跡

土を混入したものである。やはり土器片、河原石、炭化物を含んでいるが、埋土下部からは土器の大破片が出土した（第34図）。

G A 59ピット（第19図） G A 56住居跡と重複し、これを切り込んだピットである。上下層ともほぼ同質の黒褐色土で埋まり、埋土中に厚い炭化物層、焼土層が入り込んでいる。

G B 50ピット 上下2層に大別されるが、上層は人為的様相が濃い。下層中には焼けた河原石等が混入している。埋土の中間にレンズ状に焼土を多量含む暗赤褐色土層が入り込んでいるが焼土は純粋ではなく褐色土と混り合ったものであった。またこの面に土器片など多く見られた。上層は炭化物、焼土粒、河原石等が混入したものである。

第10表 土壌計測値一覧表

ピットNo.	開口部(m)	底面(m)	深さ(m)	ピットNo.	開口部(m)	底面(m)	深さ(m)
F I 5 6	1.06×0.86	0.9×0.75	0.18	F J 5 6	0.6×0.58	0.45×0.44	0.12
F J 5 3 1	1.15×1.04	0.9×0.91	0.25	GB 5 0	1.63×1.49	1.38×1.32	0.32
F J 5 3 2	1.63×1.12	1.36×0.87	0.45	GC 5 3	0.82×0.72	0.62×0.51	0.34
F J 5 3 3	1.66×1.33	1.22×1.11	0.32	GC 0 3	2.23×1.77	1.46×1.0	0.7

〈B〉 大形の土壌で、底面に小ピットを有するものである。

B C 03ピット 底面形はほぼ隅丸方形を呈し、断面形は擂鉢状に緩く傾斜した壁を持つ。底面には直径20cm内外、深さ30cm程度の小ピットを2個有する。埋土はほぼ同質の黒～黒褐色シルトで埋まり、遺物の包含は極めて少ない。またAのピット類で見られた炭化物、焼土の混入も無である。B C 03住居跡と重複し、これを切り込んでいる。

〈C〉 A、Bいずれにも属さない小土壌を含めた（F J 56、G C 53ピット）。詳細は明らかでない。

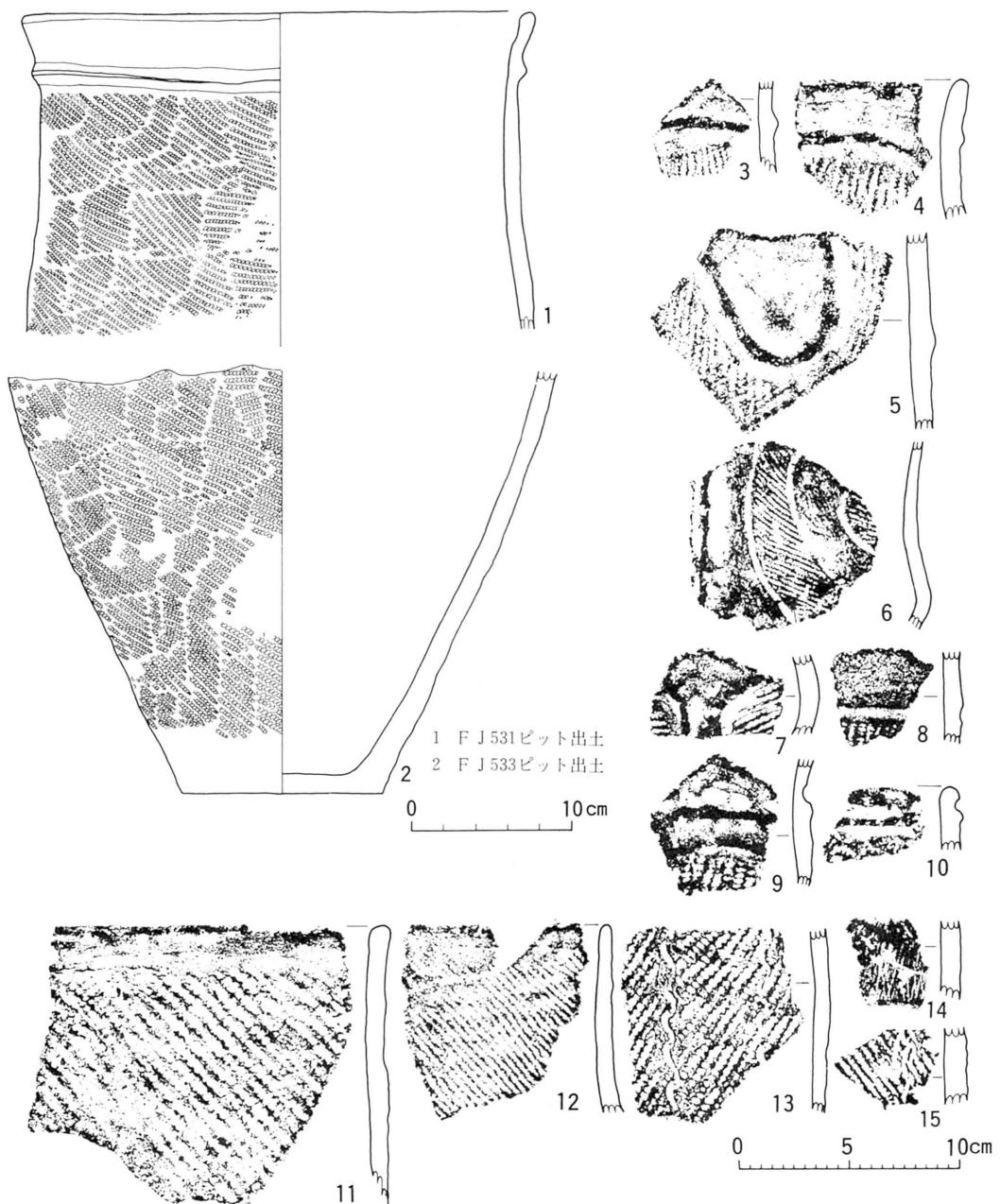
〔出土遺物〕 主としてAのピット類から土器片が出土した。実測可能な土器は少ないが、土器片はいずれも縄文中期末の土器である。

第34図1はF J 531ピット出土土器で、加熱を受けた痕跡があり、又磨滅も著しい。器形は胴張りのした深鉢で口縁部は外反する。頸部に一本の隆線が走り、下方はL R 単節縄文の地方帶となっている。2はF J 533ピット出土の土器下半部で、やはり磨滅が著しい。地文はL R 単節である。

〔3〕 遺構外出土遺物（第35図）

35図はG区の耕土除去中に出土した遺物類である。

土製品： 1は円盤状の土製品で、円盤の周縁は磨られている。表面にはR Lの単節縄文が見られた。2はやはり円形の土製品であるが、土器片の再利用ではなく、手捏ねで作られ表面はケズリの痕跡が見られる。中央に一個の貫通孔がある。3は一部が欠損しているがスプーン状の

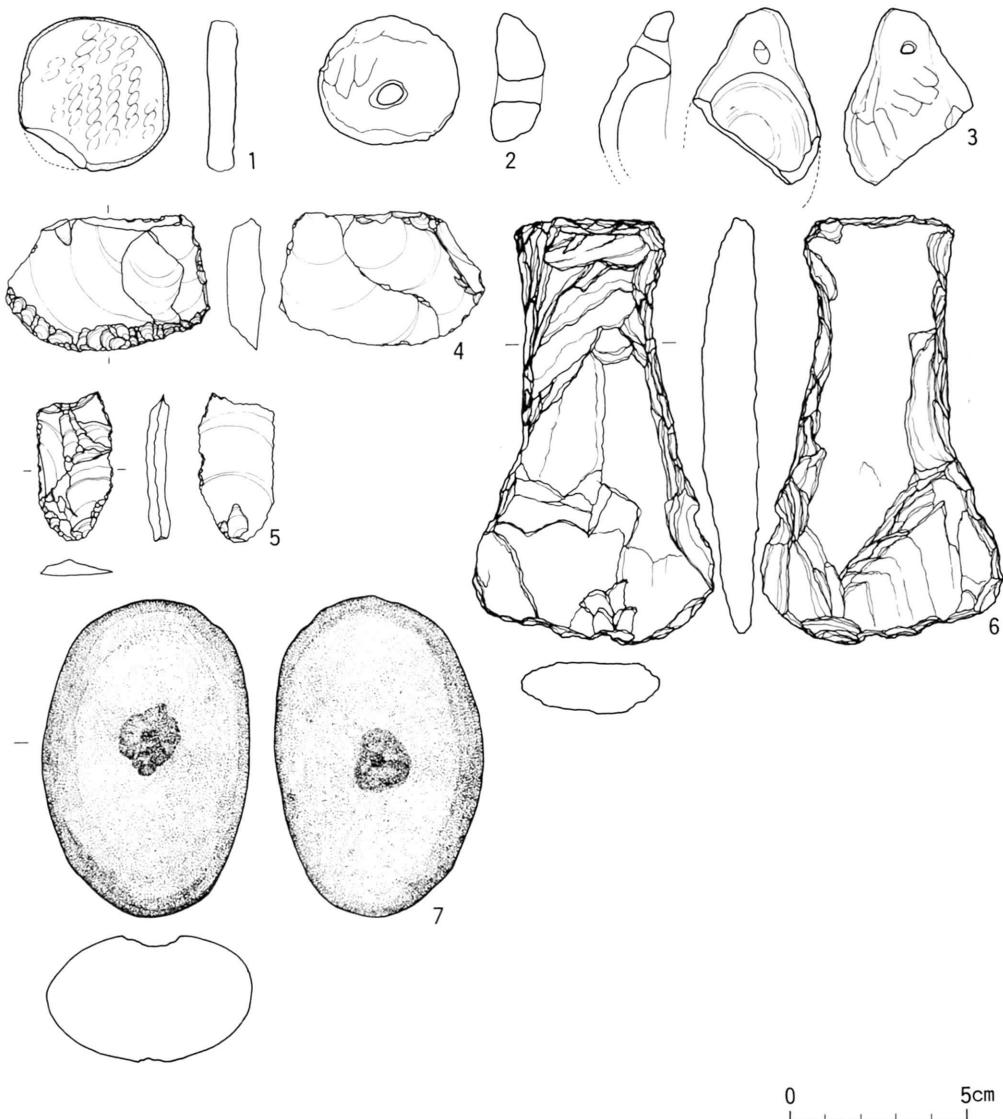


第34図 ピット類出土土器実測図及び拓影図

高畠遺跡

土製品である。基部に一つの貫通孔が見られる。

石器：4はIVc類のスクレーパーである。剥片の片面にのみ刃部加工が行われている。刃部は緩い弧状をなすもので、刃部角は比較的薄い。5は使用痕の見られるフレークである。両側邊に使用によると思われる微少剝離が見られる。6は打製石斧で、粗い調整剝離により形作られている。刃部の損耗は顕著であるが、基部には着柄による摩滅は観察されない。7は凹み石で両面の中央部に凹みが作られている。



第35図 遺構外出土遺物

IV. 考察

高畠遺跡は北上川と添市川の合流する付近に位置し、これらの河川により形成された低位段丘上に立地した縄文時代の集落跡であった。発見された遺構は住居跡8棟(F J 56戸を含めて)、単独炉(住居跡に伴う他の施設を有さない炉)4個、土壙9基、その他小ピットである。これらの遺構はその共伴する出土土器の概観から縄文時代中期末葉(大木10式期)に位置づけられるものである。遺構の分布はグリッド配置図に見る様にF区、G区にのみ集中するものであった。しかし、広範な段丘上に集落全体がどの様な在り方をしたかは遺憾ながら全く明らかではない。これは発掘調査が新幹線の用地幅に制約されざるを得ないことに因り、東西方向の遺構分布範囲を把握する事ができなかったものである。Gブロックの東約39mの地点で、改田工事により削平を受けた際の削平面に4棟の竪穴住居跡と2個のピットを確認した。近接する水田でも縄文中期の土器片が採集された。これによって集落が東方向に延びていた事は明らかで、あるいは添市川の段丘崖に沿って東西に集落が広がっていた可能性も考えられる。いずれ調査によって明らかになった遺構は遺跡全体の極一部であり、規模の大きな集落の存在は否定できない。しかし調査区の西方向も既に大規模な削平を受けており、遺構の残存する区域は限られたものになってきているのが現状である。

この様に規制された範囲での調査ではあったが、前項で記述した個々の遺構、遺物の様相とともに本項では高畠遺跡のまとめを行い、指摘できる若干の問題点を付加したい。

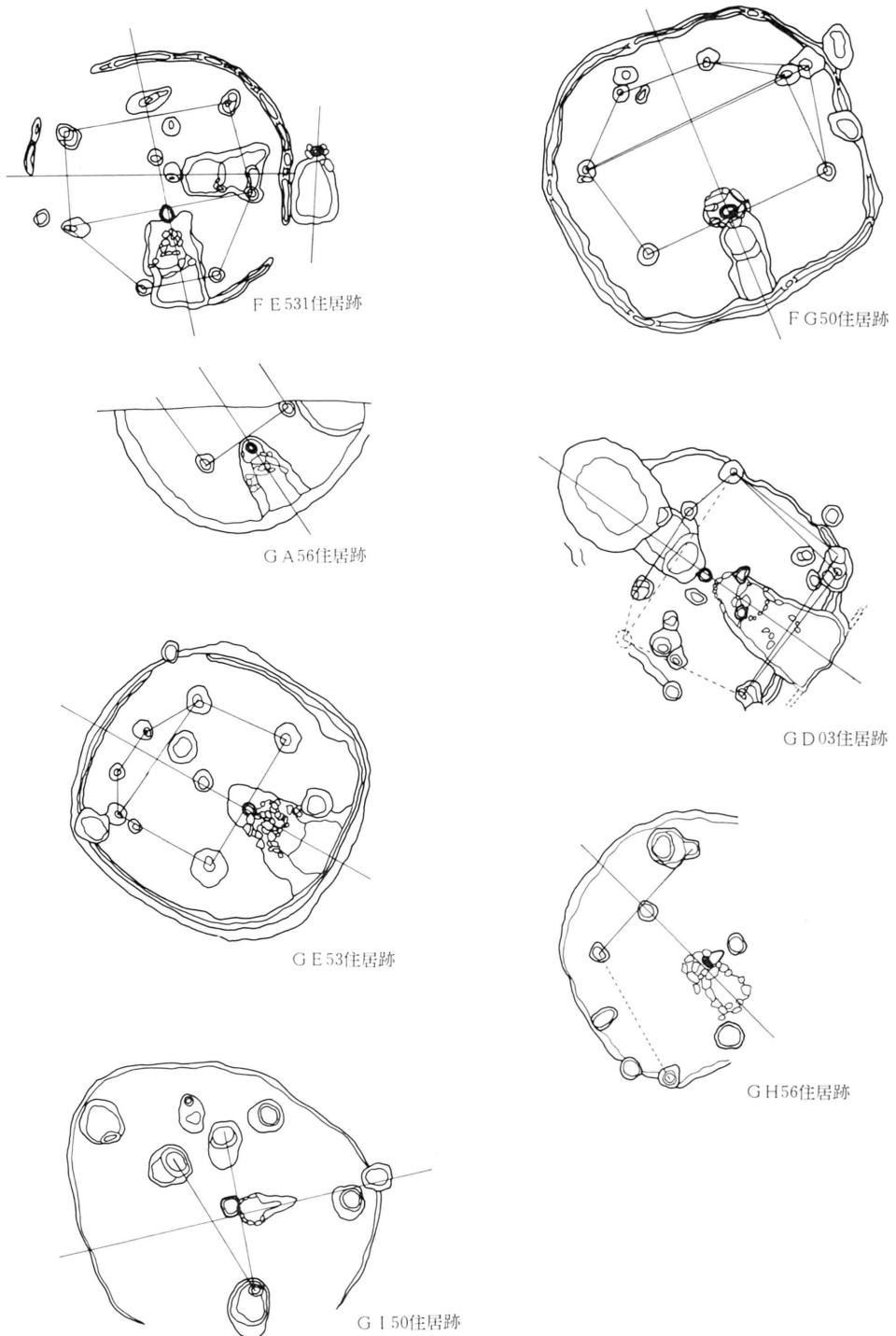
〔1〕遺構

住居跡 住居跡の平面形はほぼ隅丸方形を呈するものが多く(F G50住、G A56住、G D 03住、G E53住、G H56住)、ついで円形(F E53住)、不整円形(G I 50住)がある。住居の長軸方向は必ずしも炉の中心軸方向に一致するものではないが(例えばF G50住居跡ではこれと直交している)、大方の場合にはほぼ一致していることから、住居跡の主軸方向は炉の中心軸の延長線でとらえた。これによると、住居の方向はN-11°-W-W-21°-Sのばらつきがあるものの、大概北西方向を向く場合が多い。

周溝はこれを有するものと有さないものとがある。周溝を有する住居跡は平面形が整形である例が多かったが、特に相関関係は認められない。周溝底面は平坦ではなく凹凸が見られ、時には小穴が窮たれている例も見られた(F G50住居跡)。

柱穴配置は完全に把握できる例は少なかったが、最も顕著な例として2つのタイプがあげられる。A: F E531 住居跡に見られるタイプで、炉を狭んだ2本の柱穴と長方形に配置された

高畠遺跡



第36図 住居跡形態図



第37図 炉の形態分類図

高畠遺跡

4本の主柱穴による6角形の配置のタイプである。F E 531住居跡の場合には6本の柱穴の他にさらに住居の中央部に主軸線にのった1本のピットも存在する。B : Aの配置形態とは逆の形態となっている。長方形に配置された4本の柱穴と、その後方に並ぶ2本の柱穴の6角形の配置である。F G 50住居跡、G E 53住居跡に代表されるものである。推定ではあるが、G D 03住居跡もこのタイプに類似すると思われる。

その他明らかではないが4本のみ(G H 56住?)、2本あるいは3本のみ(G I 50住?)などがあり、本遺跡内でも形態は一様ではない。しかし、ほとんどの場合炉の延長線を中心軸として左右対象形に配置したものであった。

炉跡 炉跡の形態はさらにバラエティに富んでいる。住居内に構築された炉(以下、屋内炉)の場合は、石組み、埋設土器、前庭部等の個々の部位の組み合わせによるもので、中期末に東北一般で見られる『複式炉』の範疇に入れられるものである。しかし、福島県など東北南半に於ける複式炉とはやや趣きを異にし、個々の部位がそれ程整然とはせず、また住居跡毎に部位を構成する要素が変化している。石組み、石敷なども極めて簡素で単純な作りとなっている。このため前述した様に統一した名称で各部位を呼ぶことは避け、I部、II部、III部としたものである。屋内炉はI部～III部に分離されるのが最も多かったが、個々の構成要素からタイプ分けをすると、以下の様になる。

I 部	II 部	III 部	IV 部	
a. 挖り込み内に埋設土器(直立)	石組み、石敷き	前 庭 部		G A 56住 G E 53住
b. 石組み内に埋設土器(直立)	掘り込み(焼土あり)	〃		F G 50住
c. 石組み壁に埋設土器(横位)	石組み	〃		G H 56住
d. 床面に埋設土器(直立)	石敷き	〃		F E 531住
e. 〃	石組み壁に埋設土器(横位)	石組み壁に埋設土器(直立)	前 庭 部	G D 03住

これらの各部位について焼土の堆積、底面の焼土化等の使用痕跡を観察するとI・II部(G C 03住居跡ではIII部まで)にこれが見られる例が多い。I部、II部を炉として併用した可能性が考えられる。これに対してIII部(前庭部)は明らかに性格が異っており、焚き口、入り口などの可能性があげられる。G D 03住居跡のIV部(前庭部)が周溝から大きくはみ出している点について、一つの問題がある。盛岡市の、繫第Ⅲ遺跡でも同時期の住居跡に伴う炉の前庭部が大きく住居外へはみ出している。

単独炉と称した炉は4個発見された。屋内炉と比較するとその構造は単純である。I部のみの炉(F I 56炉、F J 50炉、G B 53炉)、I部、II部の炉(F E 56炉)がある。形態も、構造物もそれぞれ異っている。これらの炉の性格については即断し得ないものと思われる。可能性の一つとしてはやはり住居の他の施設が不明瞭または消失したもの、もう一つとしては柱穴も

認められないことから屋外炉という可能性である（F J 56炉の場合は住居跡のプランは確認できなかったが、炉を中心とした柱穴状のピットが確認されたことから上屋構造を持つと判断された）。屋外炉とした場合、周辺の住居跡とどの様な関連を持って営まれたかという問題が残る。一例として屋外、屋内の炉の併用であり、もう一例としては、移動の中でのキャンプサイト的意味合が考えられる。F I 56炉の埋設土器は中期末葉の大木10式土器が使用されており他の住居跡と隔たりは認められなかった。同一型式内での移動は考え得ることであり、いずれとも判断し得なかった。この様な炉跡の発見について、屋外炉の可能性という点を指摘しておきたい。

ピット類 住居域内から8個のピット類が発見されている。いずれも性格については明らかではないが、タイプは大概3つに区分された。Aタイプは当初の使用目的については断定できないが、埋土（床面近くまで）に多量の土器片や焼土、炭化物が廃棄されており、含まれる土器が住居内出土のものとほぼ同時期であることから、恐らく住居と時期を前後してあるいはいずれかの住居に伴って営まれたものと考えられた。分布する位置等からも住居に付属する施設の可能性が考えられる。

[2] 遺物

高畠遺跡出土の遺物には縄文式土器、土製品、石器、フレーク等がある。

土器 土器は完形、復元図化されたものが30点、破片約9,000点が出土した。遺跡の規模から比して多い出土量とは言えず、また確実に遺構に共伴するものとしては各炉の埋設土器と、若干の床面出土の土器片とに限られた。これらの土器はすべて縄文中期に含められるもので、数片を除いては、中期末葉の大木10式期のものである。その他、中期初頭（大木8a式）土器が1点（39図1）、後半の大木9式土器が数点（2）見られたが、ここでは主要となった大木10式土器についてのみ記述する。以下は高畠遺跡で得られた土器類の概観である。

（器種）ほとんど深鉢形土器で占められた。僅かに注口土器の注口部片が10数点、浅鉢片が5点（41図24・25）出土したが、いずれも器形を推定し得るものではなかった。深鉢形土器の器形には幾分バラエティが見られた。

（文様帶）これを有するものと有さないものとがある。前者はいわゆる精製土器であり、後者は粗製土器と呼ばれるものである。精製土器について文様帶の部位を観察するならば以下のタイプが見られる。

○文様帶が口縁部、体部とに分離する。但し口縁部文様帶の文様は38図口縁部文様a、cの様に一本の降線、沈線などの施文されるだけのものが多い。

○文様帶が口縁部、体部に分離せず連続する。

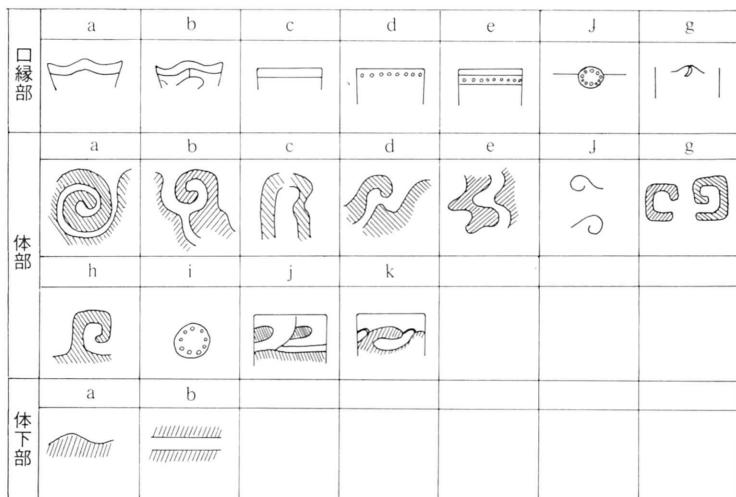
高畠遺跡

○体部文様帶のみ。

(意匠文) 土器に見られる文様の要素を第38図に抽出した。

(施文手法) 地文以外の意匠文を施すための手法である。主流となる手法は隆線及び沈線であるが、特に隆線の場合ナデにより断面三角形状に調整されているものが多く、これを調整隆線と呼称した。さらに隆線のうち短かく弧状に独立して施される文様があるが、これは別に弧状隆起文とする。少數例では竹管状の工具による刺突文が見られた。

(地文) 压倒的にR L、L Rの単節縄文が多く使用されている。少數例では撚糸、複節縄文、無節縄文、単節縄文による羽状縄文、綾络り文が見られた。



第38図 モチーフ模式図

以下、本遺跡出土の土器類をグルーピングして詳述する。

1類 体部文様帶にモチーフa、bの様な大きな渦巻文が展開するグループである(20図6、26図1)。施文は調整隆線文による。2例ともに平縁口縁をなし、口縁部文様として一本の直状、波状の隆線がめぐる。体部文様は体下部まで下っている。器形はいずれも頸部のくびれの少ないすん胴型である。部分的にはモチーフkが加わるものがある。

2類 主としてモチーフd、eに類似した隆線による曲線文が展開するグループである(16図1、39図6~14、40図15~17)。実際には多様なモチーフが展開していると考えられるが、いずれも調整され断面三角形、あるいは台形状になった隆線文によるダイナミックな施文が特徴である。いずれも胴部が強く張り出し、頸部でくびれ、口縁部が強く外反する器形を取っている。口縁形態には平縁、大波状口縁が見られる。2-aのタイプとして隆線と隆線を結ぶ弧状の隆縁モチーフkを持つタイプが上げられる(39図5~8、59は同一個体)。この隆線を結ぶ弧状の隆縁は明らかに39図4、5に見られる文様の系統であろうと思われる。また2-cの

タイプとしては大波状の口縁をなし、口縁部の波状隆線と体部の隆線文とを縦に隆線文が連絡するタイプがある（39図12、40図15）。2-bは口縁部に波状の隆線がめぐり、体部に主としてdのモチーフが展開するグループである（39図16）。40図17もモチーフから見てこの2類グループに含められるものであろう。

3類 2類と類似したモチーフ（d、e、c?）が沈線により描かれたグループである（40図18~21、41図22）20図3、4の小型土器もこの3類に含められるものと考えられる。また42図1~5はモチーフの無文部に刺突文が加えられたもので出土例は少なかった。

4類 3類同様に沈線文で描かれるグループであるが、曲線が幾分直線化し、g・hに代表される形となっている。破片からは、2、3類の分離は困難であるが、29図1、22図4、6（但し6については後述）の文様に代表されるものである。器形は3類ときほどの違いはないものと思われる。

5類 13図3に代表される土器類である。出土例は少なかったが、41図27~31が含められる多くの場合沈線文で描かれているが8は隆線文である。文様はさらに直線化しているが、上昇してきた縦の沈線が口縁にまで上昇するのを特長とする。器形は27、28、30の様に体部上半がほぼ直立する形態のものと見られるが13図3の様にやや器高が低く頸部が短かく外反する器形も見られる。

6類 口縁部等にjに見られる様な刺突文を配した独立文様を有する土器類がある。出土例は極めて少なく実体は明らかではない（42図41、42、44~46）。

7類 やはり沈線文主体の土器だが、沈線の一部が弧状隆起文に変化しているグループである。22図6、42図54~60がこれに含まれる。7類の出土はやはり数少なく、小破片が多いため、器形・モチーフなどの詳細は明らかではない。4類、5類の文様の一部が弧状隆起文に変化していることが多い様である。

8類 口縁部付近の破片でのみ確認されているものであるが、口縁部に横走する隆線に接して連続刺突文が施されているグループである（42図47~53）。

9類 いわゆる半粗製土器のグループである。出土数は少なく、また破片の場合はこれと断定することは困難であった。34図1、35図1、43図74、75がこれにあたる。口縁部文様帶に一本の隆線がめぐるものと、沈線がめぐるものとが見られる。器形はどちらも体部が緩やかに脹らみ、口縁部は幾分外反するものである。隆線及び沈線の下方は地文のみが施文されている。

10類 （第43図）いわゆる粗製土器である。出土した破片数は多いが、大形の土器が多いために復元されることは非常に少ない。器形が推定されるものとして13図1、20図1とがある。13図は器高が高く、胴部が強く張り出し口径が極端に小さい器形をとる。20図1は胴部の張りがなく口縁部まで直線的に外傾するものである。いずれも地文は単節縄文が使用されていたが

高畠遺跡

他に複節縄文（43図65）の無節縄文（67）、綾絡り縄文（68、72、73）が見られた。

11類 前述の土器に伴う小形土器類がある。これはさらに2種類の大きさに大別される。

一つは口径、器高が10cm内外の土器類と、5cm以下のいわゆるミニチュア土器である。前者には22図7、20図5等がありまた破片の中に多数見られた。後者の場合は復元できたものは31図2の一点のみに限られ、本遺跡では出土数は少なかった。

以上高畠遺跡出土の土器細分を試みたが、破片が多く観察検討は充分とは言えず、これによりすべてが網羅されたものとは言えない。本遺跡の主流は1類～4類の土器群によって占められるものである。本遺跡では特に層位的に、あるいは構造の切り合いによって遺物の前後関係が把握されたものではなく1類～8類の土器類を即時間の差に該当すべきものではないが、7、8類の施文技法を有する土器は県内では門前第I群2類、堂の前貝塚第3類、五十瀬神社前遺跡第II群2類に相当し1～4類土器に後続するものであることから、時期的により新しい土器類であると考えた。さらに4、5類土器は土器文様のモチーフが、7、8類土器の中に明らかに継続されていることから、土器型式の流れとして、ダイナミックな曲線文を主体とする1～3類の土器類から、やや直線的な文様を持つ4、5類の土器類へ、さらに弧状隆起文、連続刺突文等新しい手法を加えた7、8類の土器類へという流れが考えられた。

石器 本遺跡出土の石器類は出土点数が多くはなく、タイプも多様とは言えない。

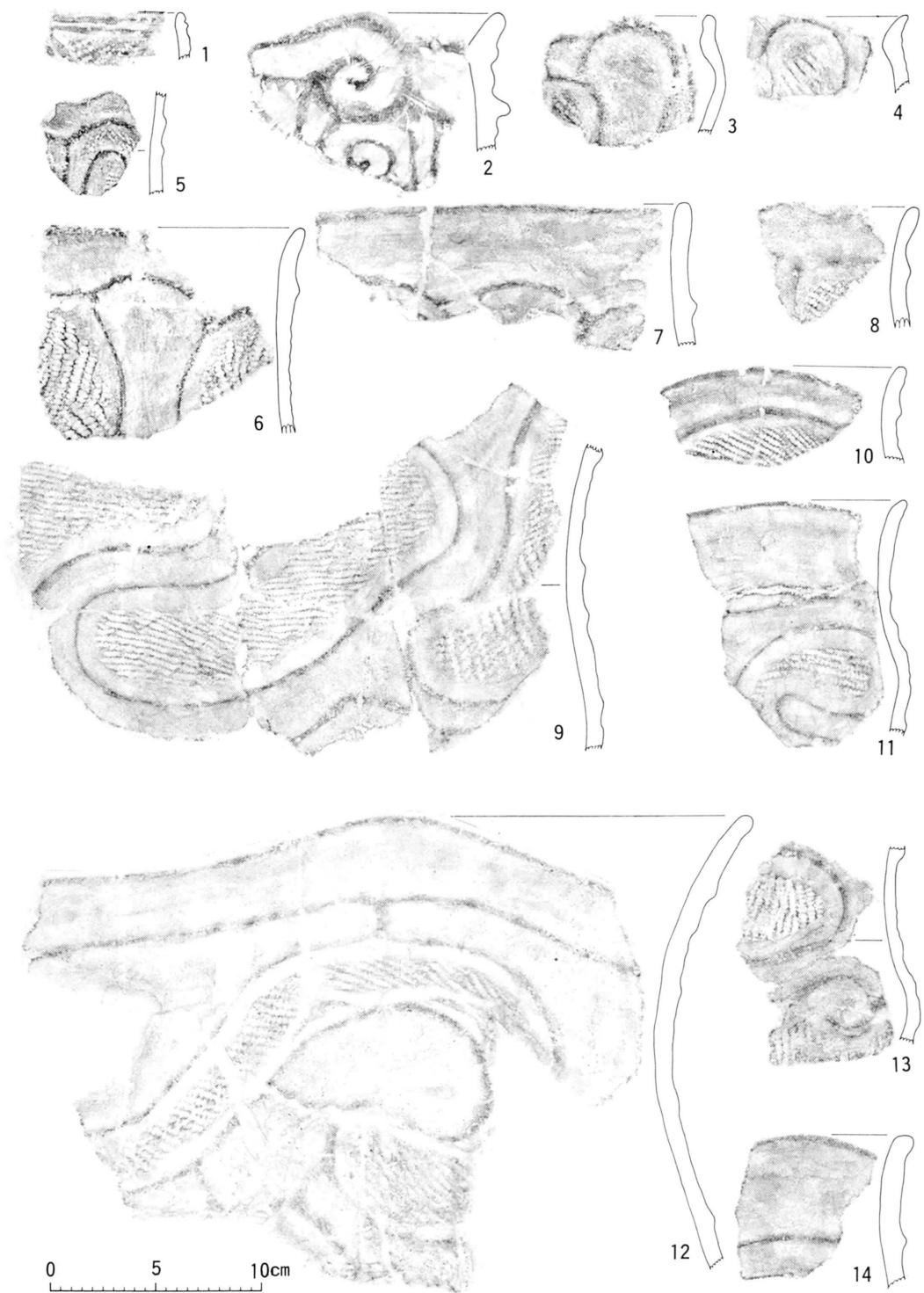
I類 石鎌である。3点のみの出土である。いずれも無茎で基部に抉入が行われている。形態は二等辺三角形を呈しているが、長さには差異がある。

II類 石錐で、2点出土している。錐部はいずれも断面三角形状に作り出されている。錐部の長さは個体差が見られる。

III類 ツマミを有するスクレーパー、いわゆる石ヒをまとめた。**IIIa**は横刃形で、**IIIb**は縦刃形のものとする。**IIIa**類の1は刃部が厚手に作られており剥離機能を有するものと考えられた。また**IIIb**類には含めなかったが、V類（使用痕あるフレーク）に含めたものの中に簡単なツマミ状の作り出しのあるフレークが見られ、使用痕があることから、同様の使用方法を用いたものと考えられた。

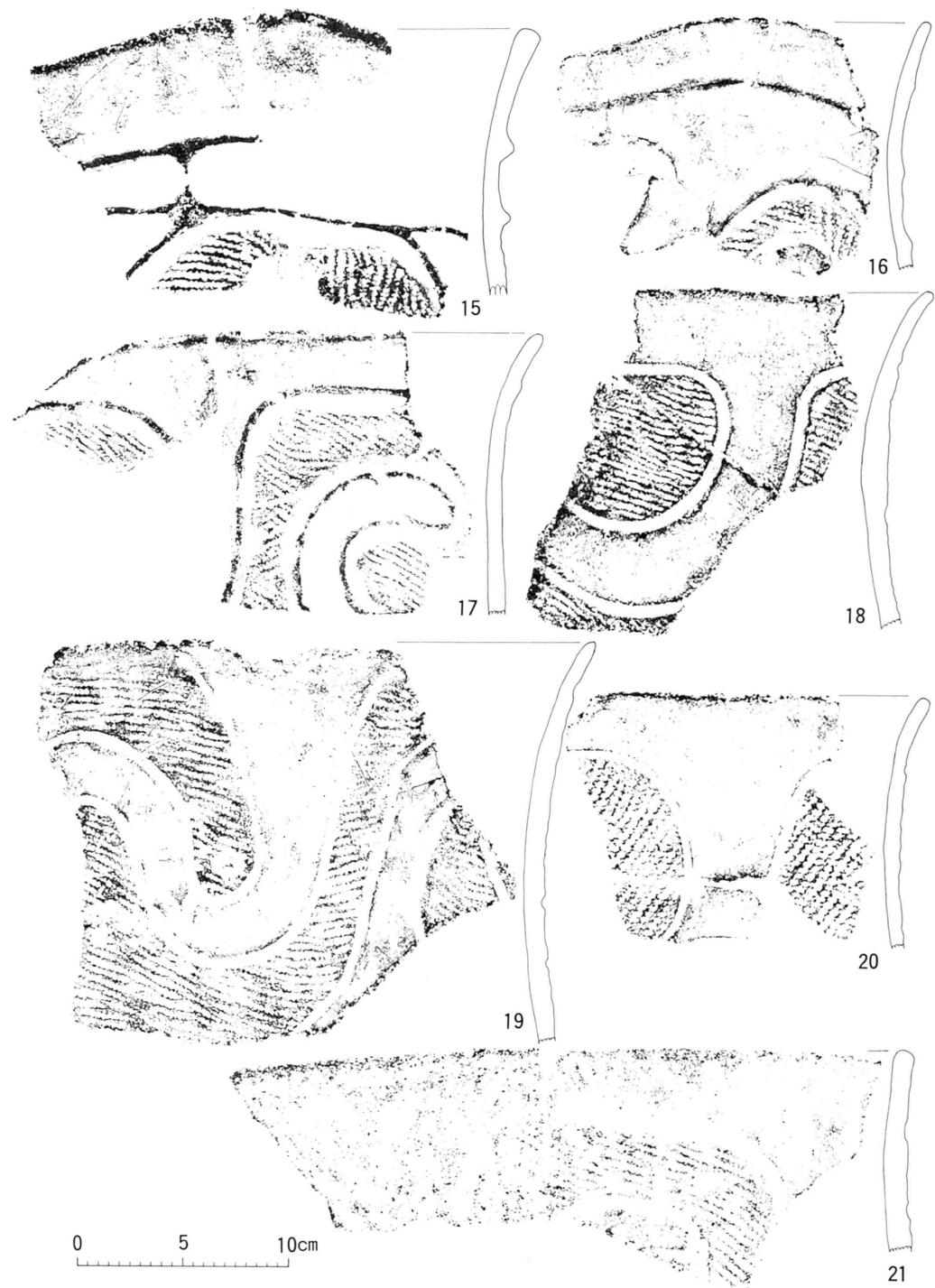
IV類 すべてスクレーパー類を含めた。このうち、特に定形化したものを**IVa**、**IVb**、**IVc**とした。**IVa**類はサイドスクレーパーで、縦長剥片の長辺の1辺に2次加工を加えて刃部を作り出したものである。1、2の他に1点出土している。**IVb**は尖頭形を呈した石器であるが、刃部加工の状態や使用痕跡から見ていずれも尖頭部に積極的な機能を持つものではなく、側縁使用のスクレーパーと考えられる。刃部角は大である。**IVc**は横長の剥片の長辺の一辺にやはり刃部加工を施したもので、刃部は直状から弧状を呈している。以上が比較的定形化されたタイプのスクレーパー類である。これに含められない不定形のスクレーパー類が他に9点出土し

高畠遺跡

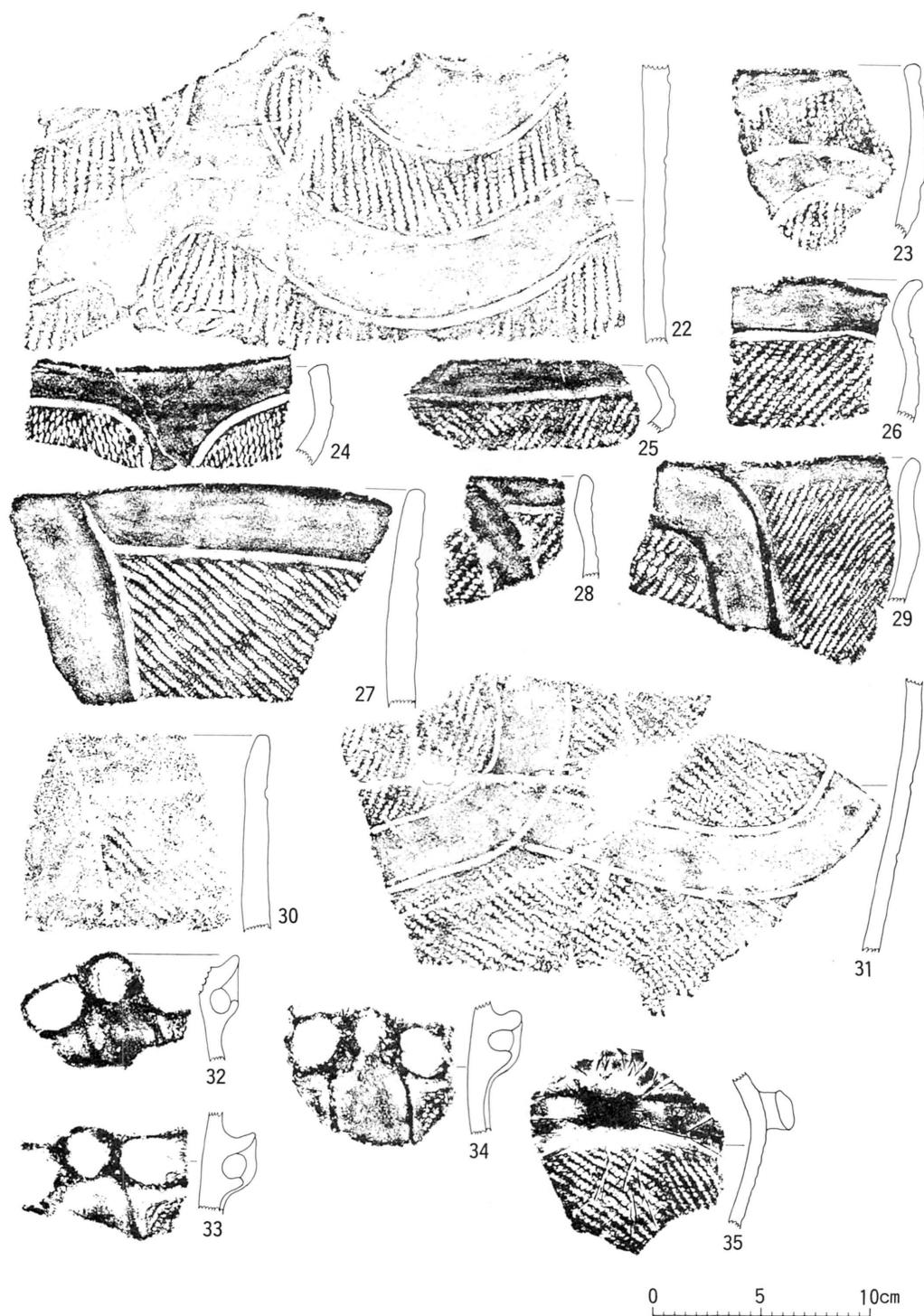


第39図 土器拓影図(1)

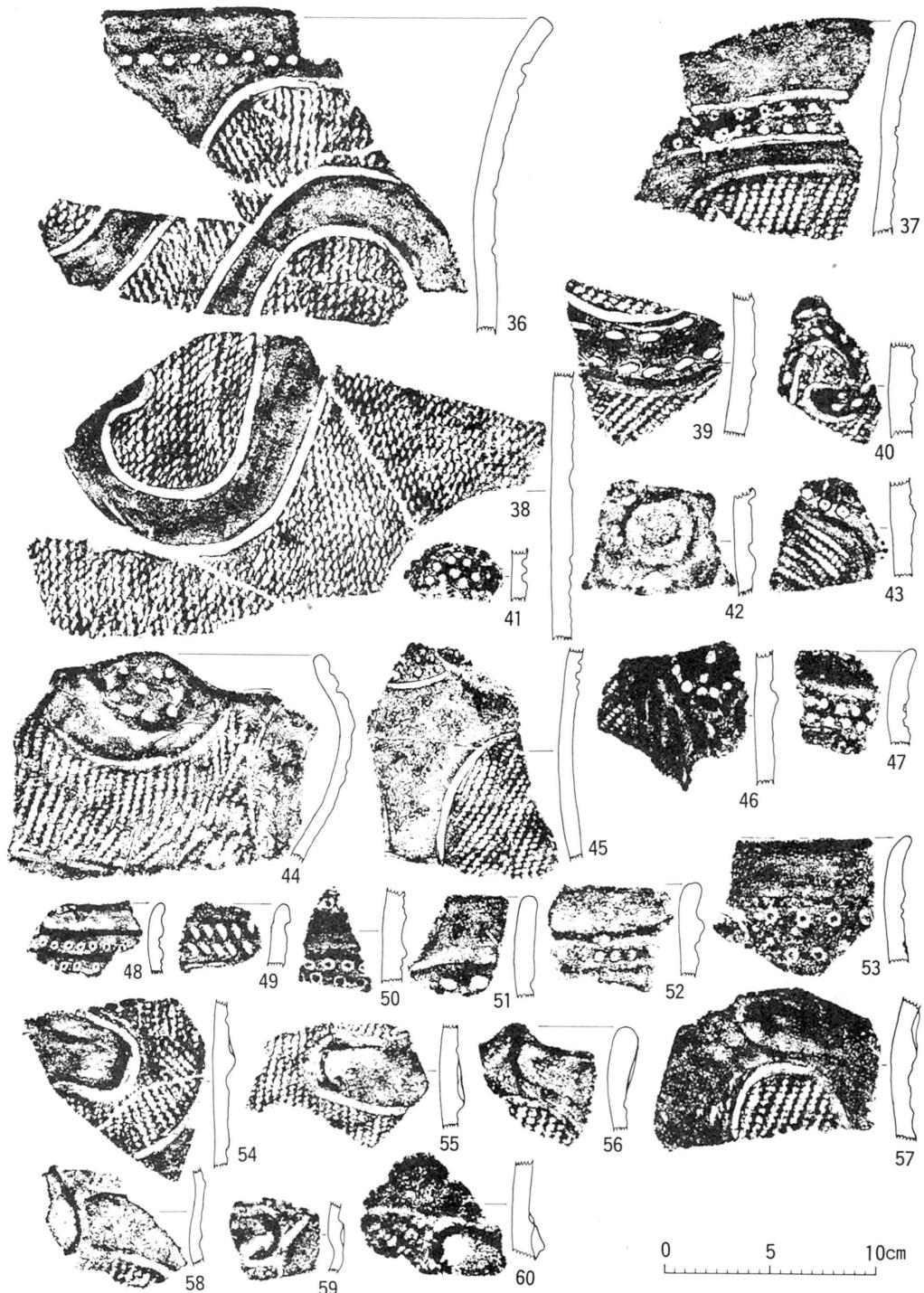
高畠遺跡



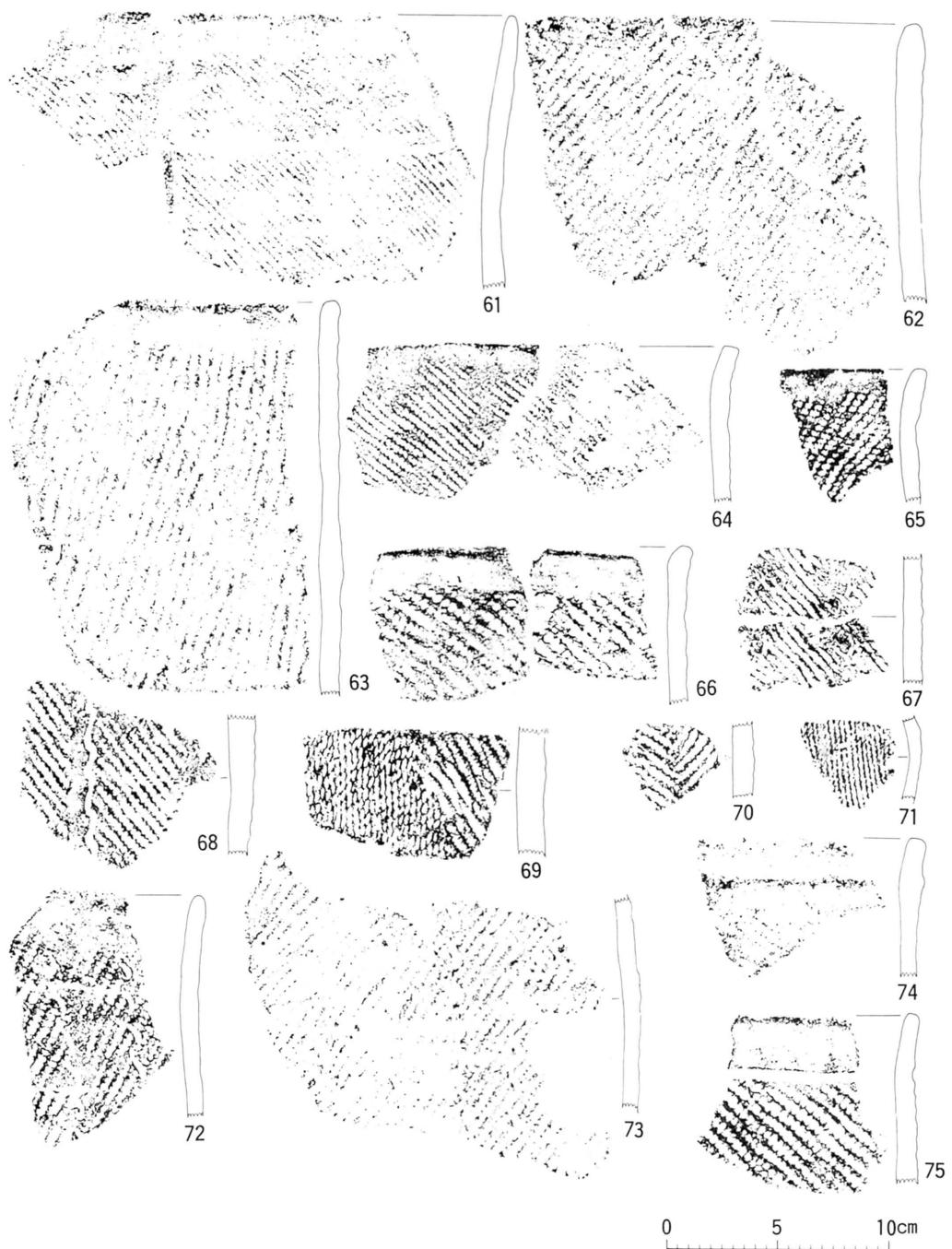
第40図 土器拓影図(2)



第41図 土器拓影図(3)

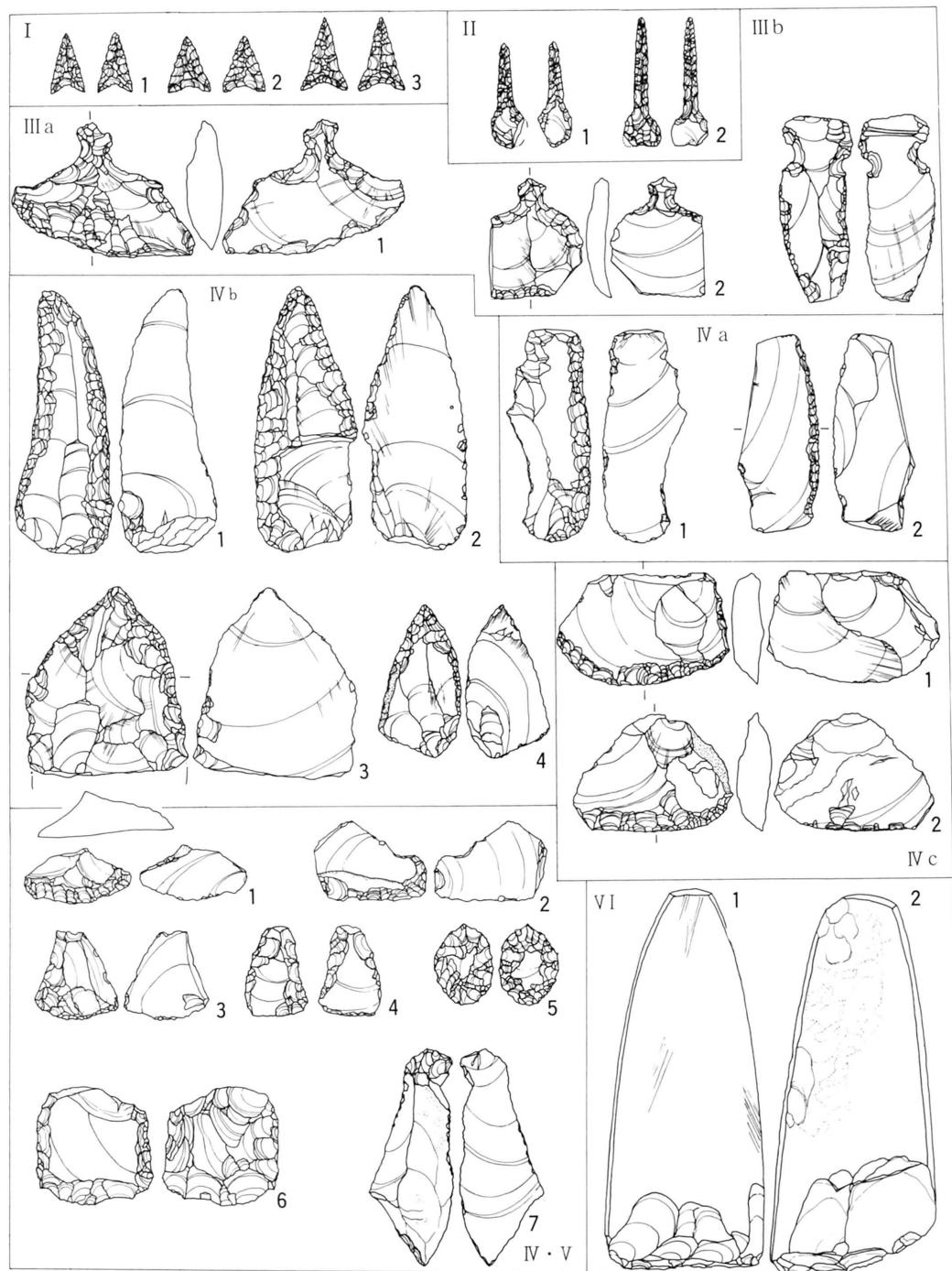


第42図 土器拓影図(4)



第43図 土器拓影図(5)

高畠遺跡



第44図 石器分類図

ている。いずれも形態、刃部の位置、刃部加工法には統一性がない。僅かに1、3については刃部の形状が緩い弧状を呈していることからIV c類に含められるかと思われる。

V類 V類は使用痕のあるフレークを含めた。5点出土している。

IV類 磨製石斧である。磨製石斧は2点出土しているが、どちらも使用による損耗が著しい。1は使用の際切損した刃部を再加工して利用しており、2は片面が大きく剝離している。いずれも磨製石斧としての機能がすでに損われて、二次的加工により再調整されて再利用されたものであろう。

他に石皿が一点、凹み石が一点出土している。

以上の様な石器の組成を見ると本遺跡ではスクレーパー類の圧倒的比率が認められる。遺構の発見数から見て石器の出土数の少なさが感じられるが、石器はその石器の持つ使用目的に従って日常の行動とともに移動するものであるから廃絶された住居跡中に完全なセット関係を残している可能性はむしろ少ないものと考える。

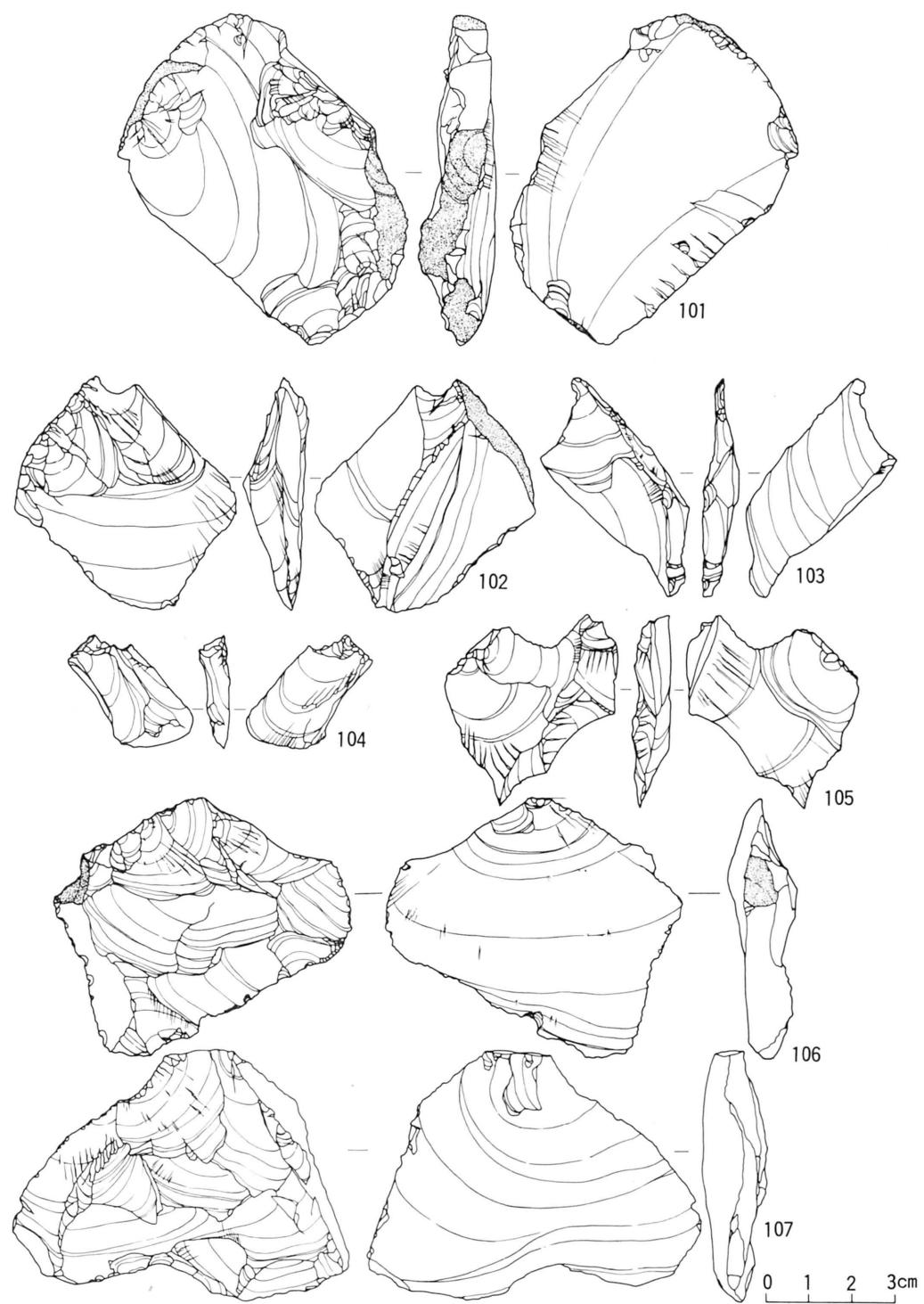
これらの出土石器中特にIV類a～cの石器については次の接合資料との関連でその形態に一考を加えたい。これらの石器類は特に調整剝離されることなく片面に一次剝離面を残し、もう一方の面に剝離された背面が見られるもので、第一次剝離の際の形態を大きく残したまま刃部加工されている。つまり剝片の形態が石器の形態を強く規制した中で、石器としての定形が得られているものである。すなわち、剝片剝離の方法が大きな関連を持った石器といえる。これらが石器として定形化していることは素材となる剝片の形態にすでに規格があったということを考えうる。これに比較して他のIV類はあまり規格化されていない剝片を使用したものと考えられる。いずれ出土品中のスクレーパーの出土頻度はそのまま遺跡内の住民にとって需要頻度が高かつたことを物語っている。

[3] FG50住居跡出土接合資料について

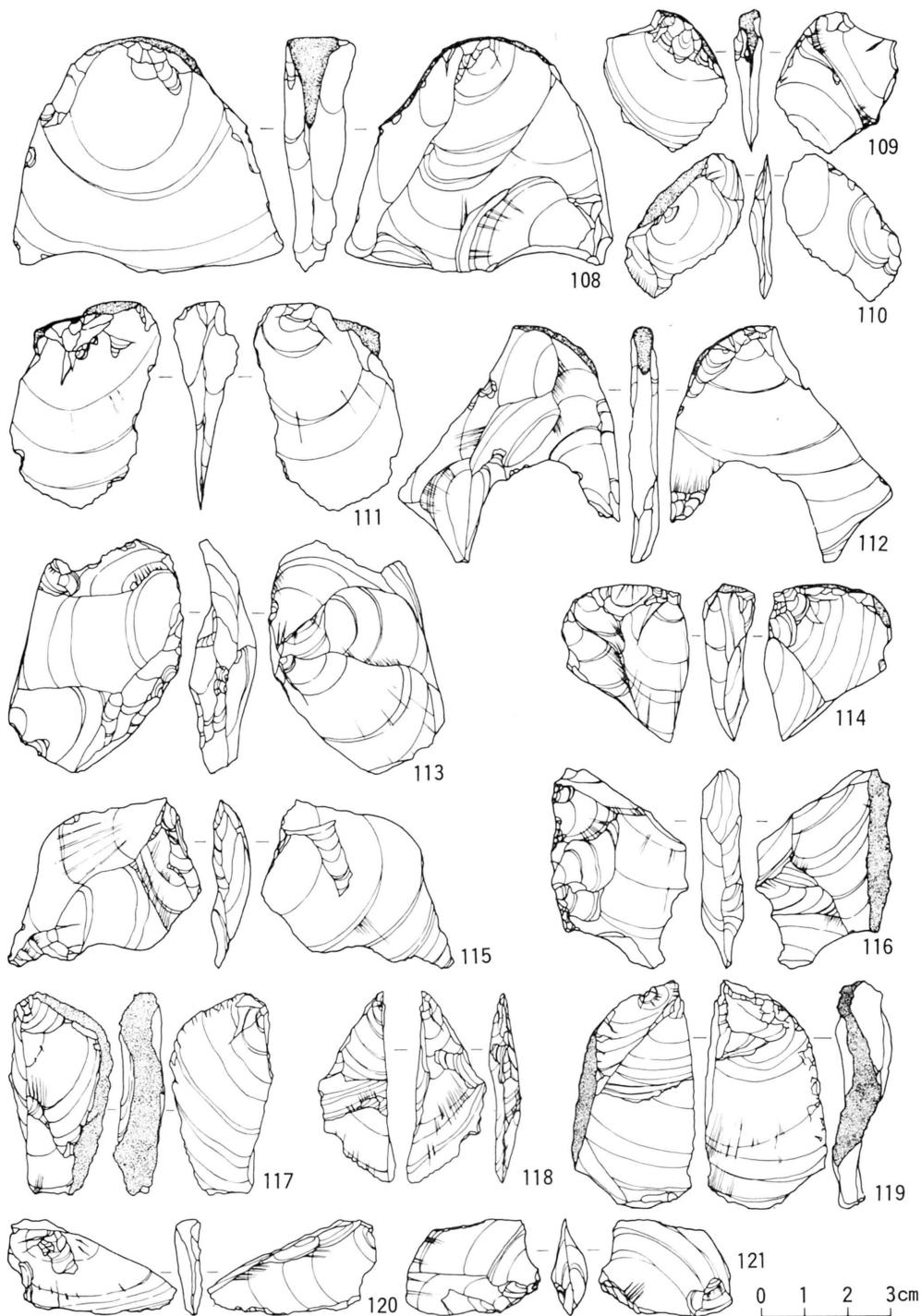
FG50住居跡の周溝底面に検出された⑪ピットは前項で記述した様に、剝片貯蔵施設と考えられるものであり、剝片の出土数は90点にのぼった。これらの剝片は⑪～⑬の資料に接合し、縄文時代の石器製作技法を窺う一例となり得るものと考え、本項にまとめて記載する。①～③接合資料の他にも少数片の接合例はいくつか見られたが今回はそれらすべてに検討を及ぼすには至らず、①～③の資料を中心に記述を進める。なお剝片の接合作業には岩手大学考古学研究会の武田将男、渡辺栄次両氏の全面的協力を得た。

接合資料① (第45～49図)

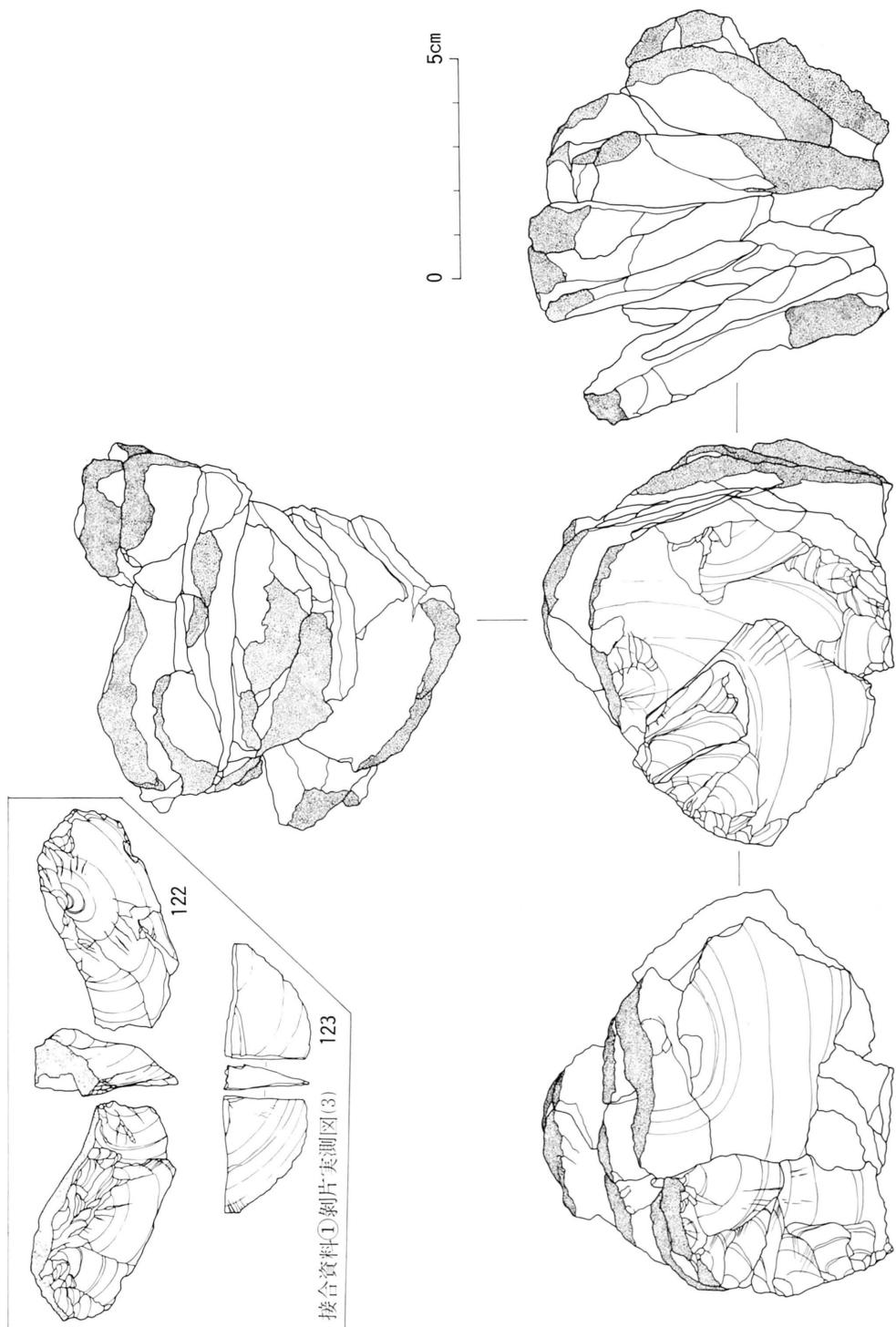
接合された剝片は23点。原石全体は推定できないが、原石面の残存部は8×9.5cm程度で、原石は恐らくやや長楕の球形と思われる。石質は珪質頁岩である。残存部は原石の中程にあたり、



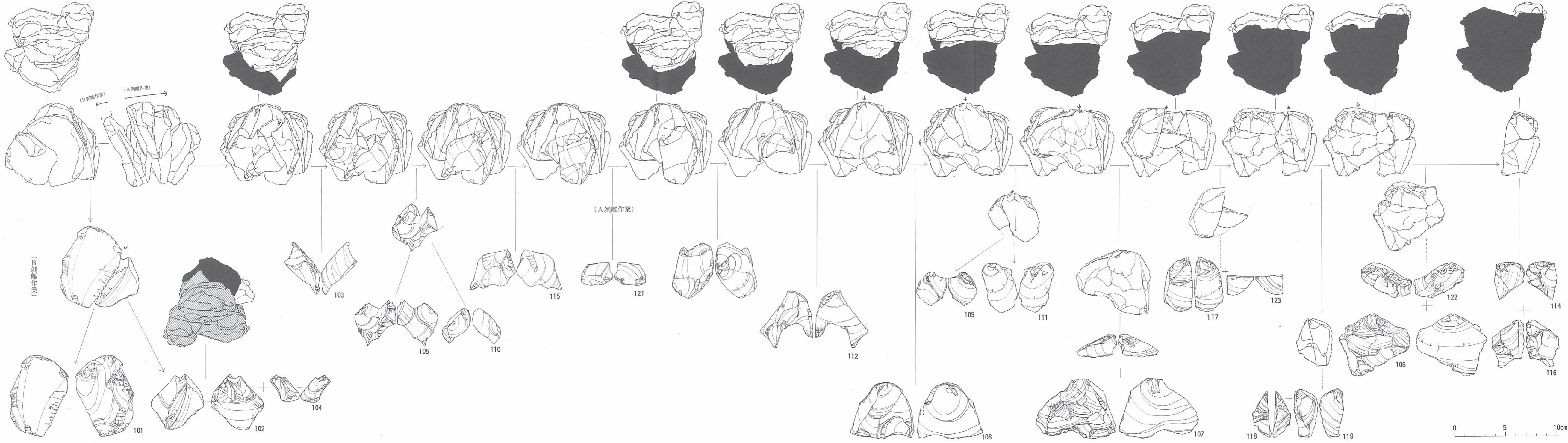
第45図 接合資料①剥片実測図(1)



第46図 接合資料①剝片実測図(2)



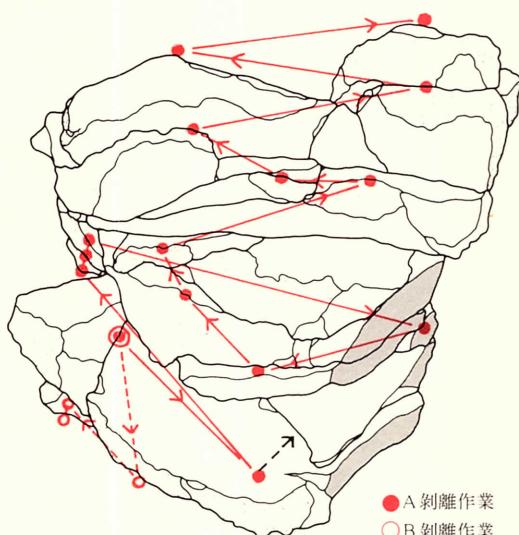
第47図 接合資料(1)実測図



第48図 接合資料①剥離作業過程概念図

両端部からの剥片は欠失している。

資料①の剥片剥離作業は技法としては単純なもので、ほとんど打面を作らず原石面から打撃を加えたものである。残存部から見る限り、最初の打撃は 101 の剥片に加えられたものと思われる（剥片番号は上一ヶタに接合資料番号を付加したものである）。この剥片は表と裏両面に凸面が見られ、これを境に剥片に残る主要剥離面が両端に向かう。従って剥離作業は礫の中中央部に最初の打撃を与えて 2 つに分離した後、分割面に平行する剥片を両端部へ向けて順次剥取したと考えられる（作業過程の復元図は48図に提示）。打撃は前述の様にほぼ原石面に加えられており、打点の位置は頭部が最も多くまた左右の両側面にまで移動しているが下方向からの加撃は見られない。図中右側面にある打面は調整された打面ではなく原石の外皮を薄く剥離させた程度の面で、積極的打面作り出しとはなっていない。この資料の作業は原則的には自然面への加撃によっているものである。打点は常に左右ヘジグザグ移動しながら後方へ進行している(49図)。



第49図 接合資料①における打点の移動

た。作業はまず打面の形成から行われ、以下すべての剥片は打面からの加撃によって剥取されている。確認された打面数は 6 つで順次 A～F と呼称し、それぞれの打面による剥離作業を A～F の剥離作業として対応させた。以下各打面毎に記述する。剥離作業の復元模式図は53図に示した。

(打面A) 残存する剥片数 7 点。このうち、上下に切断された剥片は 3 例見られる。202 の剥片剥取の以前に少なくとも 5 枚の剥片が剥取されていたと考えられる。打面は調整されない平坦打面で、打面を残した剥片の打面観察によれば、打点の位置は僅かに左右に移動を繰り返しながら後方へと移動している。切断されない完形剥片の長幅比は 2 : 1 ~ 1 : 1 と極端な縦長剥片は見

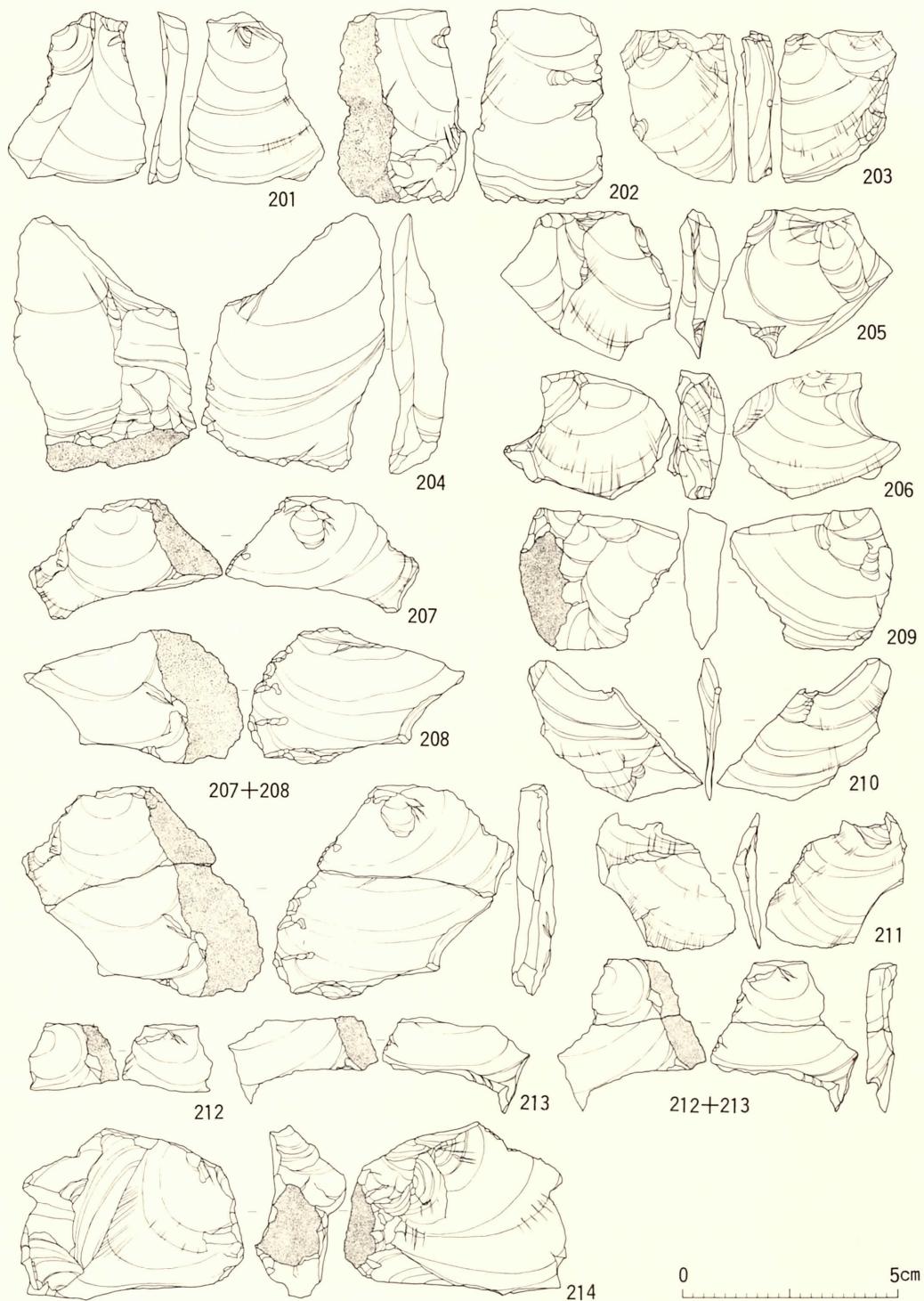
この様な作業過程をよって得られた剥片は大きさ、形態とともに不定であって、あまり規則性の見られないものである。剥片の長幅指数はまばらな分布を示した。また剥片の中には縦あるいは横方向に切断された剥片も数点見られる。

接合資料② (第50~53図)

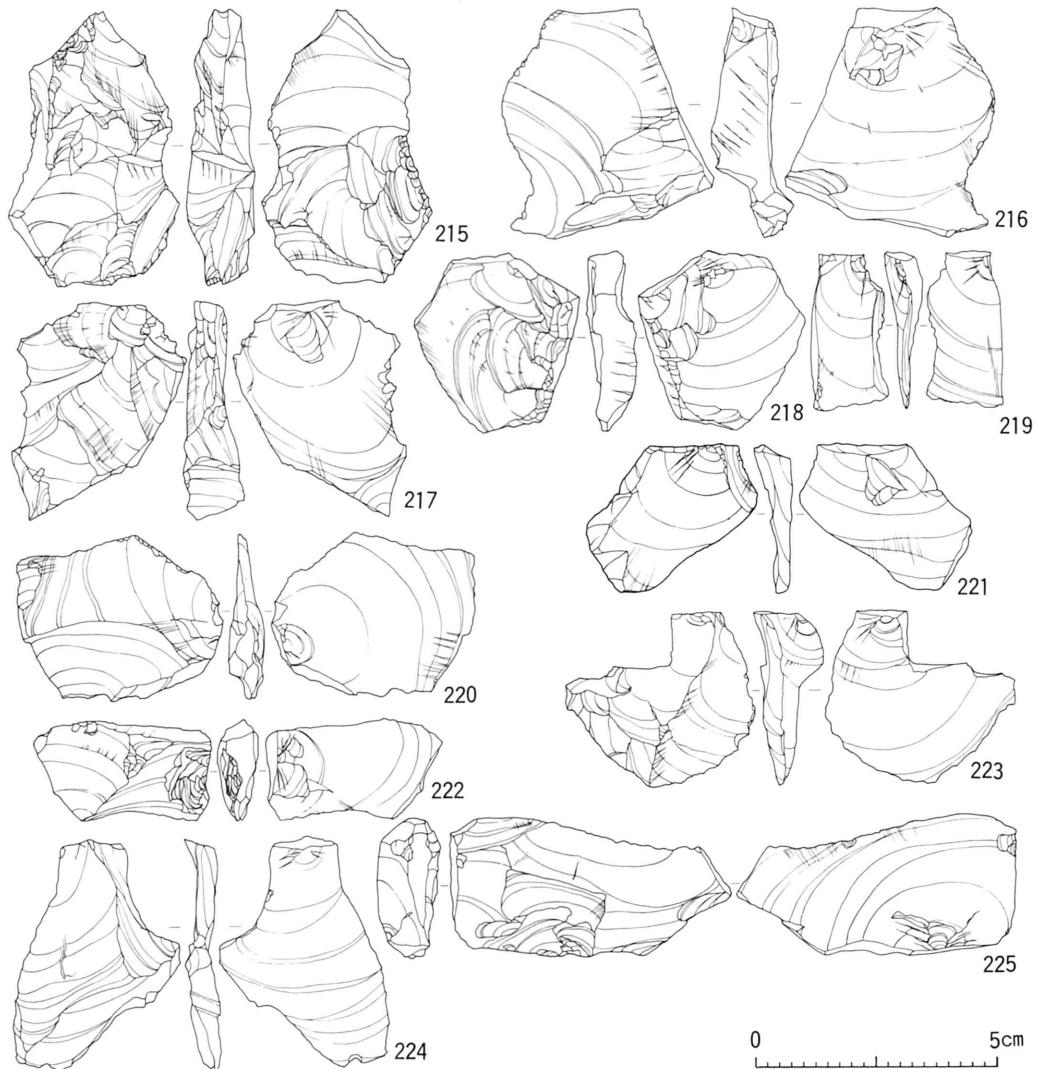
接合された剥片数 25 点。原石の全形は推定できないが残存部の大きさは長さ 7.6 + α 、幅 7.3 、厚さ 8 + α cm である。石材は珪質頁岩を使用しているが、接合資料①とは明確に別個体である。かなりの剥片が欠失していることから剥離作業の観察も不充分なものとなつた。

● A 剥離作業
○ B 剥離作業

高畠遺跡



第50図 接合資料②剥片実測図(1)

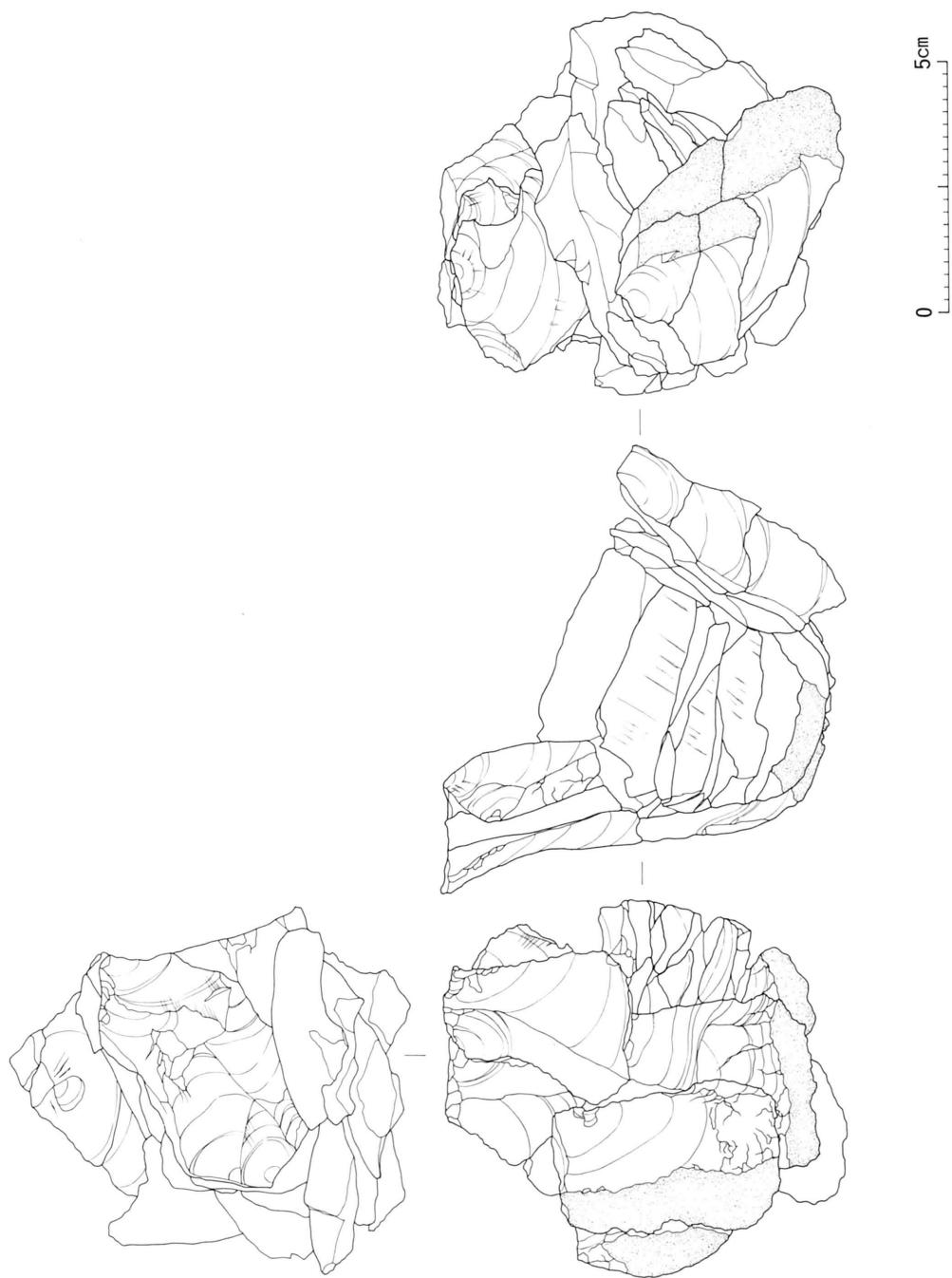


第51図 接合資料②剥片実測図(2)

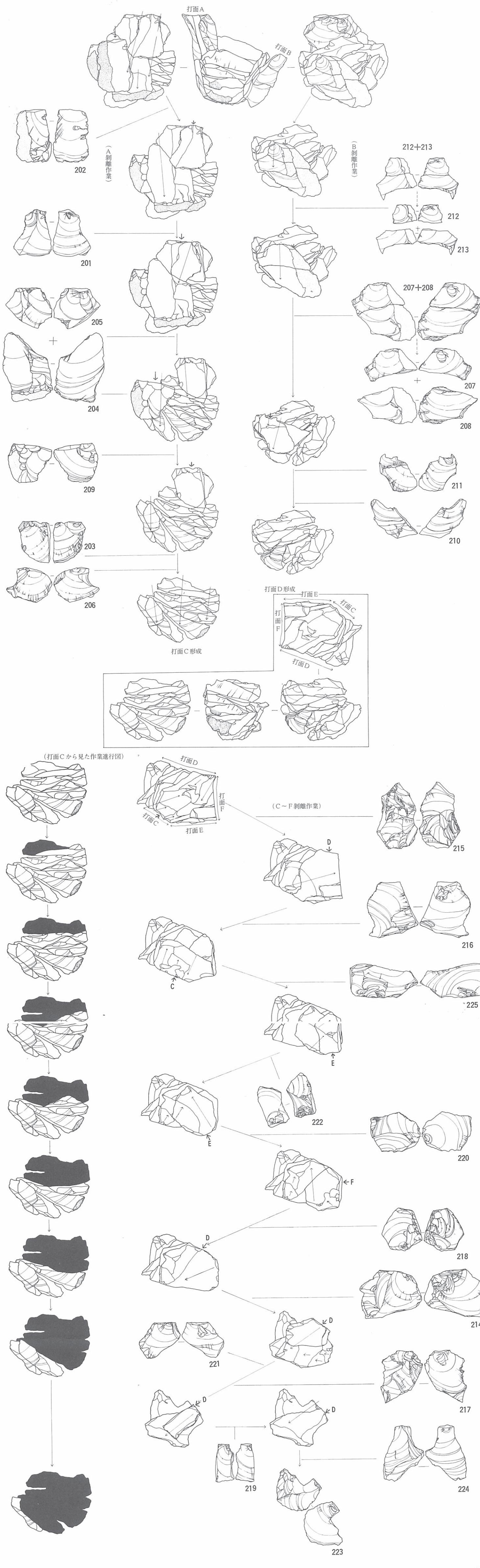
られない。切断された剥片についてはかなり縦長の剥片が多かったと推定されるが、この様な剥片はすべて切断されているために全体として結果的には長幅比の小さい剥片が多く得られることになった最終剥離の203、206は剥離が下部にまで至らず、後方から折れた形で終っている。打面Aからの剥離作業終了によって形成された剥離面は打面C・Eと転化する。

打面Aからの剥離作業終了後には、打面Aと直交する面から剥離作業が行われたものと考えられる。この部分の剥片類は残存しておらず明らかではないが、A以後の（Aと90°打面転位をした）剥離作業終了後、背面の一部を打面Bとして、次の剥離作業が開始する。

(打面B) 残存する剥片数6点。うち4点は切断された剥片である。いずれの剥片も厚さ4～



第52図 接合資料②実測図



第53図 接合資料②剥離作業過程概念図

高畠遺跡

8 mmと他打面から剥離された剥片類に比較して最も薄手となっている。また切斷されていることもあり結果的にはすべて小形の横長剥片が得られている。

打面Bからの剥離作業の終了によって打面Dが形成される。

(打面C～F) 打面C～FはそれぞれA、B両面とは垂直方向に位置する面である。C～Fの位置関係はC・EがともにA打面からの剥離によって形成された面でC・E間は約140°の開きがある。DはC・E面とは180°転位した位置にあり、B打面からの剥離によって形成された面である。F打面はC・E打面、B打面とは90°転位した平坦な自然面である。C～F打面からの剥離作業は交互に行われており、剥離作業の行われる作業面は同一面である。第53図下部の図面はC～F打面からの剥離作業過程を図示したもので、中央部が作業面から見た打点の位置、加撃方向を表わし、図左側は打面Cから見た剥離作業の進行を示したものである。実際には打面が90°、180°と移動しているのでこの図は打点の移動には当らない。残存する剥片数は12点・打面の転位は遺存した剥離面から見ると次の様に移動していた。

C→D→C→E→E→F→D→D→(F)→D→(F)→D→D→D

()は欠失した剥片の推定である。上記の様に打面を剥離のつどに転位させて作業を行っている訳であるが、あらかじめA、Bの作業によって石核の大きさを限定させているために得られた剥片はほとんど一定の大きさのものが得られており、長幅比にも大差のないものが多い

(55図)。これらの観察の結果、接合資料②の剥片剥離の作業過程は①のそれとは大いに異っており、まず打面Aを形成→Aからの剥離作業→Aとは垂直方向からの剥離→B打面の形成→B打面からの剥離作業→A・B打面とは垂直方向にあるC～F打面からの剥離作業(C～Fはそれぞれ約90°、180°転位の位置関係にある)の過程をとったものである。つまり接合資料②の場合石核を残さずに剥片の剥取を行ったことは明らかで、すべて剥片石器の素材となり得る剥片類に分割したものであろう。90°→90°→と回転させて剥離を行うために、自ずと得られる剥片の大きさが限定されてきている。破片の長幅指数は第55図参照。

接合資料③ (第54図)

接合された剥片数6点。石材は①、②と同様に珪質頁岩である。しかし①とは明確に別個体と判断され、②とも恐らく別の個体であろうと考えられる。

欠失した剥片数が圧倒的に多く石核の全体形は推定できないが剥離作業は上下2面の打面からの加撃によって行なわれているがA打面が主である。残存した剥片の中では、打面Aからの剥離の後、Bから剥離作業が行われている。打面Aを残した剥片は3点のみであるが打点を左右に移動させながら後方へ進んでいる。得られた剥片の長幅比は第55図に表わしたが、すべて縦長の剥片で石器の素材としては良好な剥片が得られている。また302・303の剥片にはすでに二次加工の痕が見られる。

高畠遺跡

以上接合資料①～③の観察を行って来たが、出土状況等も合わせてこの資料が提示するいくつかまとめの問題点を記述しておきたい。

○石器の素材である剥片類が住居跡内の施設（小ピット）に貯蔵されていたこと（この住居内の貯藏施設の存在は既に都南村湯沢遺跡などでも発見、報告されている）。

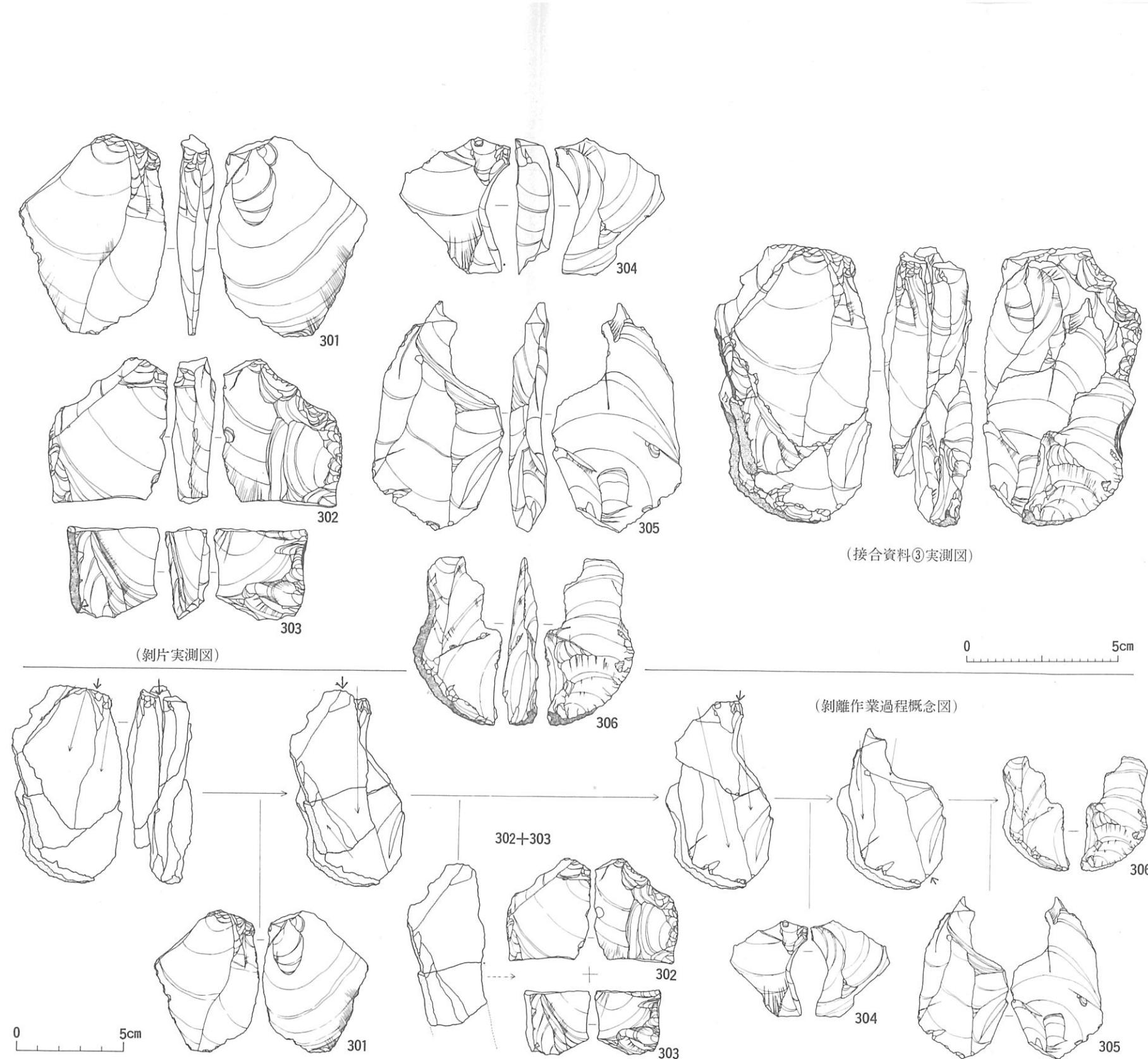
○⑪ピット出土の剥片類は数点を除いては同一石材のものであり、いずれも石核を残さずにして剥片に分割されたものであった。このことから石器とする石材を精選し、あらかじめ剥片に分割し、いずれ石器となるべき素材として住居内に貯蔵していたことが明らかである。

しかし住居跡床面からは台石、工具、チップ等の残骸は全く発見されていない。恐らくこの場合は剥片に分割する作業も、剥片を石器に加工する作業も住居外で行われていたものであろう。

○FG50住居跡内は⑪ピットの剥片類以外にも床面から最も多数の石器、フレークが出土したが、前述の様に接合資料と同石質のものは発見されなかった。他の遺構出土の石器、フレークも同様である。従って接合資料の欠失部分がどこへ持ち去られたかは全く不明である。あるいは当遺跡の未調査部分で発見される可能性もあるが、またどこかの地へ持ち去られたことも否定はできない。将来的にこの不明点を解決するためには、今回の報告では検討できなかったが欠失した剥片の復元作業が必要な課題である。

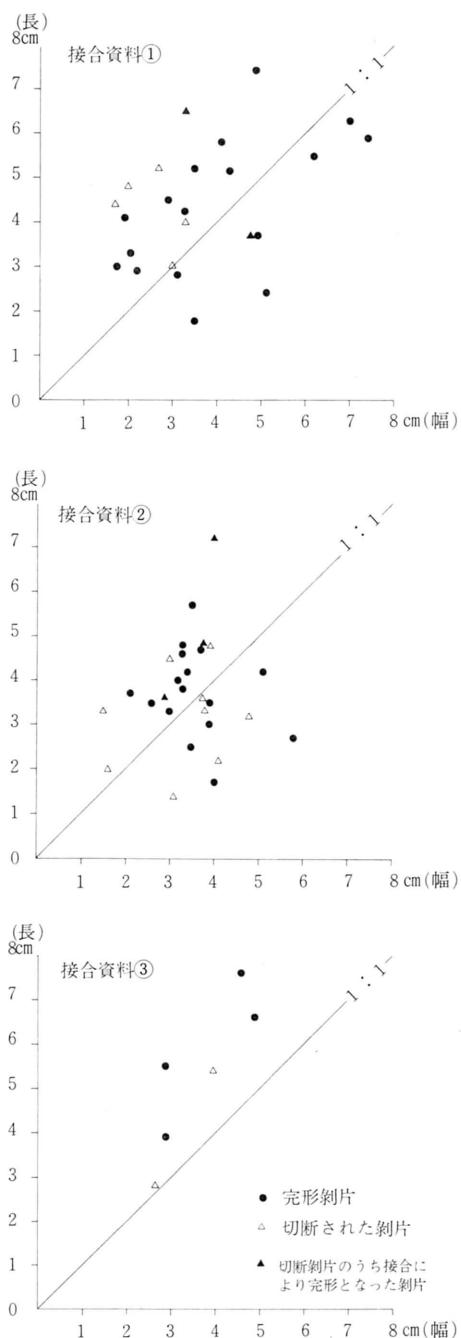
○①～③の接合資料はそれぞれ剥片剥取の作業過程が異っている。資料①の場合はほとんど打面を作らず原石面から加撃している。②の場合はまず打面を作りそこから剥離作業を開始して最終剥離面新たな打面として約90°ずつ転位しながら剥離作業を行ったもの。③の資料は上下に打面を作り剥離作業を行ったもので、接合された剥片の数が少なく断定はできないが、②に見られる打面の90°転位は行われていないと思われる。この様な3者3様の剥離技法は自ずから剥離される剥片の大きさや形態に規制を与えるものであり、①例の場合は厚く大形の、また不定形の剥片が多く得られている。②例の場合は最も規制が強く、回が進むにつれ得られる剥片は一定の大きさを脱し得ないものとなってくる。③の場合は特に縦長の良好な形態の剥片が得られている。

この様に剥離技法と得られる剥片の大きさや形態とには相関関係が見られるもので、このことには石器製作の母体となる剥片剥離作業にある種の意図を感じさせられる。これはこの作業によって得られた剥片はそのまま石器の素材となる性格を有するという点による。すなわち、ある種の石器を完成させる場合素材となる剥片はある程度この石器に適した形態を備えていなければならず、裏を返せば、その剥片の持つ大きさや形態がそれから作られる石器の種類を限定していることとなり、先のある種の意図とは剥片剥離の段階で後に作り出される石器に適した剥片への目的剥離が行われてはいないかということである。例えば前記ⅣのタイプのためのあるいはⅢaタイプのためという様な短絡的な結びつきではないにしろ、各種の石器の素材が



第54図 接合資料③実測図及び剥離作業過程概念図

第11表 剥片計測値



第55図 接合資料長幅比

接合資料1 完形剥片

No.	最大長	最大幅	最大厚
101	7.0	5.4	1.8
102	4.9	5.2	1.5
103	4.4	2.2	0.8
104	3.1	1.8	0.7
105	3.6	4.9	0.9
106	6.3	7.0	1.5
107	5.9	7.6	1.5
108	5.5	6.2	1.6
109	2.8	3.1	0.9
110	1.9	3.6	0.5
111	4.7	2.9	1.4
112	5.8	4.1	0.7
113	3.7	4.9	1.4
115	5.2	3.5	0.9
120	4.1	1.9	0.6
121	2.9	2.2	0.8
122	2.5	5.1	1.4

切断剥片

No.	最大長	最大幅	最大厚
202	4.5	3.0	0.9
204	4.8	3.9	1.2
205	3.4	3.8	0.9
207	2.2	4.1	0.8
208	3.2	4.8	0.9
209	3.6	3.8	1.0
212	2.0	1.6	0.6
213	1.4	3.1	0.6
219	3.3	1.5	0.7

接合資料3 完形剥片

No.	最大長	最大幅	最大厚
301	6.5	5.0	1.1
304	3.7	4.5	1.2
305	6.0	4.4	1.3
306	5.3	2.8	1.2

接合資料2 完形剥片

No.	最大長	最大幅	最大厚
201	4.0	3.2	0.7
203	3.3	3.0	0.7
206	3.0	3.9	1.2
210	1.7	4.0	0.5

切断剥片

No.	最大長	最大幅	最大厚
302	5.5	4.0	1.3
303	2.9	2.8	1.3

高畠遺跡

すべて偶然の所産ではなくして、ある程度規格を持つ剝片を製作し、これを貯えておいたという可能性は充分に考えられる所である。FG50住⑪ピット出土の接合資料は、すべて同一石材でありながら、全く異なる剥離技法を用い、得られた剝片類にそれぞれの規格を与えていているという事実は前述の推定に一つの裏づけとなると考えている。この様な製作技法と得られる剝片類との関係は旧石器時代の石器製作技法においてはさらに強い制約を持っている訳であるが、この時期の石器製作技法への研究に比べて、立ち遅れがちの縄文時代の石器製作技法の一例として好資料を提供するものと考える。今回の報告に際しては時間の制約なども手伝ってなお検討の余地を多く残した。まだ接合資料の図化の点でも問題点を感じており満足のいく結果とはならなかった。これらの反省点を元にいざれ機会を得てさらに検討を進めたいと考えている。

V. まとめ

以上個々の項目についてまとめ若干の考察を行ってきたが、この結果高畠遺跡が縄文中期末葉の大木10式期に営まれた集落の一部であることが認められた。遺跡は北上川と添市川の合流点に接した広範な段丘上に立地するという恵まれた条件を有している。

10棟あまりの住居跡はいずれも中期末の住居跡の特徴といえるいわゆる『複式炉』を備えていたが、その構造は福島、山形など東北南半で見られる整然と規格された炉とは幾分ニュアンスが異っていた。県内の当該時期の遺跡をかいま見る限りでは、やはり当遺跡と同様の事が言えそうである。東北北半少なくとも県内では東北南半と比較して複式炉の構造はかなり簡略化してきているものであろうか。次にこれらの遺構の時期的な問題であるが、大略的に大木10式期と把えたが、細別するならば出土土器の流れから見て若干のズレは想定できる。前記の土器グループ7、8類を主体的に出土した遺構（？）としてはGD03住居跡の土器廃棄層がある。これを新しい時期の土器類とするならば当住居跡の埋土中に廃棄された土器類が本遺跡中では最も新しいということがいえ、ここに土器を廃棄した時期の住居跡が本遺跡中では最も新しいものといえる。しかし住居跡床面から7、8類土器を出土した遺構は検出されなかった。さらに1、2、3類土器から4、5類土器への流れを考えると、ここに一線を引くことは必ずしも妥当とはいえないが、1、2、3類土器を床面から出土した遺構にはFE53住、FI56炉、GA56住、GE53住が挙げられ、4、5類土器はGD03住床面に見られた。

本遺跡に居住した人間は恐らく台地上の狩猟、採集と、二つの川に依存する魚撈が主たる生業となっていたと想像されるが、すべての遺構でこれを裏づける資料が発見されている訳ではない。この点ではFG50住居跡は石器のセット関係をある程度満たした形で残存し、スクレー

バー類の出土頻度が目立った。また、石器のセットのみならず石器製作過程の一端を窺える良好な接合資料も出土し、その製作技法が三者三様の方法で行われていたことを確認できた。縄文時代の石器研究の分野は形態に続き機能の面からの研究が盛んとなっている近年であるが、製作技法面からの研究は旧石器時代のそれと比較して立ち遅れが目立つ分野である。既報告書等でこの時期の類例資料に遭遇することがかなわず、他の資料との比較検討することはできなかった。今回の報告は紙面と時間の制約に追われて充分な結果を提示することはできなかつたが、縄文時代の石器製作過程復元の一例として問題提起となり得ると考える。

〈参考文献〉

- 草間俊一他 (昭46) 「貝鳥貝塚」 花泉町教育委員会
 同 (昭49) 「崎山弁天遺跡」 大槌町教育委員会
 及川洵・小野寺 (昭47) 「堂の前貝塚」 陸前高田市教育委員会
 信吾・遠藤勝博
 吉田義昭 (昭35) 「門前貝塚」 (郷土資料館報告) 盛岡市公民館
 及川洵他 (昭49) 「門前貝塚発掘調査概要」 陸前高田市教育委員会
 (財)岩手埋蔵文化 (昭52) 「繫第III遺跡現地説明会資料」
 財センター
 同 「広瀬II遺跡現地説明会資料」
 同 (昭53) 「都南村 湯沢遺跡」
 岩手県教育委員会 (昭54)
 円羽茂 (昭46) 「東北地方南部における中期縄文時代中・後業土器群研究の現段階」 (福県考古
 12) 福島考古学会
 越田和夫 (昭47) 「縄文時代中期における住居跡(炉址)について」 福島大学考古学研究会紀要第
 2冊
 円羽茂 (昭47) 「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」 福島大学考
 古学研究会紀要第1冊
 後藤勝彦・遊佐五郎他 (昭47) 「宮城県柴田郡小崎町中沢遺跡発見の竪穴住居と複式炉について」 (仙台湾) 仙
 台湾刊行会
 秋田市教育委員会 (昭51)
 山形県教育委員会 (昭51)
 福島県教育委員会 (昭50)
 山形県教育委員会 (昭54)
 小平市鈴木遺跡調査会 (昭53)
 荒澤長介編 (昭52)
 (昭53)
 秋田県考古学協会 (昭52)
 麻生優・加藤晋平他 (昭50)
- 「小阿地 下提遺跡・坂ノ上遺跡発掘調査報告書」
 「小林遺跡」
 「東北自動車道遺跡調査報告」
 「熊ノ前遺跡」
 「鈴木遺跡I」
 「磯山」 東北大学文学部考古学研究室考古学資料集第1冊
 「岩戸」 第2冊
 「米ヶ森遺跡発掘調査報告書」
 「日本の旧石器文化 第1巻」 雄山閣

高畠遺跡

第12表 石器計測値

図版番号	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
11図-4	VI	12.85+α	5.3	3.0	333.6	角閃石黒雲母玲岩	北上山地
13図-4	〃	13.1+α	5.7	2.5	283.50	千枚岩	〃
14図-1	I	2.05	1.15	0.25	0.50	チャート	〃
-2	〃	1.90	0.45	0.25	0.80	鉄石英	
-3	〃	2.45	1.55	0.25	0.70	珪質頁岩	零石
-4	II	4.35	1.30	0.55	1.50	〃	〃
-5	III b	6.30	2.45	0.60	9.70	〃	〃
-6	III a	4.40	6.35	1.60	21.00	〃	〃
-7	〃	4.10	2.55	0.75	9.25	〃	〃
-8	IV a	7.35	2.80	0.90	13.80	〃	〃
-9	〃	4.80	2.00	0.60	0.83	〃	〃
-10	IV	2.60	3.20	0.20	0.55	〃	〃
-11	IV a	6.40	5.40	1.80	57.50	硬質頁岩	
-12	IV b	4.80	2.90	0.70	10.00	珪質頁岩	〃
-13	IV c	5.4	4.70	0.60	0.95	〃	
-14	IV	3.0	2.80	0.90	7.40	〃	
-15	IV	2.66	2.05	0.60	3.50	〃	
-16	〃	3.05	2.05	0.85	26.6	玉ずい	
-17	〃	2.20	3.80	0.70	74.0	〃	
-18	〃	1.80	3.60	0.70	4.85	硬質頁岩	
-19	IV	3.20	4.00	1.05	12.0	〃	
-20	〃	4.60	3.40	0.90	15.30	〃	
23図-1	II	3.60	1.10	0.35	1.20	珪質頁岩	
-2	III a	6.70	2.70	0.70	13.40	石質凝灰岩	
-3	IV c	4.00	5.40	1.20	16.00	珪質頁岩	
-4	V	7.0	4.80	1.20	27.7	硬砂岩 細粒珪質	
26図-3	(IV)	(4.0)	3.80	1.00	8.70	石質凝灰岩	零石西部
-4	IV b	8.95	3.10	1.70	29.40	〃	新第三紀脊染部
29図-2	IV b	8.90	3.30	1.75	36.50	珪質頁岩	
31図-4	IX	不明	11.90	2.30	221.00	粗粒凝灰岩	
35図-4	IV c	5.90	5.40	1.30	38.30	珪質頁岩	
-5	V	7.15	2.65	0.95	18.3	細粒珪質石質 凝灰岩	
-6	VII	12.10	6.70	1.75	151.20	淡緑色千枚岩	
-7	VIII	9.03	5.80	3.70	258.20	石英安山岩	

しら さわ
白 沢 遺 跡

遺 跡 記 号 : S S

所 在 地 : 紫波郡矢巾町白沢第3地割田屋201

調 査 期 間 : 昭和48年7月20日 ~ 9月29日

調査対象面積 : 3,726m²

平面測量基準点 : 東京基点481.740km (E A 50)

基 準 高 : 海拔111.20m

I. 遺跡の位置と環境

1. 立地と現状

白沢遺跡は岩手県紫波郡矢巾町白沢に所在し、国鉄東北本線矢幅駅の南約1.7kmの地点にある。国道4号線が東1.5kmを南北に、また、西300mを県道矢巾一不動線が走り、周囲は交通の往来が盛んな所である。

本遺跡は岩手県のほぼ中央部の平坦地にあり、西側は奥羽山脈、東側を北上山地がそれぞれ南北に走っている。西部は奥羽脊陵山地の一部をなすもので、基本的には、グリーン・タフで構成されているのに対し、東部山地は古生層及び花崗岩類からなり、東・西部の山地は互いに異なった地質区にそれぞれ属している。

北上平野は、この東西の山地の間に広がり、北上川はその平野東縁をほぼ直線的に南流し、宮城県北東部の石巻湾に注いでいる。主流部の延長249km、流域面積1万余km²におよぶこの北上川は、岩手県の県北部に源を発し、古来より農業、交通など人々の生活に大きな役割りを果してきた。この北上川の支流、特に北上川中流域（盛岡市～前沢町）には奥羽山系から流出する支流が形成した大小の段丘化した扇状地の発達がみられる。これらのうちのいくつかは、主として地形学的な面から何人かの学究によって研究がなされているが、全流域を対象とした第四系および地形の総合的な研究は中川久夫氏らによって更に深められてもいる。それによると、北上川中流沿岸の段丘群を、地形および構成層とそれを被覆する火山灰層の検討をとおして、古期から順に西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘の主要3群に分類している。白沢遺跡所在の北上川中流域北部では、これら段丘に相当するものとして石鳥谷段丘、二枚橋段丘、花巻段丘、都南段丘（飯岡野段丘）が設定されている。

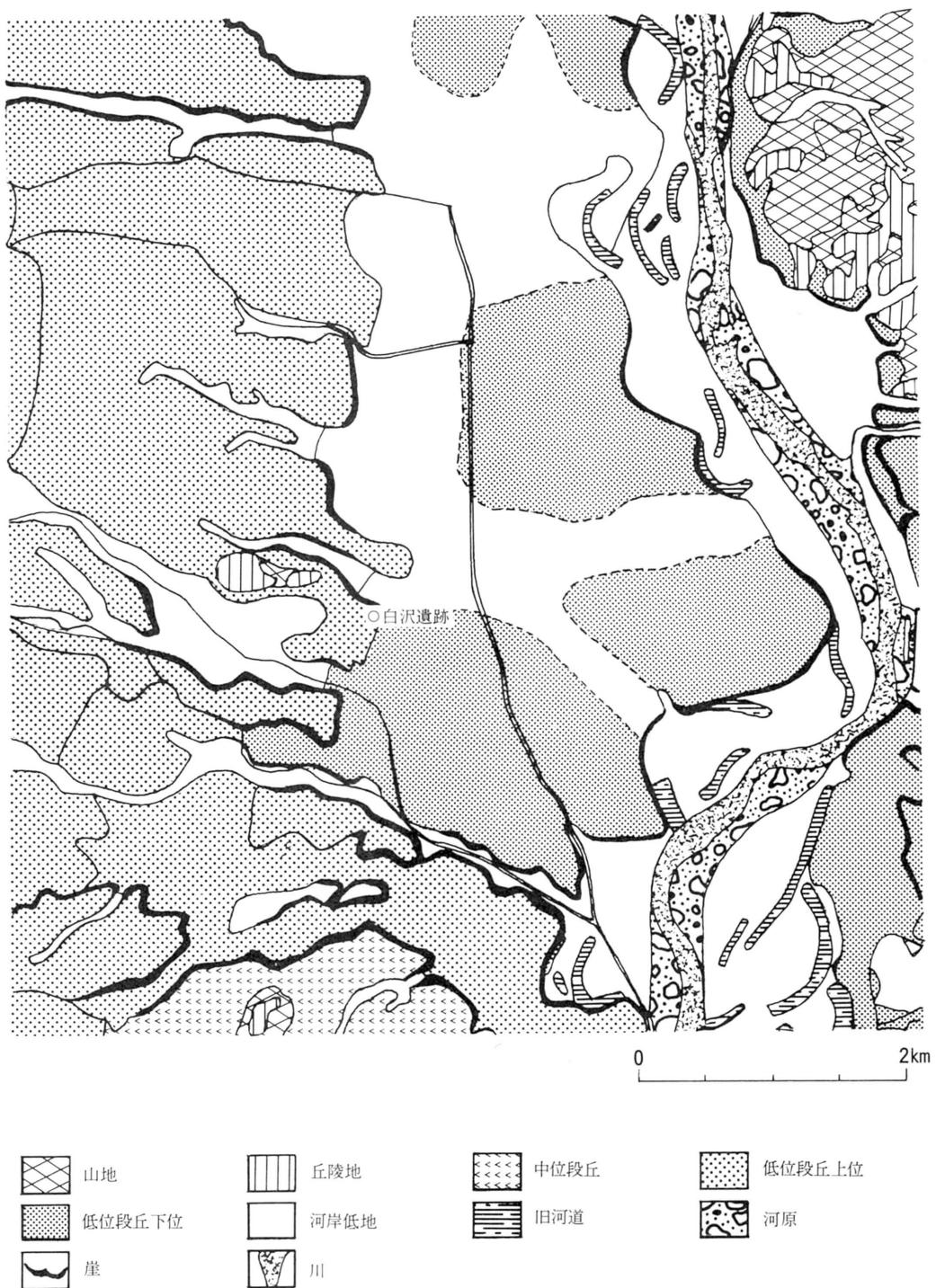
また、段丘発達地の西側には第三系より成る高さ800m以上におよぶ山地がある。山地東縁の外方にも第三系に属する安山岩の露出があつて稻荷山、飯岡山、湯沢森、城内山、北谷地山、日詰の城山など残丘状に段丘面発達区内に分離して散在する。

次に第1図・地形分類概念図に示した遺跡周辺部の地形を見てみる。

本遺跡周辺の地形は大別して山地、丘陵地台地（段丘）、河岸低地などからなるが、河岸低地を除けば北上川西岸の大半は台地（段丘）であり、これらは扇状地や旧河原が段丘化したものである。これらの段丘は四区分されていることは既に述べたとおりである。

高位段丘（石鳥谷段丘）は、本遺跡の南、紫波町日詰附近および志和南西部に主な分布がみ

白沢遺跡



第1図 遺跡周辺の地形分類概念図

られるほか、本遺跡西方の矢巾町集団開墾地周辺に残片的に発達している。面はかなり開析が進み、残丘状に取り残された日詰附近では、頂面はなだらかな起伏面となっている。この上位段丘は日詰附近で3m以上の砂粘土を伴う礫層と、これを覆う厚さ1m前後の火山灰層で構成され、構成礫層の風化は著しく進み、赤色を呈している。

中位段丘（二枚橋段丘）は高位段丘の前面に広がり、極めて広面積をもって発達する。特に日詰附近以南に発達し、石鳥谷までの間は石鳥谷段丘にともなって分布する。二枚橋附近の模式地では、厚さ6mの礫と、その上位の砂および灰白色粘土が約1.5mに覆い、厚さ3.5m以上の堆積物からなっている。この中位段丘は、日詰以北では構成層を欠き、二枚橋礫層を削って生じた侵食面上に厚さ50cm内外の粘土層がのっている。中川氏らはこれを花巻段丘と呼んでいる。

この低位段丘の上位面をなす花巻段丘は、西部後背山地東麓から東方に広範に発達する。高・中位段丘よりは新鮮な面をもっている。また、花巻段丘より下位面にある段丘として都南段丘がある。都南段丘は、花巻段丘の外方またはこれを刻む河谷に沿って見られるもので、日詰以北の北上川上流では一般に段丘崖の比高は小さく、河岸面との境界が不明瞭になる部分が多い。

飯岡野段丘は都南段丘に相当するものと思われ、北西部の飯岡野に花巻段丘面を覆う礫層が発達し、その堆積面は山麓状地面としてよく保存されている。

白沢遺跡は以上のような地形区分の中では低位段丘上位面の花巻段丘上に位置しており、段丘崖東縁部に占地する。下位水田面との比高は約1mである。調査地北端は西方からの段丘が崖縁辺部となるが、下位面との比高は東縁部より高い。調査地南端は東流する沢状の小河川によって開析され、低湿地状になっているが、現在は水田として利用されている。また、調査地中央部は以前、宅地その他の工事のため削平が行なわれており、旧地形の一部が失なわれている。

現状は北調査地が果樹園であるが、以前宅地跡として利用されており、標高約111mである。調査地中央部は畑地として利用され、北調査地とほぼ同じ標高を持っているが、一部前述したように宅地化のための土取りがあり、削平されているため約1m低くなっている。南調査地は北調査地とほぼ同じ標高を示す微高地となっている。現状は畑地であるが、以前は植林がなされ、更に調査時以前の昭和47年11月に、ブルドーザーによる削平があり、旧地形は破壊されたいた。

白沢遺跡

2. 周辺の遺跡

本遺跡の周辺には、原始・古代から近世に至るまでの数多くの遺跡が知られている。しかもこれらの遺跡は前述した各段丘にそれぞれの特徴を有して占地している。また、本遺跡に関連する古墳も周辺に存在していることも見逃すことはできない。

各遺跡の位置と遺跡名は第2図、第1表のとおりであるが、遺跡を各時期で考え、その占地する位置を見てみると次のようになる。

・**縄文時代の遺跡**：花巻段丘とそれより高い段丘上、および後背山地山麓緩斜面上、残丘状の高位段丘、山地などに主として分布する。東北新幹線関連遺跡としての紫波町西田遺跡（第2図には範囲外のため記入なし）が高位段丘の残丘に位置する。都南村湯沢遺跡は中位段丘としての二枚橋段丘にのる。河岸低地や低位段丘にはほとんど位置していないが、本遺跡のように段丘縁辺部からの縄文早・前期土器片出土については、今後の周辺遺跡の調査結果を総合的に検討を進める中でより明らかにされると考える。

・**弥生時代の遺跡**：他の時期と比べ、該当例が少なくその立地については不明な点が多い。いずれ、今後の出土例の増加をまって検討されるべきであろう。

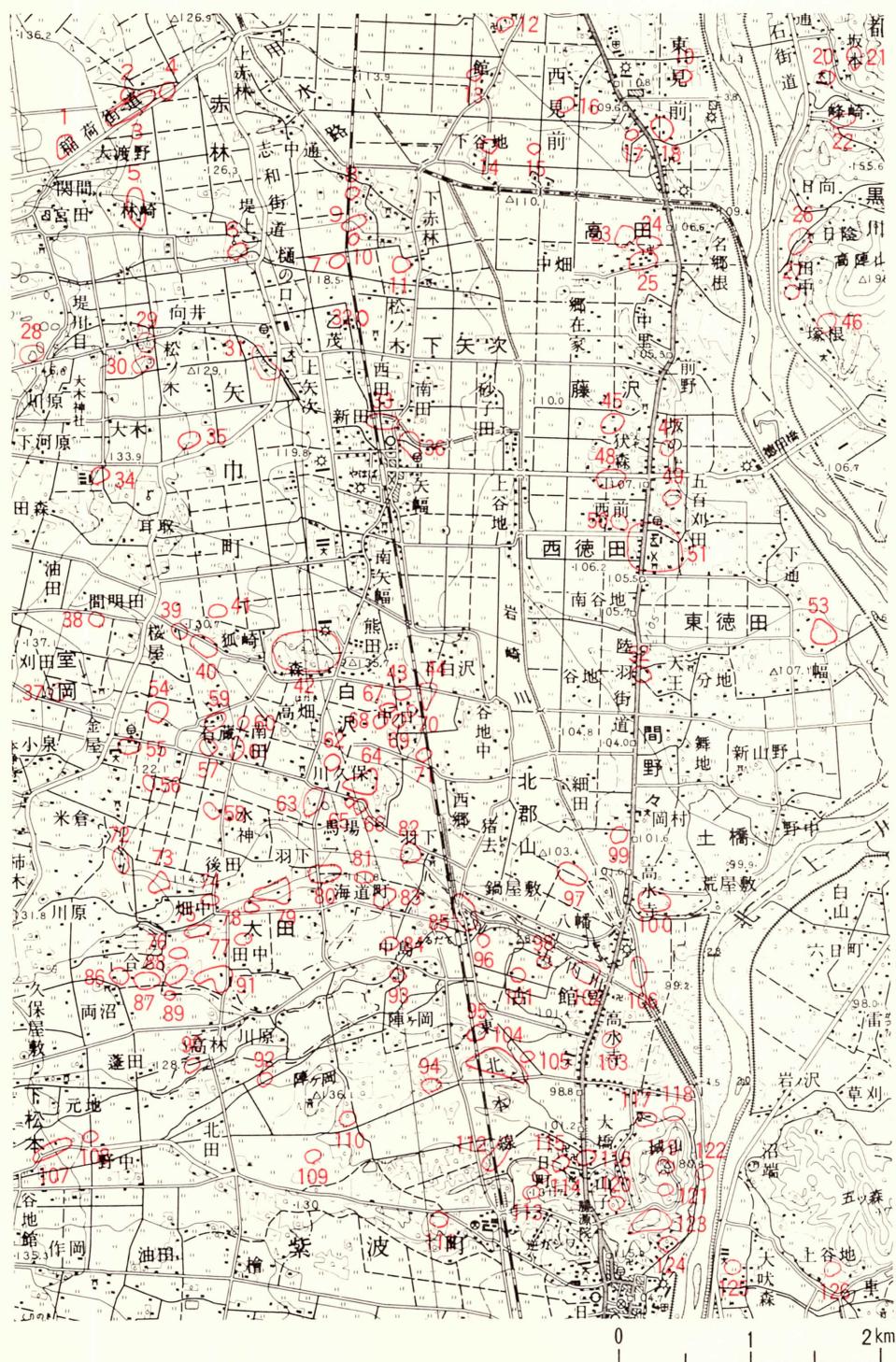
・**奈良・平安時代の遺跡**：縄文、弥生期に比べ、古代の遺跡はかなりの数を占める。そしてその立地は、第1図・地形概念図の主要面をなす花巻、都南の低位段丘面上にのり、また一部遺跡は河岸低地からも認められている。特に、本遺跡の古墳と同じ性格を有すると考えられる狹森・蝦夷森の古墳が都南段丘面上の周辺地域に点在しており、終末期の古墳群として古くから諸書に紹介されている著名な遺跡である。

また、矢巾町徳丹城跡、盛岡市の太田方八丁遺跡も低位段丘上に位置しており、当地方における古代史の解明のために重要視されている城柵・官衙遺跡である。

・**中世・近世の遺跡**：「城館」および「豪族屋敷」は調査例も少なくその範囲、規模について不明な点も多い。また、立地・地形についても今後の調査を待たねばならないが、一般的に城館は後背山地の斜面、高位段丘上の頂部の平坦な丘陵の一部、残丘状の高位段丘、山地などに立地するものがほとんどである。豪族屋敷（矢巾町久保屋敷）は花巻段丘面上に位置する一例のみである。なお、地形区分の記述に関しては、下記の資料を参考にした。

- ・岩手県企画開発室 1975 「北上山系開発地域土地分類基本調査「日詰」、「盛岡」」
- ・経済企画庁総合開発局 1974 「土地分類図（岩手県）」
- ・中川 久夫他 1963 「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』第69巻、第812号
- ・岩手県教育委員会 1979 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書・I・II」

白沢遺跡



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

(日 詰)

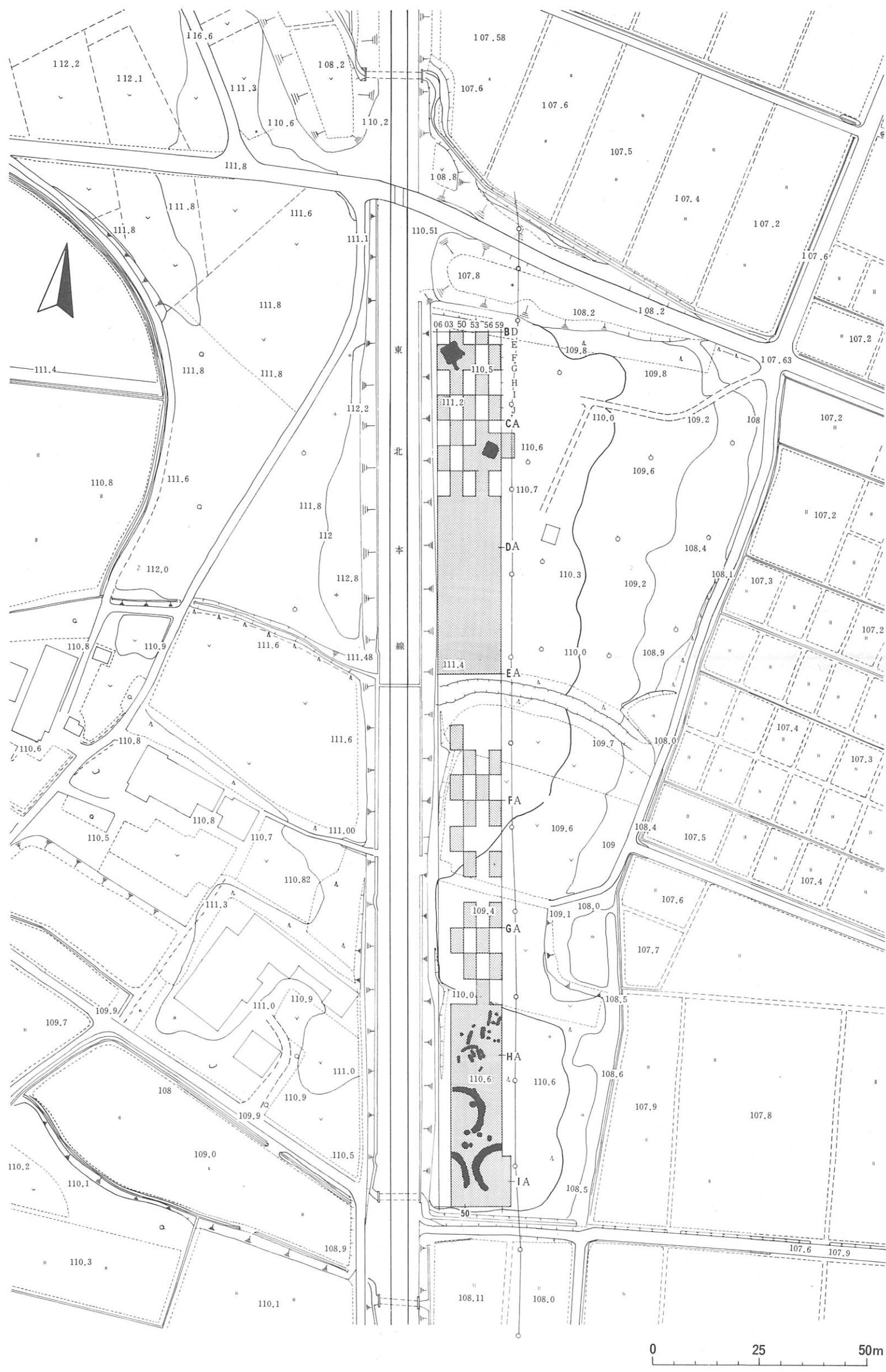
白沢遺跡

第1表 周辺の遺跡地名表

No.	遺跡名称	時期	No.	遺跡名称	時期	No.	遺跡名称	時期	No.	遺跡名称	時期
1	野田新田遺跡	縄文(中)	33	又兵衛新田遺跡	奈良・平安	65	白沢遺跡 V	平安	97	北郡山遺跡	
2	大渡野遺跡	平安	34	田屋遺跡	縄文(後)	66	白沢遺跡 IV	奈良・平安	98	中田遺跡 I	平安
3	大渡野II遺跡	縄文	35	上矢次II遺跡	縄文	67	白沢遺跡 IX	縄文(前) 奈良	99	岡村遺跡	奈良・平安
4	上赤林・ 六串田一里塚	近世	36	南矢巾遺跡	奈良・平安	68	白沢遺跡 VII	奈良・平安	100	高水寺遺跡	奈良・平安
5	宮田遺跡(A)(B)	平安	37	久保屋敷城柵跡 久保屋敷II遺跡		69	白沢遺跡 X	奈良・平安	101	念佛堂遺跡	
6	南野遺跡	縄文	38	桜屋遺跡	平安	70	白沢遺跡 XI	奈良・平安	102	中田遺跡 II	平安
7	茨垣遺跡	縄文・弥生 平	39	下煙山遺跡	奈良・平安	71	えぞ森古墳	奈良	103	古屋敷遺跡	平安
8	下赤林III遺跡	縄文	40	煙山遺跡	奈良・平安	72	長根遺跡	縄文・平安	104	杉の上II遺跡	奈良・平安
9	下赤林II遺跡	平安	41	細屋遺跡	平安	73	太田遺跡 II	平安	105	新田遺跡	平安
10	下赤林I遺跡	縄文・平安	42	白沢森遺跡	縄文 (前・中)	74	太田遺跡 V	縄文 奈良・平安	106	稻村遺跡	平安
11	欠堰遺跡	縄文(後) 平	43	白沢遺跡	奈良・平安	75	太田遺跡 IV	平安	107	宮手遺跡	
12	三百刈田遺跡	平安	44	白沢えぞ森古墳遺跡	縄文(早・前・晚) 奈良・平安	76	太田遺跡 I	縄文(早・前) 平	108	宮手朴田経塚	
13	見前館遺跡	平安・中世	45	狄森古墳	奈良・平安	77	太田遺跡 VI	平安	109	柳原遺跡	平安
14	下谷地I遺跡	奈良	46	岡田遺跡	縄文	78	杉の下遺跡	平安	110	陣ヶ岡(月の輪型)遺跡	縄文(後) 平
15	下谷地II遺跡	平安	47	白山堂遺跡	平安	79	太田遺跡 VII	平安	111	七久保遺跡	平安
16	久保屋敷遺跡	平安	48	田郷遺跡	平安	80	太田遺跡 IX	平安	112	杉の上III遺跡	奈良・平安
17	上畠遺跡	平安	49	館畠遺跡	奈良・平安	81	太田遺跡 X	平安	113	北七久保遺跡	平安
18	石名坂遺跡	奈良・平安	50	西前遺跡	平安	82	北郡山遺跡	平安	114	善念寺遺跡	縄文(後・晩)
19	大桜前遺跡	平安	51	南谷地丹遺跡	平安	83	太田遺跡 IX	平安	115	善念寺山古墳	縄文(後) 奈良・平安
20	手代森遺跡	縄文(晩)	52	間野々一里塚	近世	84	中島遺跡	平安	116	北七久保一里塚	江戸
21	下通遺跡II	縄文(早・前・中)	53	渋川遺跡	奈良・平安	85	古館橋遺跡	平安	117	高水寺遺跡	縄文(中・後)
22	峯崎遺跡	縄文(晩) 弥生・平安	54	煙山III遺跡	奈良・平安	86	両沼遺跡	平安	118	御堂前遺跡	奈良・平安
23	高田遺跡	平安	55	煙山II遺跡		87	両沼遺跡 II	縄文・平安	119	高水寺遺跡	
24	高田高伝寺遺跡	不明	56	室岡遺跡	奈良・平安	88	三合遺跡	平安	120	山子遺跡	縄文(後)
25	高田館遺跡	中世	57	石蔵遺跡	平安	89	両沼遺跡 III	縄文 平安	121	二日町吉兵衛遺跡	縄文(中)
26	黒川館遺跡	中世	58	太田遺跡 VIII	平安	90	太田川原遺跡	縄文(晩)	122	河岸場遺跡	
27	下通遺跡I	縄文(後) 平	59	白沢遺跡 III	奈良・平安	91	太田遺跡 III	平安・中世	123	吉兵衛館遺跡	中世
28	山王茶屋遺跡	縄文(晩)	60	白沢遺跡 II	奈良	92	久々館遺跡		124	日詰石田遺跡	平安
29	大道遺跡	縄文(前・中・後)	61	白沢遺跡 I	奈良・平安	93	中島城柵跡	中世	125	間木沢遺跡	縄文(後)
30	煙山I遺跡	奈良・平安	62	白沢遺跡 VII	奈良・平安	94	蓮沼遺跡	縄文(晩) 奈良・平安	126	花立遺跡	縄文(中)
31	上矢次I遺跡	平安	63	不動馬場遺跡	平安	95	杉の上 I 遺跡	奈良・平安			
32	高畠遺跡	縄文	64	白沢遺跡 VI	奈良・平安	96	古館駅前遺跡	奈良・平安			

遺跡名は「岩手県埋蔵文化財包蔵地調査カード」による。

なお、遺跡名のローマ数字は上記カード記載のままであるため統一を欠く面もある。



第3図 白沢遺跡グリッド配置図

II. 調査の方法と経過

1. 調査の方法

白沢遺跡は東北新幹線建設にあたり、岩手県教育委員会が昭和47年6月に実施した分布調査の結果、発見された遺跡である。本遺跡は字名をもって「白沢遺跡」と呼称したものである。

なお、第1表・周辺の遺跡地名表に「白沢遺跡I～XI」、「白沢森遺跡」が記入されているが、本遺跡とは地点の異なる位置に所在するものである。本遺跡と同一の位置に所在するものは、地名表では「No44・白沢えぞ森古墳遺跡」として記入されている。

調査は、東京起点481.740kmと481.820kmの二点を結びその直線とその延長を遺跡の中心軸に定め、481.740kmの地点を本遺跡の基準点（EA50）とした。以下、序文で記した方法により、中軸線に平行、直角に3m×3mのグリッドを8ブロック設定し、調査区全体の地割を行なった。遺構に関する各種図面の基準高は、できる限り海拔111.20cmに統一するようにした。なお、各グリッドおよび遺構の記名法、遺構調査の手順、その他も前記同様序文に記述した方法に全て準じ実施した。

2. 調査の経過

調査は昭和48年7月20日から同年9月29日まで実施したが、本調査前の昭和47年12月、調査対象地内の畠地（南微高地）にブルドーザーが入り、既に表土の削平が行なわれている旨の連絡があり、急ぎ現地確認の結果、その事実が認められた（図版1-2）。そのため、旧地形の全景写真を撮影することはできなかった。

本調査はまずB～Dブロックまでの果樹園（リンゴ畠）、E～Fブロックの畠地（豆畠、陸稲）、G～Iブロックの豆畠の栽培物などの撤去を行ない、その後、グリッドの設定作業を実施した。粗掘は北Bブロックから行ない、南微高地（Gブロック以南）は7月31日から実施した。特に南微高地上は遺構の精査に多くの日時を要した。

III. 調査の結果

1. 遺跡の基本層序

本遺跡は前述のように果樹園、旧宅地跡（現畑地）、畑地に分かれており、それぞれに標高差がある。したがって上記3地点において基本土層の観察を行なった。特に、住居跡を検出したB～Dブロック、円形周溝を検出したG～Iブロックの2地点については国鉄のボーリング資料と合わせて観察した。層序の概要は次のとおりである。

- FG50グリッド（第4図-①）

第Ⅰ層…表土（暗黒色・黒ボク質で軟らかい）

第Ⅱ層…粘土（黄色・火山灰質）

第Ⅱ'層…粘土（暗青灰、淡緑色～暗灰色・部分的に有機物少量混入）

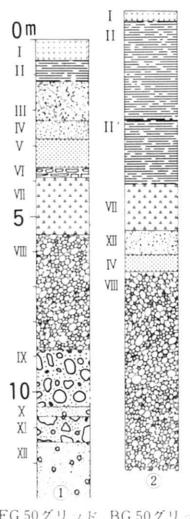
第Ⅲ層…砂質粘土（暗黄灰色・火山灰質、粘性大）

第Ⅳ層…粘土混粗粒砂（暗灰色・小礫）

第Ⅴ層…粗粒砂（黄褐色～淡緑色・小礫まばらに混入）

第Ⅵ層…礫混粘土（淡緑灰色・小礫混入）

第Ⅶ層…有機質土（暗黒灰色・有機物下層部に多く混入）



FG 50グリッド BG 50グリッド

第4図

土層断面柱状図(1) ことが判明した。また、このブロックは明治35年頃まで宅地として利

第Ⅷ層…砂礫（暗青灰色・粗粒砂、粗砂、若干の粘土含む）

第Ⅸ層…粘土混砂礫（暗青灰色・密にしまる）

第Ⅹ層…中粒砂（黒灰色・礫若干混入）

第Ⅺ層…粘土混砂礫（暗青緑色・密にしまる）

第Ⅻ層…中粒砂（黒灰色・砂礫を夾む）

第4図の土層断面柱状図を参考に、C、G、Hの各ブロックの土層を見てみると、いずれも第II層の黄褐色・火山灰質土の上に約40～60cmの黒色土がのる。E～Gブロックの畑地、G～Iブロックの南微高地においては第I層の黒色土の削平がみられる。即ち、第5図に示したようにE～Gブロックの畑地は、B～Dブロックの果樹園より約150cm、削平以前のG～Iブロック（南微高地）より約180cm低い。なお、昭和30年代にブルドーザーで表土を約30cmほど削平し、客土していることが判明した。また、このブロックは明治35年頃まで宅地として利

用されていたとの地元民の話がある。

しかし、G～I ブロック（第5図①）とB～D ブロック（同④）がほぼ同じ高さの段丘面で続いていると考える場合、E～G ブロック（同③）の畠地が旧地表面から約2m近くも掘り下げて宅地化したとは考えられない。宅地化する以前にもある程度の低地化していたと思われる。このことは、同地点での深掘りによる土層観察の結果にも表われている。したがって円形周溝が検出された南微高地は南・北が若干低地化した台地状の段丘になっていたものと推定される。

各グリッドごとの土層観察の結果はつぎのようである。（第5図①～④）

• C ブロック (C J 50 グリッド)

果樹園として利用される前は、宅地として利用されており、表土中に多くのガラス、陶磁器片が混入していた。第II層の火山灰質土層は若干の砂粒の混入も見られ、下層になる程その混入も多くなる。この火山灰質粘土層はしまりの少ない、ややざらつく土質である。

• G ブロック (G B 50 グリッド)

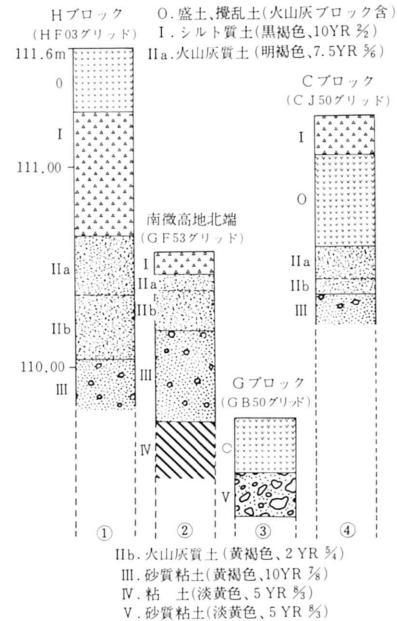
表土は約30cmの盛土になり、下層は褐色を帯びた砂質性の土層になる。

• 南微高地北端部 (G F 53 グリッド)

微高地北端の土層を観察してみると、黒色の表土が約10cmあり、II層の火山灰質土層は約30cm堆積して、その下層に砂質性の黄褐色粘土層が約45cm、更に淡黄白色の粘土層が見られる。

• H ブロック (H F 03 グリッド)

円形周溝が検出された南微高地 (G～I ブロック) は前述したようにブルドーザーによって削平されているため、旧地形を残していると思われた遺跡西方の東北本線側の土層を観察した。この結果、盛土が約30cm見られたが、これは東北本線工事の際の盛土と考えられる。第I層は黒色土で、木根等がかなり入り込んでいる。第II層は火山灰質の黄褐色粘土層で50～60cmの堆積となっている。更に下層・第III層は砂質粘土層となる。したがって第II a層が現在（調査時）の表土であり、また、遺構構築時の地表に近い面と考えられる。以上の点から第I層と第II a層の一部、および盛土も含めると約80～90cmが過去に削平されたものと推定される。しかし、最近のブルドーザーによる削平は盛土部分は西側だけと考えた場合、40～60cmが実際の削平された厚さと推定される。



第5図 土層断面柱状図(2)

白沢遺跡

2. 発見された遺構と遺物（第6図）

調査の結果、縄文時代の土壙（円形6基、溝状6基）12基、奈良時代の円形周溝4基とそれに伴う主体部1基、平安時代の竪穴住居跡2棟が発見された。

また、遺物としては、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、石器、鉄片、装飾品（ガラス玉、管玉等）、砥石などが発見された。

[1] 縄文時代の遺構

(1) 円形土壙（土壙(1)）と出土遺物

検出された円形土壙は6基であるが、うち2基は不整形の土壙である。いずれも南微高地上の中央部より若干南寄りの地点に検出された。

第2表 円形土壙計測表(cm)

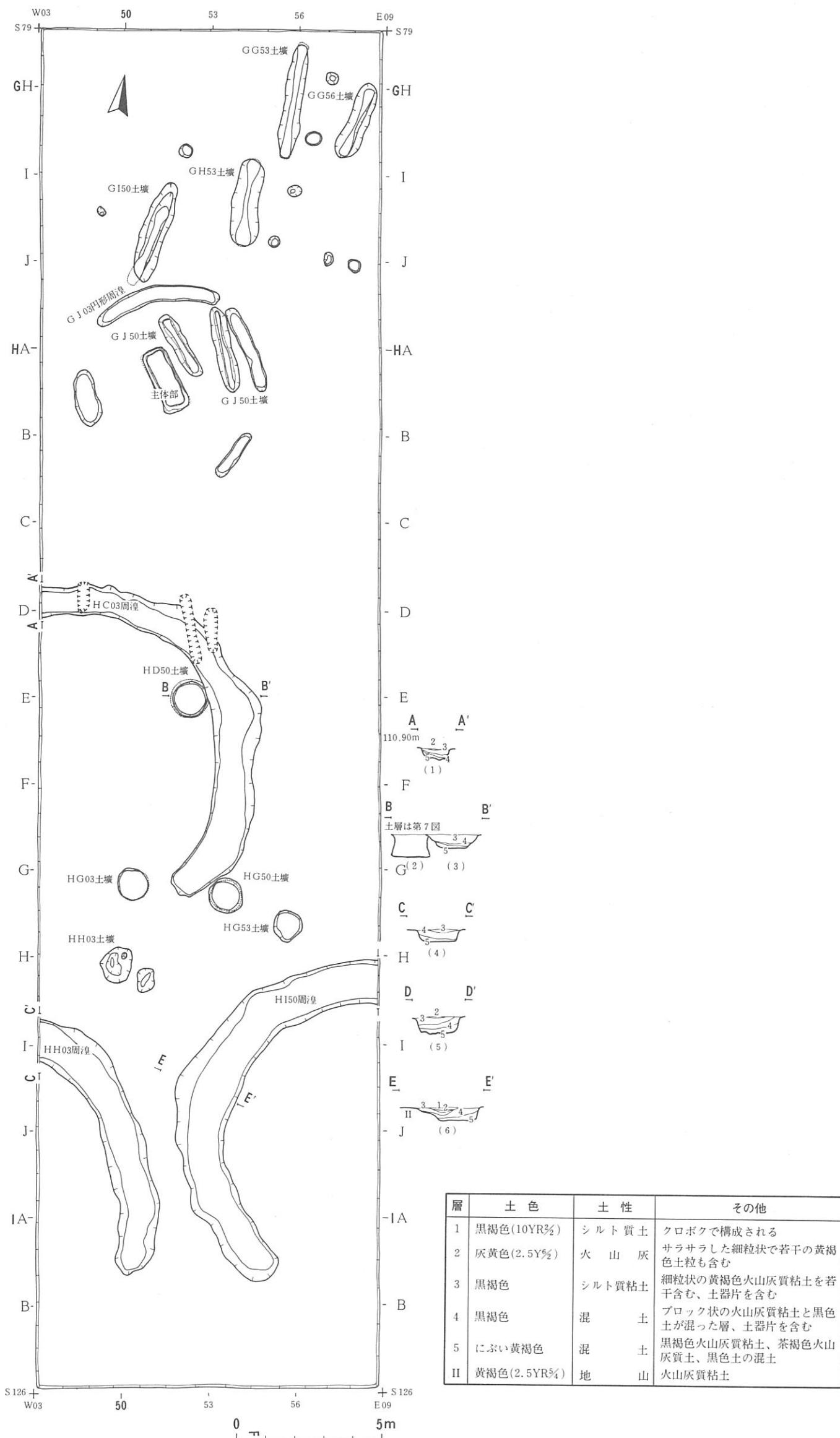
項目 土壙	開壙部(直径)	壙底部(直径)	深さ	図・写真
H D50土壙	120	134	77	7-1,
H G03土壙	106	98	25	7-2,
H G50土壙	94	82	22	7-3, 5-2・3
H G53土壙	94	82	22	7-4, 6
H H03土壙	118	47	40	7-5,
H H50土壙	55	18	20	7-6,

これら円形土壙は平面形では円形であるが断面形においては、いわゆるビーカー状、ないしは袋状を呈するものである。

・H D50土壙（第7図1）

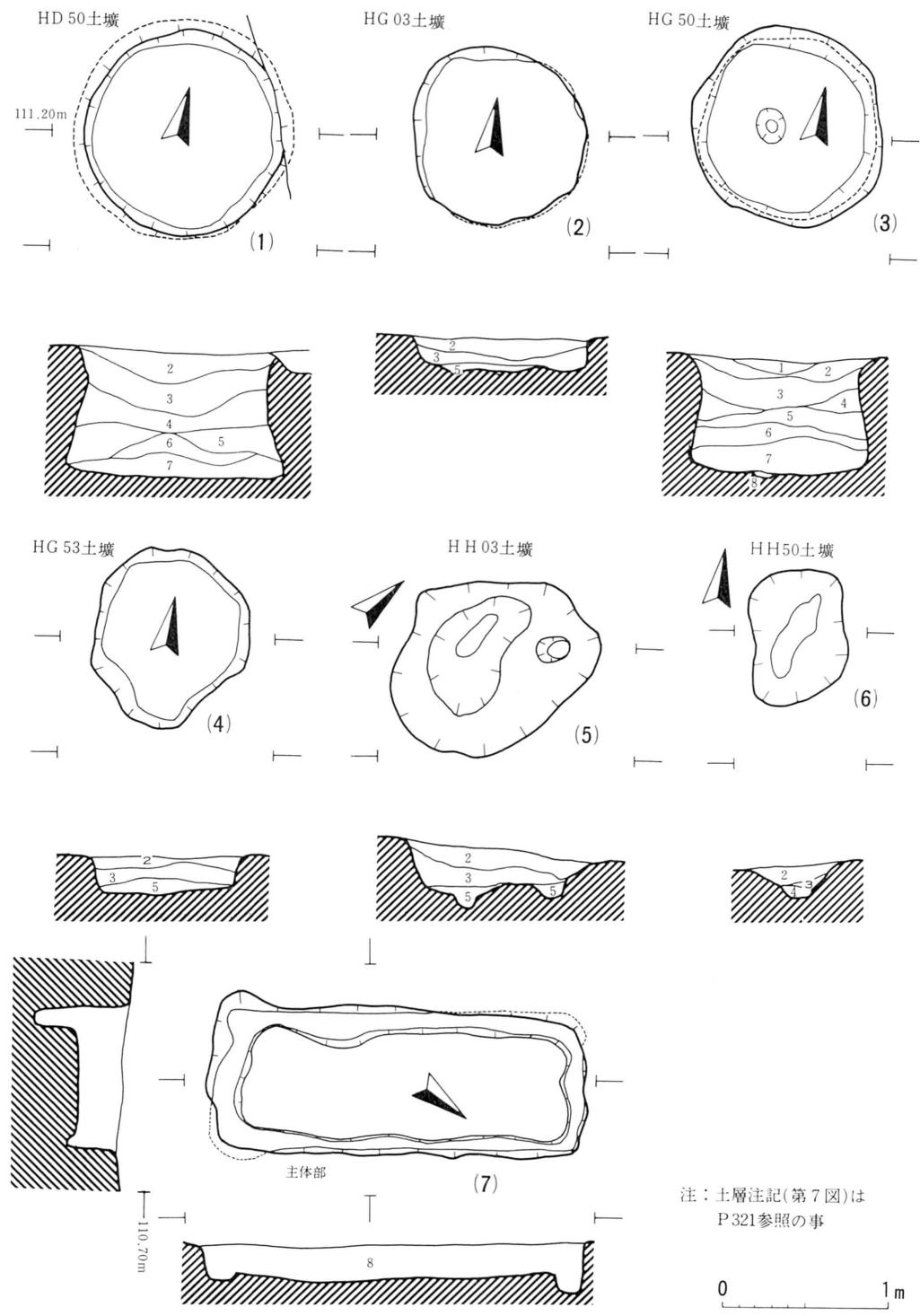
南微高地のほぼ中央、H C03周溝の内側にあり、土壙上端と周溝が切り合いの状態にある。両者の埋土状況から土壙がほぼ埋まり終えた後に周溝が掘り込まれたことを示している。

土壙の開壙部、壙底部とも円形で、開壙部より壙底が大きい、いわゆるビーカー状を呈する。規模は別表のとおりである。壁は上部部から底部奥に向かって抉り込まれ「く」字状を呈する。床面は平坦である。埋土は上半が黒味の強い黒褐色土、下半が火山灰質土の混入が多く、やや



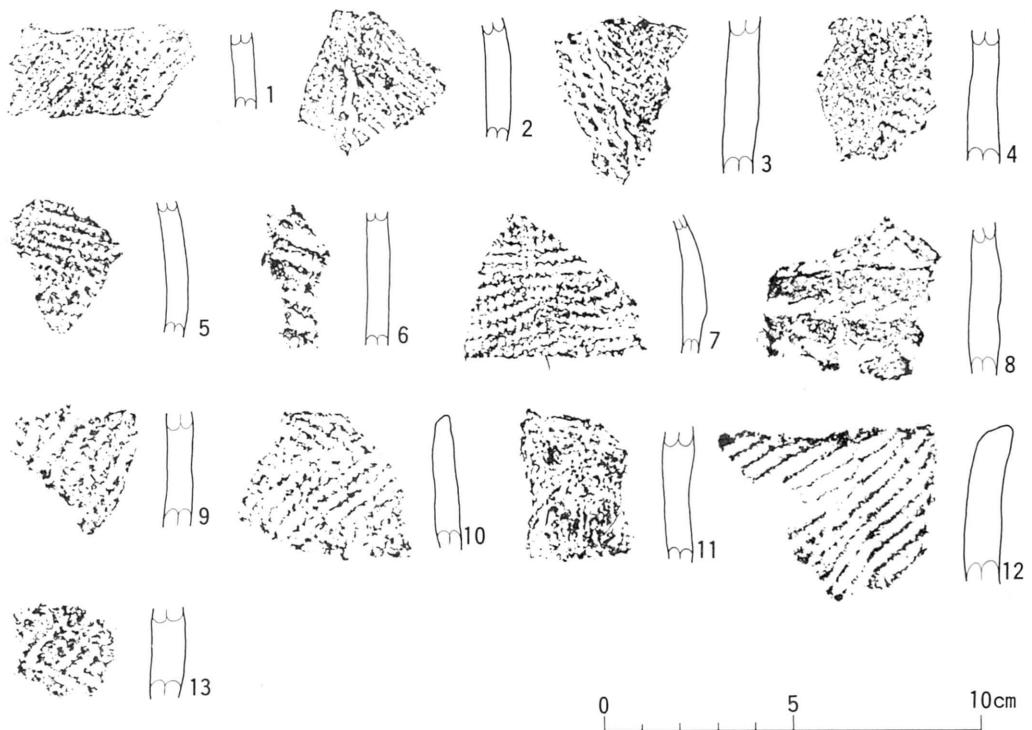
第6図 南微高地遺構配置図

白沢遺跡



第7図 土壌(1)平・断面図

白沢遺跡



第8図 土壙(1)出土遺物

褐色が主体となる土である。更に壁際から中央に向けてゆるやかに傾斜しながら堆積している。伴出遺物はない。

・ HG03土壙（第7図2）

H C03周辺の南開溝部の内側に位置する。平面形は円形であるが、深さは約25cmの凹凸のある底部になっている。壁もなだらかな傾斜を持ち、いわゆるビーカー状、袋状の土壙ではない。むしろ、なべ底状を呈するものである。埋土は黒褐色土を主体にし、底部近くに若干粘性のある小粒子状の黒褐色土が入っている。遺物は縄文小片が1片のみ底部近くから出土した（第8図4）。

・ HG50土壙（第7図3、図版5-2・3）

H C03周辺の南開溝部の外側、周辺とほぼ接する位置にある。開溝部、溝底部とも円形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、いわゆる袋状である。底部は淡灰色の粘土層を掘り込み、平坦であるが、中央部よりやや西寄りに直径20cm程の小ピットが検出された。小ピットの深さは9cmである。土壙の埋土は上半が黒褐色土で、壁際から中央に向けてゆるやかに傾斜しながら堆積している。下半部は粘土質のブロック等を多量に含む黄褐色土と褐色のシルト質土が中

央部に若干盛り上がる状態で堆積している。伴出遺物は埋土5・6の下層から縄文土器4片（第8図5～8）が出土した。いずれも深鉢形の土器片と考えられる。二段の撚糸を押圧した横位圧痕文で、纖維を多量に含む。また、金雲母を含むものもある。これらの特徴から早稻田V類相当のものと思われ、縄文早期末に比定されるものと考えられる。

• HG53土壤（第7図4、図版6）

HG53土壤の東2.5mの地点に位置する。やや不整形ではあるが、円形の平面をなし、壁もほぼ垂直に掘り込まれ、22cmの深さを計る。埋土もほぼ水平状に堆積し、若干の粘性ある火山灰質土が下層になっている。底部は若干の凹凸が認められ、東寄りがわずかに高い。

伴出遺物が多く、鉢形の土器片が多数出土した（第9・10図、図版6-1・2）。いずれも同形式のものであり、おそらく二個体分になると思われる。口縁部径は推定24cmで小波状口縁を有し、口唇部平坦面に沈線が巡る。地文はL R単節斜縄文が施され、口縁部外面を研磨している。胎土に砂粒が多く含まれ、器面がざらつく。器外面に煤状の付着が認められる。器面の色調は暗赤褐色（5 YR 7/4）である。

• HH03土壤（第7図5）

HG03土壤の南約3m地点に検出されたもので不整形の平面をなし、底部も凹凸が著しく、なべ底状をしている。埋土は大きく3層に分かれる。伴出遺物はない。

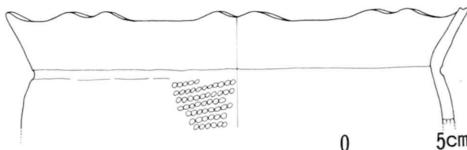
• HH50土壤（第7図6）

HH03土壤の東1m地点に位置する。HH03土壤と同じ不整形であり、平面形も小さく深さも20cmだけである。伴出遺物は縄文土器2片で、埋土下層部から出土した（第8図9・10・13）。いずれも羽状縄文を施したもので、縄文前期初頭に相当するものと思われる。

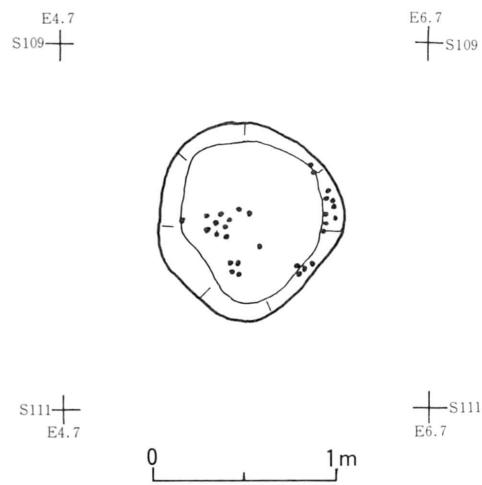
(2) 溝状土壤（土壤(2)）と出土遺物

南微高地の中央部より北寄りの地点に6基
検出された（図版7）。

これら溝状土壤は、平・断面形の形状での呼称、性格推定による呼称等あるが、本遺跡では平面形の形状による呼称を用いた。

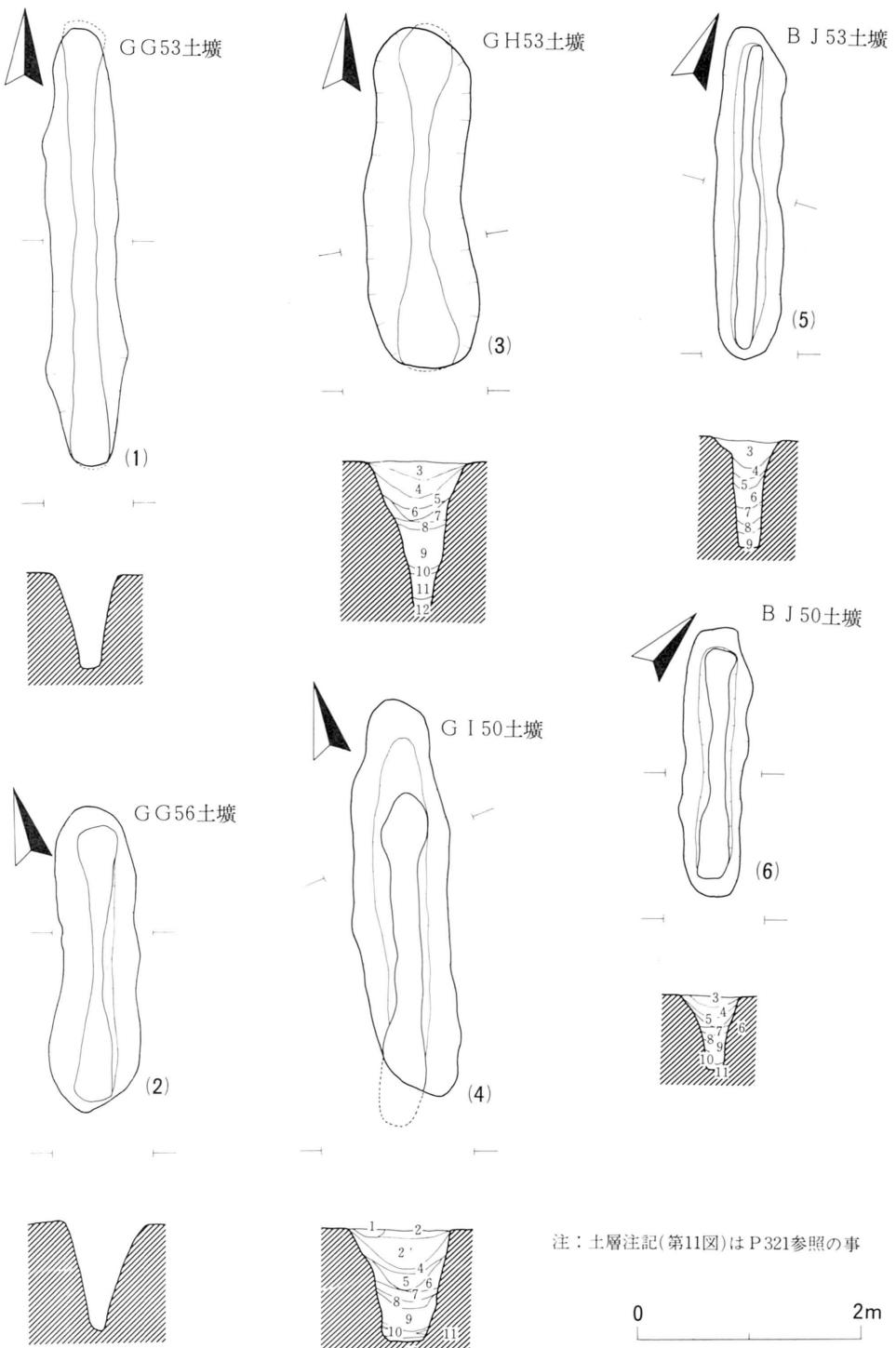


第9図 HG53土壤・出土土器実測図



第10図 HG53土壤・土器片分布状況

白沢遺跡



第11図 土壠(2)平・断面図

第3表 溝状土壤計測表 (cm)

土壤 項目	開 壴 部	壠 底 部	深 さ	長 軸 方 向	図 ・ 写 真
G G 53土壤	390×58	400×20	85	N-2°-E	第11図-1, 図版8-2
G G 56土壤	275×65	245×10	98	N-14°-E	8-2, 8-4
G H 53土壤	305×87	310×14	130	N-2°-W	8-3, 8-1
G I 50土壤	355×84	300×25	100	N-14°-E	10-3
G J 53土壤	295×55	270×16	95	N-22°-W	8-3
G J 50土壤	240×53	205×15	66	N-39°-W	9-2

• G G 53土壤 (第11図1、図版8-2)

開壠部は南北両端が丸くふくらみ、底部は溝状を呈し、平坦である。両端の壁は北側で若干抉りこみがあるが、底部よりほぼ垂直に立ち上がる。短軸断面は壁中位で若干開き、V字状を呈する。

埋土は上部から腐植土質の黒褐色土、粘性のある火山灰質土、そして黒褐色土に火山灰質土のブロックが入り込んだ黒褐色土である。底部には白色粘土のブロックが混入した火山灰質土の堆積がみられる。遺物は出土していない。

• G G 56土壤 (第11図2、図版8-4)

南微高地上の北東、G G 53土壤の東3m地点に検出された。開壠部両端は丸みをもってふくらみ中央部で若干細くなる。底部においては中央部が極端に細くなり、約10cmだけである。長軸断面は、両壁とも底部より開壠部へ直線的に開く。短軸断面は、中央部でふくらみをもつが、ほぼゆるいV字状の開きをもっている。

埋土は、下部に黒色土層の堆積がみられる他は、他の土壤と同じような堆積状況である。

遺物は縄文土器が4片、いずれも埋土中の上層より出土した。深鉢形土器の胴部片で、縦位の綾络文が施される。前期初頭に比定されると考えられる。

• G H 53土壤 (第11図3、図版8-1)

G G 53土壤の南西に隣接して位置する。開壠部は繖形を呈するが、底部は両端が丸くふくらむ細い溝状になり、平坦な面をなしている。長軸断面は両壁とも底部よりほぼ垂直に立ち上がる。短軸断面は、中央部でややふくらみ、開壠部へ大きく開く。埋土は上部から黒褐色土層、火山灰質土と黒褐色土の混土、黒褐色土のブロック含みの土層、粒子の細かい淡黄色粘土層と黒褐色土層の混土が堆積している。特に明褐色の火山灰質土層が厚く堆積している。

出土遺物はない。

• G I 50土壤 (第11図4、図版10-3)

南微高地上北西に位置する。開壠部北端が両端にくらべやや細く、中央部が広くなる。壠底

白沢遺跡

部は両端が丸く、中央部で若干細くなる。長軸断面は両端でその形状が異なる。即ち、北壁にあっては中央部で張り出しがあるものの、ゆるい傾斜になっている。これに対して南壁は、底部にかなりの抉り込みがある。短軸断面は中央部でふくらみをもちながら立ち上がり、そのまま開墳部へ至る。

埋土は特に上層部に黄白色粘土のブロックを含んだ攪乱土層があるが、それ以外はいずれもレンズ状の堆積状態になっており、自然堆積であることを示している。遺物は出土していない。

・G J53土壙（第11図5、図版8-3）

G H53土壙の南約3mの地点に位置する。開墳部、壙底部とも溝状の平面を呈し、両端も丸くなるが、ふくらみはない。ただ、北端東側は若干直線的になる。長軸断面は、両壁とも傾斜をもって立ち上がる。短軸断面は、上部近くまでほぼ垂直に立ち上がり、開墳部近くで大きく開く。

埋土は、上部から7層に分けられ、いずれもレンズ状の堆積をしている。遺物は出土しない。

・G J50土壙（第11図6、図版9-2）

G J53土壙の北約1mの地点に位置する。開墳・壙底部の形狀はG J50土壙に類似し、いずれも溝状を呈している。底部はやや凹凸があり、北端が若干高くなっている。長軸断面は、両端とも開墳部に向かってややゆるい傾斜をもって立ち上がる。短軸断面は、中央部附近でふくらみをもって立ち上がり、開墳部に向かって大きく開く。

埋土は、G J53土壙と同じ堆積状況を示すが、上部では黒褐色土を含んだ明褐色火山灰質土層が下層の土壙周囲に堆積した火山灰質土層の直上に厚くレンズ状に堆積している。遺物は出土しない。

〔2〕奈良時代の遺構

(1) 円形周溝・主体部と出土遺物

遺跡全体の地形、調査経過などについては既に記したが、ここでは更に本遺跡での主要な遺構として検出された円形周溝が位置する地形、および調査経過を記すと次のとおりである。

地形：円形周溝の発見された南微高地は、舌状に東方に張り出す段丘縁辺部に位置する。面積は約1,250m²である。遺構所在位置の西側は東北本線が走り、そのため遺構の一部が既に破壊されていた（図版14-1）。東側の畠地は調査対象地外のため、調査ができなかった。したがって調査を実施した面積は遺構の存在が予想された面積の½、約600m²である。

調査経過：調査はB～Dブロックの住居跡調査と並行しておこなった。前述したように調査以前にブルドーザーによる地表面の土取りがあり約50cm削平されていたこと、また重機によると思われる土器の損壊が認められた。このブルドーザーによる土取りが行なわれたため、調査

時点では既に遺構の一部が現われていた。遺構検出はこうした状況の中で全体遺構の検出作業を進めた(図版3)。

調査の結果: 発見された円形周溝は4基、および附隨すると考えられる主体部1基であり、遺物としては土師器壺1、長頸壺片1、装飾品(ガラス玉、丸玉等241個、管玉1)、鉄片1などである。なお、周溝埋土内より縄文土器片、石器片等が多く出土した。

・ G J 03円形周溝 (第6図、図版11-1)

[位置・確認面] 微高地北側・G I 50土壤の南端に近接して位置する。遺構確認面は既に一部削平された火山灰質の黄褐色土層であり、削平後の整地した黄褐色土層が数cmの厚さで確認面の上に見られた。

[保存状況] 周溝が浅く、わずかに北側、および東側の一部周溝が部分的に検出されただけである。したがって全周する状態はない。

[平面形] 全体が検出できないので即断はできないが、他の3基の周溝と類似するものとすれば南が開く円形U字状の周溝と考えられる。

[規模] 内径の推定値は平均約6.2m、外径の推定値は平均7.4m、溝の幅は検出面で平均約60cmを計る。また溝の深さは5~10cmである。

[堆積土] 黒褐色土(7.5YR 3/2)の1層のみである。炭化物、焼土、土器片などは含まれていない。

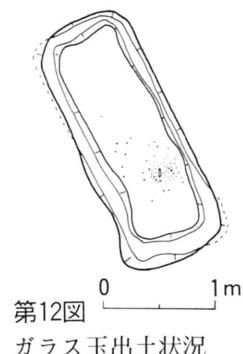
[底部・側壁] 底部は若干の凹凸はあるがほぼ平坦である。側壁の立ち上がりはなだらかな傾斜であるが、検出面からの深さが小さいため、顕著な特徴は見られない。

[主体部] (第7図-7、図版11-3) 周溝の中央部に位置し、隅丸長方形を呈する。その規模は検出面で長(南北)軸2.3m、短(東西)軸0.9mを計る。長軸の方向はN(座標北)-35°-Wを指す。

底部は長軸1.9m、短軸0.6mを計り、底部面積は11.4m²である。底部は幅約10cm、検出面からの深さ約45cmの周溝がまわる。この周溝は西側が最も深く、他の3辺の周溝は20~30cmの深さである。周溝の底部は若干の凹凸がみられ、側壁はほぼ垂直な立ち上がりである。主体部底部は検出面より約25cm低く、平坦な面をなしている。主体部の埋土は黒褐色土(クロボク質土・7.5YR 1/2)で、柔らかい土質であり、主体部床面は灰黄褐色(10YR 5/3)土である。

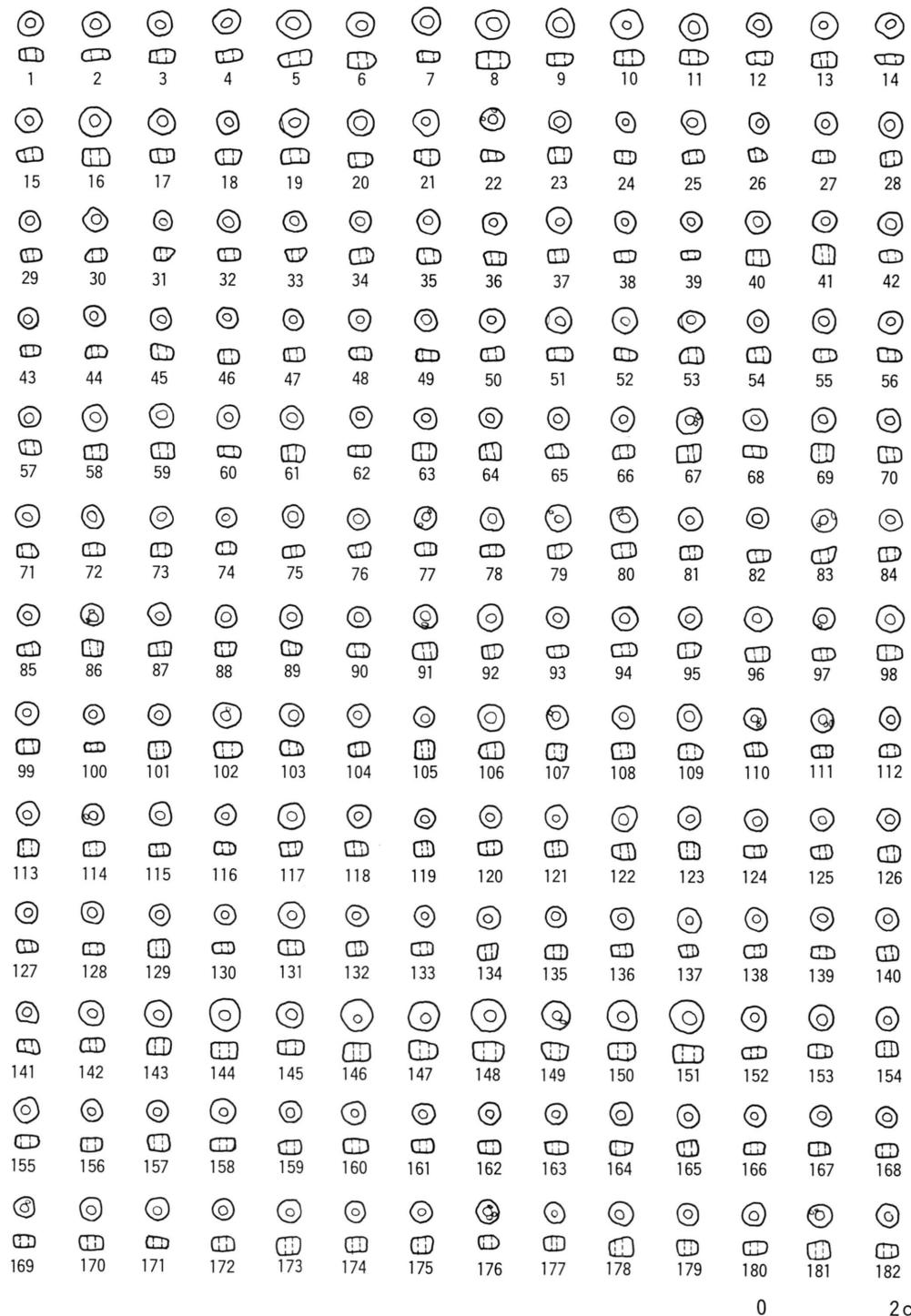
川原石の発見はなく、石室や石組が存在した可能性はない。床面に木炭片等が敷かれた痕跡も認められなかった。

また、床面の土壤分析を岩手大学農学部・土壤学教室(井上助教授)に依頼し、化学分析(燐分析)を実施した結果、別記鑑定書の報告の



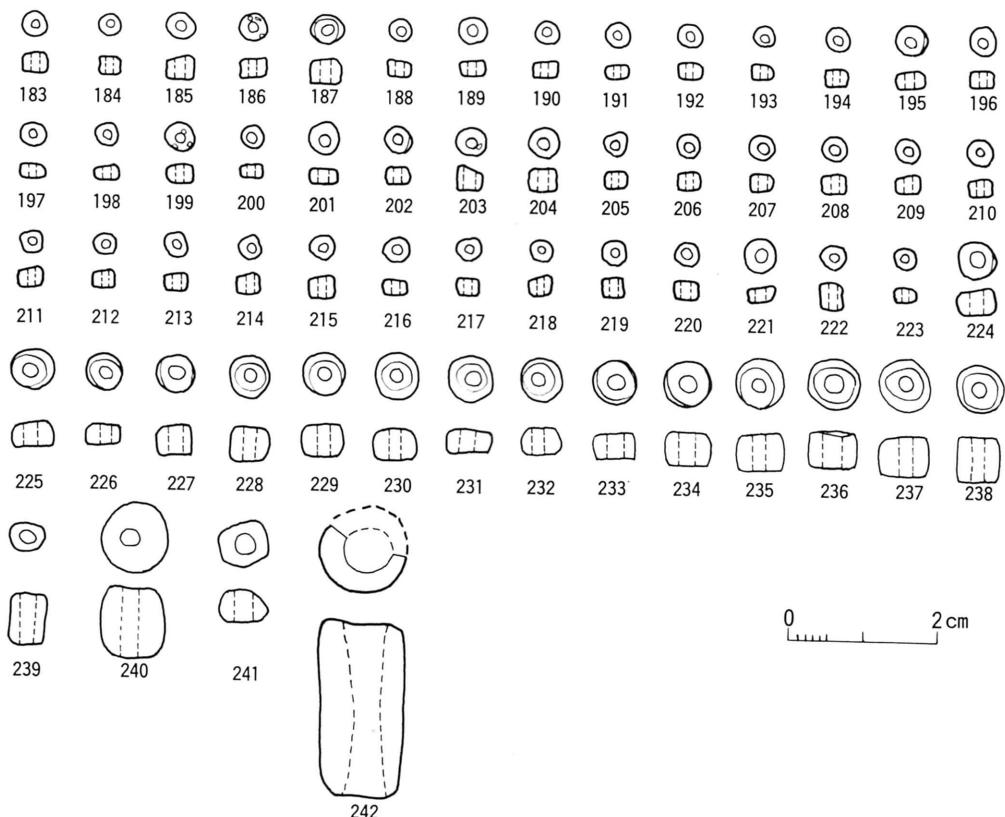
第12図
ガラス玉出土状況

白沢遺跡



0 2 cm

第13図 ガラス玉実測図



第14図 ガラス玉類・管玉実測図

通り「燐含有率が遺構周辺の他の土壤のリン酸（0.03N-NH₄F可溶性リン酸）と比べやや高い。」という結果を得た。

主体部からの遺物としてガラス玉240個、鉄片1個があり、いずれも主体部中央よりやや南寄り地点の埋土下層（床面直上より若干上）から出土した。出土地点は第12図のようであり、まとまった形で出土した。

〔その他の施設〕 前述したように川原石など発見されないことから石室が存在した可能性はない。また、墳丘については、古絵図（矢幅村絵図＝元治元年（1864）＝岩手県立図書館蔵）、五万分之一地形図・日誌＝大正元年（1912）測図＝国土地理院などにも墳丘と思われる記入は認められず、また、土地の古老の記憶にも無いということである。

〔出土遺物〕 主体部埋土中からガラス小玉240個、鉄片1個が出土した。いずれも主体部中央よりやや南寄り地点にまとまった形で出土した（図版11-2）。

ガラス玉（第13・14図、第4・5表、図版25） 出土したガラス玉の色調は、藍色、暗青色、青色、淡青色、黄色などである。このうち青色が151個でガラス玉の半数以上を占めている。

白沢遺跡

第4表 ガラス玉類計測表（1）

No.	名称	最大高	最大径	最大孔径	材質	色調	No.	名称	最大高	最大径	最大孔径	材質	色調
1	小玉	2.0	4.0	1.5	ガラス	青	35	小玉	2.5	3.5	1.5	ガラス	青
2	〃	1.5	4.0	2.0	〃	〃	36	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃
3	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃	37	〃	2.0	4.0	1.0	〃	〃
4	〃	2.0	4.0	2.0	〃	〃	38	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
5	〃	2.5	5.0	2.0	〃	〃	39	〃	1.5	3.0	1.0	〃	〃
6	〃	2.5	4.0	1.5	〃	〃	40	〃	2.5	4.0	1.0	〃	〃
7	〃	1.5	4.0	2.0	〃	〃	41	〃	3.0	3.0	1.5	〃	〃
8	〃	3.0	5.0	2.0	〃	〃	42	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃
9	〃	2.0	4.5	2.0	〃	〃	43	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
10	〃	2.0	5.0	1.5	〃	〃	44	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
11	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃	45	〃	2.0	3.0	1.5	〃	〃
12	〃	2.0	4.0	2.0	〃	〃	46	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃
13	〃	2.0	4.0	1.0	〃	〃	47	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
14	〃	1.5	4.0	1.5	〃	〃	48	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃
15	〃	1.5	4.0	1.0	〃	〃	49	〃	2.0	3.0	1.5	〃	〃
16	〃	2.5	5.0	2.0	〃	〃	50	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃
17	〃	2.0	4.0	2.0	〃	〃	51	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃
18	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	52	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃
19	〃	2.0	4.0	2.0	〃	〃	53	〃	2.5	4.0	1.5	〃	〃
20	〃	2.0	4.0	2.0	〃	〃	54	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃
21	〃	2.0	4.0	2.0	〃	〃	55	〃	2.0	4.0	2.0	〃	〃
22	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	56	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃
23	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃	57	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
24	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	58	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃
25	〃	2.0	3.5	2.0	〃	〃	59	〃	2.0	4.0	2.0	〃	〃
26	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	60	〃	1.5	3.0	1.0	〃	〃
27	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	61	〃	2.0	3.5	2.0	〃	〃
28	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃	62	〃	2.0	3.5	2.0	〃	〃
29	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	63	〃	2.5	4.0	1.0	〃	〃
30	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃	64	〃	2.5	3.5	1.5	〃	〃
31	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	65	〃	2.0	3.0	1.5	〃	〃
32	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃	66	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃
33	〃	2.0	3.5	2.0	〃	〃	67	〃	2.0	4.0	1.0	〃	〃
34	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃	68	〃	1.5	3.5	1.5	〃	〃

ガラス玉類計測表（2）

No.	名称	最大 高	最大 径	最大 孔径	材質	色調	No.	名称	最大 高	最大 径	最大 孔径	材質	色調
69	小 玉	3.0	3.5	1.5	ガラス	青	103	小 玉	2.0	3.5	1.5	ガラス	青
70	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	104	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
71	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃	105	〃	3.0	3.0	1.0	〃	〃
72	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	106	〃	2.5	4.0	2.0	〃	〃
73	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	107	〃	2.5	3.0	1.0	〃	〃
74	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	108	〃	2.5	3.0	1.0	〃	〃
75	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	109	〃	2.5	4.0	1.5	〃	〃
76	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	110	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃
77	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	111	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
78	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	112	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
79	〃	2.0	4.0	1.0	〃	〃	113	〃	3.0	3.0	1.0	〃	〃
80	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃	114	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
81	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃	115	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃
82	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃	116	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
83	〃	2.5	4.0	1.0	〃	〃	117	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃
84	〃	2.0	4.0	2.0	〃	〃	118	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃
85	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	119	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
86	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	120	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
87	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	121	〃	2.5	3.5	1.0	〃	〃
88	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	122	〃	2.5	4.0	1.5	〃	〃
89	〃	2.0	3.0	1.5	〃	〃	123	〃	3.0	3.0	1.0	〃	〃
90	〃	2.0	3.0	1.5	〃	〃	124	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃
91	〃	2.5	3.5	1.0	〃	〃	125	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃
92	〃	2.0	4.0	1.0	〃	〃	126	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
93	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	127	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
94	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃	128	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃
95	〃	2.0	3.0	1.5	〃	〃	129	〃	3.0	3.0	1.0	〃	〃
96	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃	130	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
97	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	131	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃
98	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃	132	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
99	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	133	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
100	〃	1.0	3.0	1.0	〃	〃	134	〃	2.5	3.5	1.0	〃	〃
101	〃	2.5	3.0	1.0	〃	〃	135	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
102	〃	2.5	4.0	1.5	〃	〃	136	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃

白沢遺跡

ガラス玉類計測表（3）

No.	名称	最大 高	最大 径	最大 孔径	材質	色調	No.	名称	最大 高	最大 径	最大 孔径	材質	色調
137	小 玉	mm 2.0	mm 4.0	mm 1.5	ガラス	青	171	小 玉	mm 2.0	mm 4.0	mm 1.5	ガラス	暗 青
138	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	172	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃
139	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃	173	〃	3.0	4.0	1.0	〃	〃
140	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	174	〃	2.5	3.0	1.0	〃	〃
141	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	175	〃	2.5	3.5	1.0	〃	〃
142	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	176	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃
143	〃	2.5	4.0	1.5	〃	〃	177	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
144	〃	3.0	5.0	2.0	〃	〃	178	〃	3.0	4.0	1.0	〃	〃
145	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃	179	〃	2.5	3.5	1.0	〃	〃
146	〃	3.0	4.5	1.0	〃	〃	180	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃
147	〃	3.0	5.0	1.5	〃	〃	181	〃	3.0	3.5	1.0	〃	〃
148	〃	3.0	5.0	2.0	〃	〃	182	〃	2.5	3.5	1.0	〃	〃
149	〃	2.5	4.0	1.5	〃	〃	183	〃	3.0	3.5	1.5	〃	〃
150	〃	2.5	4.5	2.0	〃	〃	184	〃	3.0	3.0	1.0	〃	〃
151	〃	3.0	5.0	2.0	〃	〃	185	〃	3.0	4.0	1.5	〃	〃
152	〃	2.0	4.0	1.0	〃	暗 青	186	〃	3.0	4.0	1.5	〃	〃
153	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃	187	〃	3.5	4.5	2.0	〃	〃
154	〃	2.5	3.5	1.0	〃	〃	188	〃	2.5	3.0	1.0	〃	〃
155	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	189	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃
156	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	190	〃	2.0	3.0	1.5	〃	〃
157	〃	2.5	3.0	1.0	〃	〃	191	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃
158	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	192	〃	2.5	3.5	1.0	〃	〃
159	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃	193	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃
160	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃	194	〃	2.5	3.5	1.5	〃	〃
161	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	195	〃	2.5	4.5	1.5	〃	〃
162	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	196	〃	2.0	4.0	1.5	〃	〃
163	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	197	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃
164	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	198	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃
165	〃	2.5	3.5	1.0	〃	〃	199	〃	3.0	4.0	1.0	〃	〃
166	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	200	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃
167	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	201	〃	2.5	4.0	1.5	〃	〃
168	〃	2.0	3.0	1.0	〃	〃	202	〃	2.0	4.0	1.0	〃	〃
169	〃	2.0	3.5	1.0	〃	〃	203	〃	3.5	4.0	2.0	〃	〃
170	〃	2.0	3.5	1.5	〃	〃	204	〃	3.0	4.5	1.5	〃	〃

ガラス玉類計測表（4）

No.	名称	最大高	最大径	最大孔径	材質	色調	No.	名称	最大高	最大径	最大孔径	材質	色調
205	小玉	2.5	3.5	1.0	ガラス	淡青	226	小玉	3.0	5.5	2.0	ガラス	淡青
206	タ	2.5	3.5	1.0	タ	タ	227	タ	4.0	6.0	2.0	タ	タ
207	タ	2.5	3.5	1.5	タ	タ	228	タ	4.5	6.0	2.0	タ	タ
208	タ	3.0	3.0	1.0	タ	タ	229	タ	4.5	6.0	2.0	タ	タ
209	タ	3.0	3.5	1.0	タ	タ	230	タ	4.5	6.5	2.0	タ	タ
210	タ	2.5	4.0	1.0	タ	タ	231	タ	3.5	7.0	2.0	タ	タ
211	タ	3.0	3.0	1.0	タ	タ	232	タ	4.0	6.0	2.0	タ	タ
212	タ	2.5	3.0	1.0	タ	タ	233	タ	3.5	6.0	2.0	タ	タ
213	タ	2.5	3.5	1.0	タ	タ	234	タ	5.0	6.5	2.0	タ	タ
214	タ	3.0	3.0	1.0	タ	タ	235	タ	5.0	7.0	2.0	タ	タ
215	タ	3.0	3.5	1.0	タ	タ	236	タ	5.0	7.0	2.5	タ	タ
216	タ	2.5	4.0	1.0	タ	タ	237	タ	5.5	7.0	2.0	タ	タ
217	タ	2.5	3.5	1.0	タ	タ	238	タ	6.0	6.5	2.0	タ	タ
218	タ	3.0	3.0	1.0	タ	タ	239	タ	7.0	5.0	2.5	タ	タ
219	タ	3.0	3.5	1.0	タ	タ	240	タ	9.5	9.5	3.0	めのう	橙縞
220	タ	3.0	3.0	1.5	タ	タ	241	タ	4.5	7.0	3.0	不明	白色
221	タ	2.0	5.0	2.0	タ	タ	242	管玉	24.0	12.0	6.5	石灰石	淡橙色
222	タ	4.0	3.5	1.5	タ	タ							
223	タ	2.0	3.0	1.0	タ	黄							
224	タ	4.0	5.0	2.0	タ	藍							
225	タ	3.5	6.0	2.0	タ	タ							
								青色	151	黄色	1	白色	1
								暗青色	53	蓝色	16	管玉	1
								淡青色	18	橙縞	1	合計	242

最大径は3.0mmから7.0mmまで差異があるが、平均4mm前後のものが多い。厚さは3.0～7.0mm、最大孔径1.0～2.5mmで孔は両径も孔中径もほぼ均しい。材質については岩手県工業試験場に依頼し、蛍光X線分析、およびX線回折を行ない、別記のような報告をえた。これによると、橙縞以外のものはガラスで、ソーダ、石灰、ケイ酸塩ガラスと考えられる。黄色のガラス玉については、鉛ガラスかどうかは明確にされていない（同報告による第22表）。

鉄片：主体部内のガラス小玉出土地点より発見されたもので、小片に折損しており原形を推定することはできない。しかし、折損の断面を観察すると刀子状のものと考えられる。

第5表 ガラス小玉検出元素表（●明瞭 ○少量 ○極微量）

検出元素 ガラス小玉	Sr	Sn	As	Cu	Ca	Fe	K	Co	Mn	Si	Cl	Cr		Pb
藍色	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	○			
暗青色	○	●	●	●	●	●	●	○	○	●	○		○	
青	○	●	●	●	●	●	●	○	○	●	○		○	
黄色	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○			●
淡青色		●	○	●	○	●	●	●	●	●	●			

白沢遺跡

• H C03円形周溝（第6図、図版12-2）

〔位置・確認面〕 微高地中央部の西、東北本線ぞいに位置する。遺構確認面は、第II層火山灰質の黄褐色土層であり、黒褐色の周溝内埋土と極めて明瞭な色差で存在する。

〔保存状況〕 周溝西半分が東北本線敷設（複線化）工事によって破壊されており、更に、周溝内に鉄道用電柱、あるいは工事用の電柱支えの横木の埋設跡が3ヶ所認められた。しかし、周溝自体の深さがかなりあり、遺存状態はよい。

〔平面形〕 周溝東半分だけの遺存状態であるが、南が開く円形U字形の周溝と考えられる。

〔規模〕 内径の推定値は平均約9m、外径の推定値は平均12m、溝の幅は検出面で平均1.2mを計る。また溝の深さは平均50cmである。

〔堆積土〕（第6図・土層断面1、図版14-3） 基本的には4層に分かれる。他の土層断面に見られる第1層は欠くが、第2層は灰黄色の降下火山灰で中央部で約4cmの堆積を示す。降下火山灰についての分析は岩手県工業試験場に依頼し、別記のような分析結果を得た。第3層は黒褐色の腐植土で細粒状の黄褐色火山灰質粘土を若干含む層である。第4層はブロック状の火山灰質粘土と第3層の黒褐色土が混入した層である。第5層は黄褐色火山灰質粘土、茶褐色火山灰質土、黒色土が混じり合った層で、全体がにぶい黄橙色を呈し、周溝内側に傾斜をもって厚く堆積する。遺物は縄文、弥生土器片、石器などが第3・4・5層から出土したが、特に4・5層から多く出土した。土層断面3においても同様である。

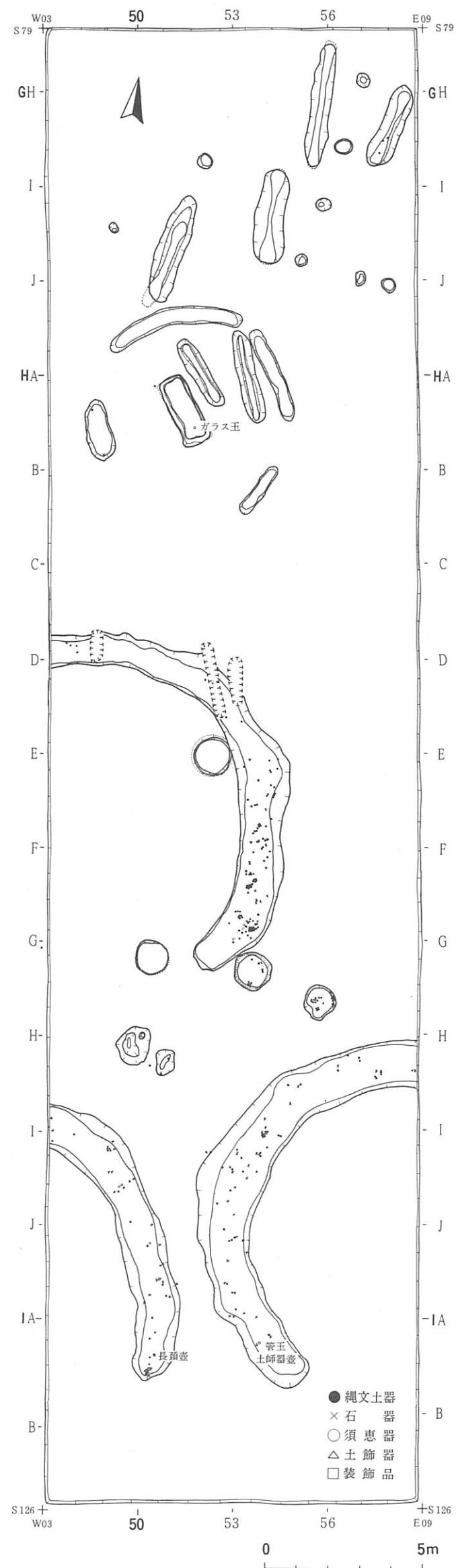
〔底部、側壁〕 底部は外径側が若干深く掘り込まれ、その差は位置での違いはあるが約5～10cmである。しかし周溝南端においてはその差はほとんどない。底面は凹凸が見られ、平坦面は少ない。壁は内壁にあっては急な立ち上がりであり、外壁は緩い傾斜をもち、壁中段で膨らみをもしながら立ち上がる。検出面からの深さは周溝北西部で最大50cm、東部で40～45cmを計る。しかし、周溝南端部では約10～20cmとなり、次第に浅くなる。

〔主体部〕 認められない。

〔その他の施設〕 掘り込みや川原石など施設に伴うと思われるものは認められない。

〔出土遺物〕（第20図～30図、図版16-2） 周溝内埋土から縄文・弥生土器片、石器が出土した。出土する層は3・4・5の各層から出土するが、特に第5層黒褐色土から多く出土し、また分布状況をみると、周溝の東側、特に東南部周溝内に集中して出土する。遺物の分布、および層別の出土状況は第15図・遺物出土分布状況図、第6表・層別遺物出土数に記したとおりである。

なお、出土遺物（縄文・弥生土器、石器）についてはHH03周溝、H150周溝にも同様の出土があるので、H150周溝記述で一括取扱う。



第15図 南微高地上遺物出土分布状況図

• H H03円形周溝（第6図、図版13-1・2）

〔位置・確認面〕 微高地南、東北本線ぞいに位置し、H C03円形周溝の南端部より約5m南西に近接している。遺構確認面は第II層火山灰質の黄褐色土層である。

〔保存状況〕 H C03円形周溝と同様、周溝の約三分の一、西側部分が東北本線敷設工事によって破壊されている。ただ周溝の深さがあるため遺存状態はよい。

〔平面形〕 周溝東部分だけの遺存状態であり全形については不明であるが、南が開く円形U字状の周溝と考えられる。

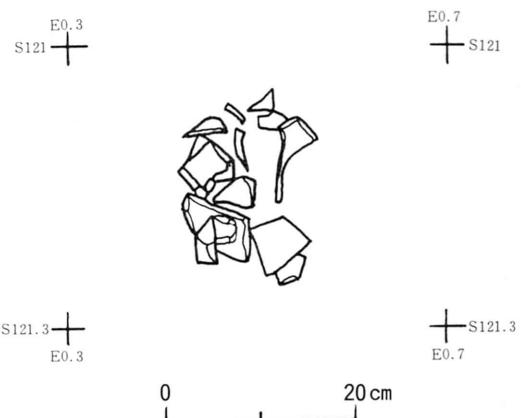
〔規模〕 周溝の一部だけであり、全周の状態が不明であるが、H C03円形周溝、H I 50円形周溝の形状から推定すると、内径約9m、外径約12mになると思われる。また溝の検出面での幅は1.3m～1.6mで平均1.4m、深さは約40cmである。

〔堆積土〕（第6図・土層断面4） 3層に分かれるが、他の断面にみられる第1、2層は欠く。第2層の降下火山灰は土層観察の断面には認められないが、周溝内埋土表面には部分的に分布している。したがって本周溝の上層は第3層であるが、第4層も削平されていることが土層断面に認めることができる。第5層は約10cmの堆積であるが、周溝内側は厚く堆積する。

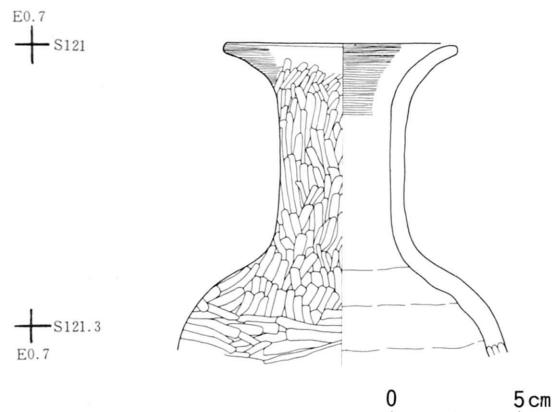
〔底部、側壁〕 底部はH C03周溝と同様、外径側に若干深くなるが、H C03周溝程の差はない、南端でほぼ平坦になる。底面は若干の凹凸がある。壁は内壁にあっては外壁より急な立ち上がりになるが、周溝内壁全体ではない。外壁は中段で膨らみをもちながら緩い傾斜で立ち上がる。検出面からの深さは最大50cmであるが、平均40cmである。周溝南端部では約5～10cmとなり、次第に浅くなる。

〔主体部〕 認められない。

〔その他の施設〕 掘り込みや川原石など施設に伴うと思われるものは認められない。



第16図 長頸壺出土状況



第17図 長頸壺実測図

白沢遺跡

〔出土遺物〕（第20～30図、図版24-1）周溝南端部附近（第16図、図版16-1）の底部より土師器長頸壺の口縁・頸部片が出土した（第17図、図版24-1）。口縁部径9.2cm、頸部径7cm、肩部径（推定）12.5cm、器厚0.8cmである。ロクロを用いないもので、頸部・肩部外面に密にヘラミガキを施し、黒色処理がなされている。口縁部内外面にはナデ痕が認められる。肩部上半は丸く、頸部はやや長く直立する。口縁部は大きく外反し、そのまま口唇部で丸くおさまる。

また、HC03周溝同様、周溝内埋土から縄文土器、石器が出土した。出土層は第5層黒褐色土層から特に出土した。

• HC150円形周溝（第6図、図版13-1）

〔位置・確認面〕微高地南、HH03円形周溝の東1mに近接している。遺構確認面は第II層火山灰質の黄褐色土層である。

〔保存状況〕周溝西半分は調査対象地内であるが、東半分は対象地外のため調査ができなかった。しかし現状は畠地であり、本調査後新幹線工事用道路として若干拡幅、削平されてはいるが、周溝東半分は残存している。

〔平面形〕周溝西半分だけの検出、調査であり、東半分については未調査のためその状態は不明であるが、前述のHC03円形周溝と同様、南が開く円形U字状の周溝と考えられる。

〔規模〕内径の推定値は平均約9m、外径約12mになると思われる。また溝の検出面での幅は1.3～2.2mで平均1.5m、深さは最大55cmであるが、平均30cmである。

〔堆積土〕（第6図・土層断面5・6、図版14-2）4層に分かれる。断面5においては第1層は削平のため認められないが、断面6においては認めることができる。第1層は黒褐色土で、第2層の降下火山灰と若干混じり合った層である。降下火山灰は断面5・6において観察することができ、その堆積は4～6cmになり、特に断面中央部はレンズ状に厚く堆積している。第3層は黒褐色のシルト質土である。第4層は黒褐色のシルト質土中に黄褐色の火山灰質土が細粒状に混入している。第4・5層も周溝内側に厚く堆積する。第5層は黄褐色、赤褐色の火山灰質土と黒褐色土が混じり合った層である。

〔底部・側壁〕底部は凹凸がみられ、外径側が内径側にくらべ若干深く掘り込まれている。南端部は周溝の深さもなくなり、約10～15cmの差で次第に浅くなる。壁は内壁にあっては外壁より急な立ち上がりを示し、外壁は緩い傾斜をもち、壁中段で膨らみをもちながら立ち上がる。

〔主体部〕認められない。

〔その他の施設〕掘り込みや川原石など施設に伴うと思われるものは認められない。

〔出土遺物〕（第18・19図、図版15-1・2・3、24-3・4）周溝南端の底部中央附近か

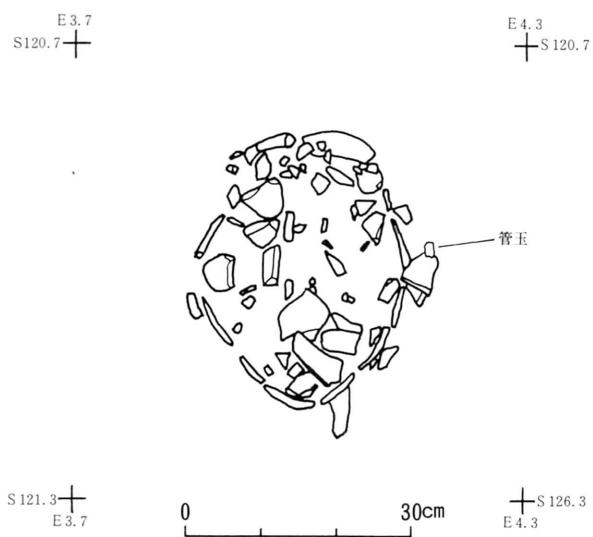
ら土師器壺形土器1個体と管玉1個が出土した。

壺形土器・周溝底部にほぼ直立した状態であり、特に土器上半部がこまかく碎かれていた。器形は頸部は狭まり、胴部が丸くふくらむ大形の壺形土器で、最大径は胴部にあり、30.6cmである。頸部と肩部との境に段がある。成形は巻上げ技法によるもので、器面にその痕跡を残している。ロクロは使用されていない。胴部外面はヘラミガキが施され、光沢のある器面をなしている。器面の色調はにぶい橙色(7.5Y R 1/3)を呈する。

復元した土器の計測値は口径22.7cm、頸部径19.0cm、底部推定径10cm、器高30cm、器厚0.8cmである。

なお、土器内の土壤についても分析を行なったが、リン酸(0.03N-NH₄F可溶性リン酸)の含有率も他の土壤とくらべ特に多い結果でもなく、また種子等の混入も認められなかった。(土色・黄褐灰色10Y R 1/2)

管玉(第14図、図版24-2)・前述の壺形土器の底部に近接して出土した。瑪瑙を素材に用いているもので、長軸面に平行して割れており、約1/2の残存である。外面はかなり滑らかに研磨され、孔部端も丸味のある形を呈する。長さ2.4cm、径1.2cm、孔径0.6cmを計る。長軸中央で若干



第18図 H I 50周溝・土師器壺・管玉出土状況



第19図 出土土器(壺)実測図

白沢遺跡

膨らむ形になり、孔は端部で若干広がる。材質の色調は明黄褐色（10YR 7/6）に近い。

[3] 周辺埋土から出土した縄文・弥生時代の遺物（第20～30図、図版21・22）

H C 03、H H 03、H I 50の各周辺埋土内から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器片等が出土した（第6表）。いずれも埋土第3・4・5層から出土したが、特に第5層からの出土が多い。細片のみのため、器形不明のものが多い。

第6表 各層別遺物出土数表

周 边	層	縄文土器	弥生土器	土 师 器	石 器	計
H C 03 周 边	3	3	2		6	11
	4	12			16	28
	5	18			18	36
H H 03 周 边	3	10		4	5	19
	4	24			2	26
	5	21			12	33
H I 50 周 边	3	1	3		3	7
	4	5			7	12
	5	14			9	23
計 (片)		108	5	4	78	194

（遺物総数の一部のため第8表の数とは一致しない。）

(1) 土器

出土した土器を大別すると、貝殻文土器、沈線刺突文土器、縄文条痕土器（繊維土器）、粗・精製土器（単節斜縄文、沈線文）、撲糸文土器等に分類できる（第7表）。

第7表 南微高地・周辺内出土土器分類表

特徴 (群) (類)	文 様	特 徵	色 調	胎 土	器厚 (mm)
I	1 貝 殻 文	爪形文様	右上がりに貝殻腹縁刺突文を縦方向に施文	橙5YR6/8	黒雲母若干 8
	2a	貝殻条痕文	表、裏面に横・斜条痕	橙5YR6/6 ~7.5YR7/6	砂粒含む 6~10
	2b	貝殻条痕文	器表に横条痕	にぶい橙 7.5YR6/4	細粒若干含む 9
	3	貝殻刺痕文	器表面に貝殻腹縁文が平行に施され、それに直行する沈線が入る	明橙7.5YR5/6 橙 7.5YR6/8	黒雲母粒若干 7
	4a	貝殻腹縁文	平縁、口唇部平坦面にも貝殻文施文、裏ミガキ	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母片若干細 砂含む 8
	4b	貝殻腹縁文	貝殻文を縦方向に施文	橙 7.5YR7/6	細砂含むザラ つく器面 7~9
	5	貝殻腹縁文	腹縁を横方向にし器面と直角に施文、裏は無文、細砂、沈線との交錯もある	明褐7.5YR5/6	砂粒多く含み もろい 8
II	1 沈 線 刺 突 文	沈線刺突文	やや幅の広い平行沈線およびこの沈線の施文具と思われる茎様のものを器壁に対して斜めに刺突した刺突痕によって幾可学文的様を作る。	明赤褐5YR5/6	微粒子状 7
III	1a 繩 文 条 痕 (繊 維 混 入)	複節斜縄文	纖維を多く含む	橙 5YR6/6	小石、石英粒 を含む 7
	1b	撚糸状圧痕文	纖維を若干含み、撚糸状圧痕を横2本平行に施文 焼成不良	にぶい橙 7.5YR7/4	微粒子状
	2	撚糸状圧痕文	纖維を多く含む。金雲母を多量に含む。もろい	黒褐7.5YR3/2	若干粗い 6
	3	羽状縄文 (縄文-縄文)	纖維を若干含む。裏面にも縄文。	橙 5YR6/6	小石、石英を 若干含む 7
	4	羽状縄文	纖維を含む。縄文は器表のみ。裏面に部分的に横走する条痕	橙 7.5YR6/6	種子痕? 5~7
	5	斜 縄 文	纖維を多く含む。器面全体に磨滅があり縄文痕不明のものもある。一部土器片に複節縄文が施されている。指頭圧痕も裏面に残る。	橙 7.5YR6/6	石英粒若干含 む 5~6
	6	単節斜縄文	纖維若干含む。器表面に条痕が斜方向に付される。胎土に石英、粗砂、器内面に炭化物の付着あり	にぶい橙 7.5YR7/4	石英粒、粗砂 多い 6~7
IV	1 粗 製 精 製 土 器 (斜 縄 文 と 沈 線)	斜 縄 文	器表は単節斜縄文を縦位に施文、裏面、ミガキのあるものが一部ある(粗製土器)	にぶい橙 7.5YR7/3	石英粒、細砂 含む 4~5
	2	斜 縄 文	小波状口縁を有するもので、口唇平坦面に沈線がまわる。器表裏面にミガキ痕あり(粗製土器)	褐 7.5YR4/4	細砂 5~6
	3	横沈線文	3本の平行沈線を有する小破片	橙 7.5YR7/6	微細砂 5
	4	斜 縄 文	小形の鉢片と思われる細縄文を施し、裏面に条痕若干認められる	橙 7.5YR6/6	細砂 5~6
V	1 (大 撚 糸 文 と 沈 線)	撚糸文、沈線	横沈線をはさみ、下部に斜方向の撚糸文、上部にスリ消しを施す	褐 7.5YR4/4	細砂 5~6
	2	撚糸文	不走方向に撚糸文を施し、裏面は条痕を残す 小形壺の小片?	褐7.5YR4/6	微粒砂 4~5

白沢遺跡

第I群土器（第20図1～25、図版21-1）

貝殻文土器である。25片出土したが、H C 03、H I 50周辺出土のものが主である。

第1類：爪形様の土器片で、斜方向に貝殻腹縁の先端部様のもので縦に施文したものであろう。1片のみの出土である（図版21-5）。胎土に黒雲母粒を若干含む。

第2類：(a)土器表裏面に貝殻条痕文があり、横・斜条痕が施されている。土器は明るい橙色（5 Y R %～7.5 Y R %）を呈し、6～10mmの器厚である。(b)は(a)同様条痕が施されているものであるが、表面だけに限られたものであり、器厚も9mmと若干厚い。

第3類：器表面に貝殻腹縁文が平行に施される。ただ土器片が小片のため、貝殻腹縁の施文の仕方（左右に搖がせながら移動し付したものか、部分的に押型状にしたものかなど）は不明である。胎土は明褐色（7.5 Y R %）～橙色（7.5 Y R %）を呈し、やや赤味が加っている。胎土には黒雲母が若干含まれる。器厚は7mm程である。

第4類：(a)口縁部片が1片出土しており平縁である。器面、口唇部平坦面に貝殻文が斜方向に施文している。にぶい黄橙色（10 Y R %）で、細砂が若干含まれる。(b)貝殻背面の一部のみで縦方向に施文したもので、短かい施文の単位になっている。器面は橙色（7.5 Y R %）で細砂が含まれるためザラつく。

第5類：腹縁を横方向に施文したもので、施文を重ね合わせているものもある。また、貝殻文と幅のせまい平行沈線を重ね合わせ幾何学的文様を作っている。胎土に砂粒を多く含み、ざらついてもろい。器厚は8mmである。

第II群土器（第20図26、図版21-6）

沈線刺突文の土器である。

第1類：1片のみであるが、やや幅の広い平行沈線、およびこの沈線の施文具と思われる茎様のものを器壁に対して斜めに刺突した刺突痕によって幾何学的な文様を作っている。胎土は微粒子状で、焼成もよい。器厚は7mmで、明赤褐色（5 Y R %）を呈する。

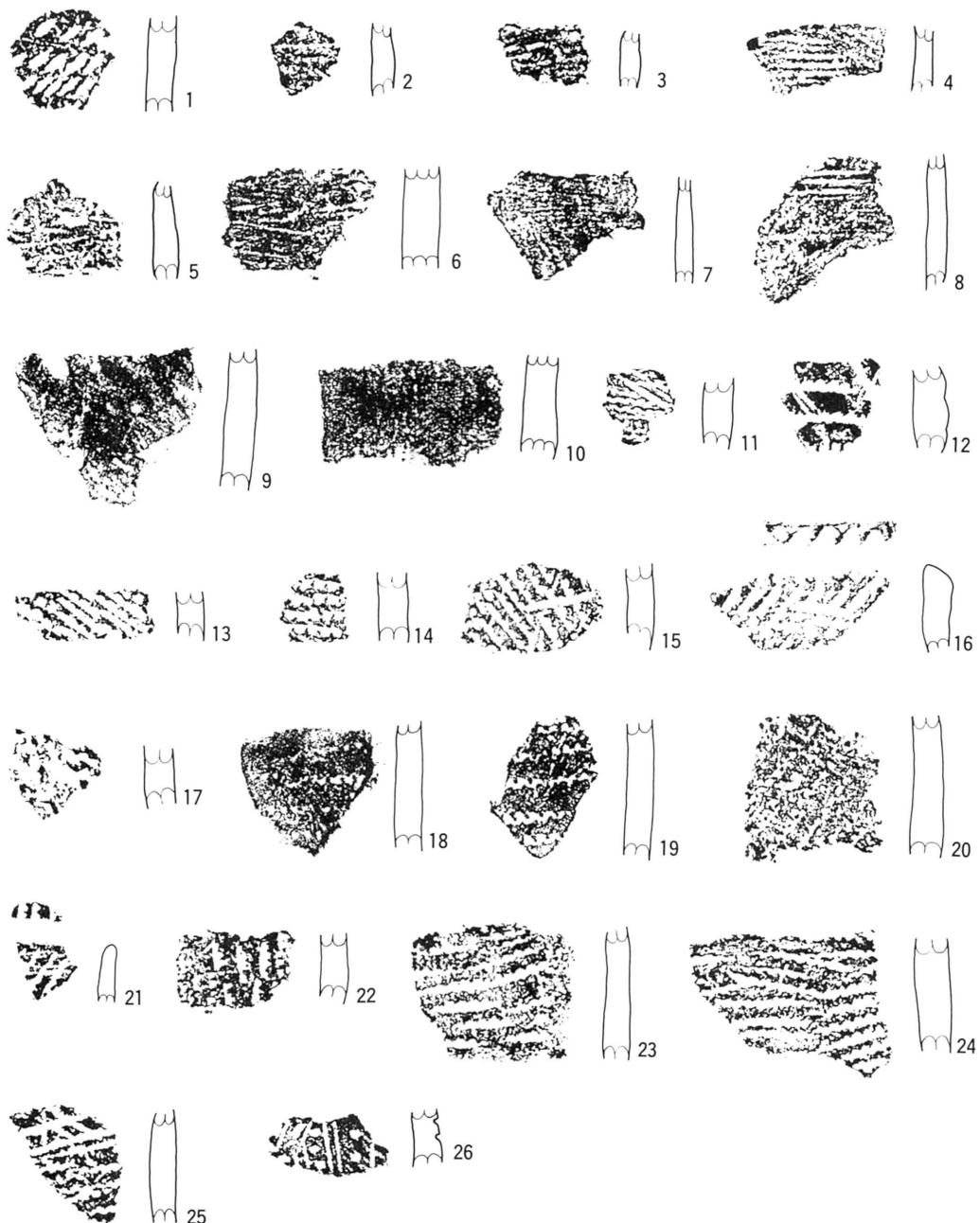
第III群土器（第21図1～32、図版21-2）

繊維を含む土器である。

第1類：(a)全面に大粒の節を有する斜縄文をもつ。使用原体は2段であるが、磨耗のため不明の箇所が多い。胎土は石英粒、小石なども含み、極めて粗である。(b)横位の撚糸状圧痕を2条付している。繊維は少なく、胎土に石英粒などを含み概ね粗である。焼成は不良である。

第2類：撚糸状の圧痕を不規則に付しているが小片のため全体の状態は不明である。金雲母片が多量に含まれる。色調は黒褐色を呈し、裏面の色調も黒っぽい。裏面には指頭痕も残る。

第3類：繊維を多量に含む。羽状縄文であるが同一原体の回転方向を変えているかどうかは、残存破片からは不明である。裏面にも縄文が付され、いわゆる縄文一縄文の施文である。色調



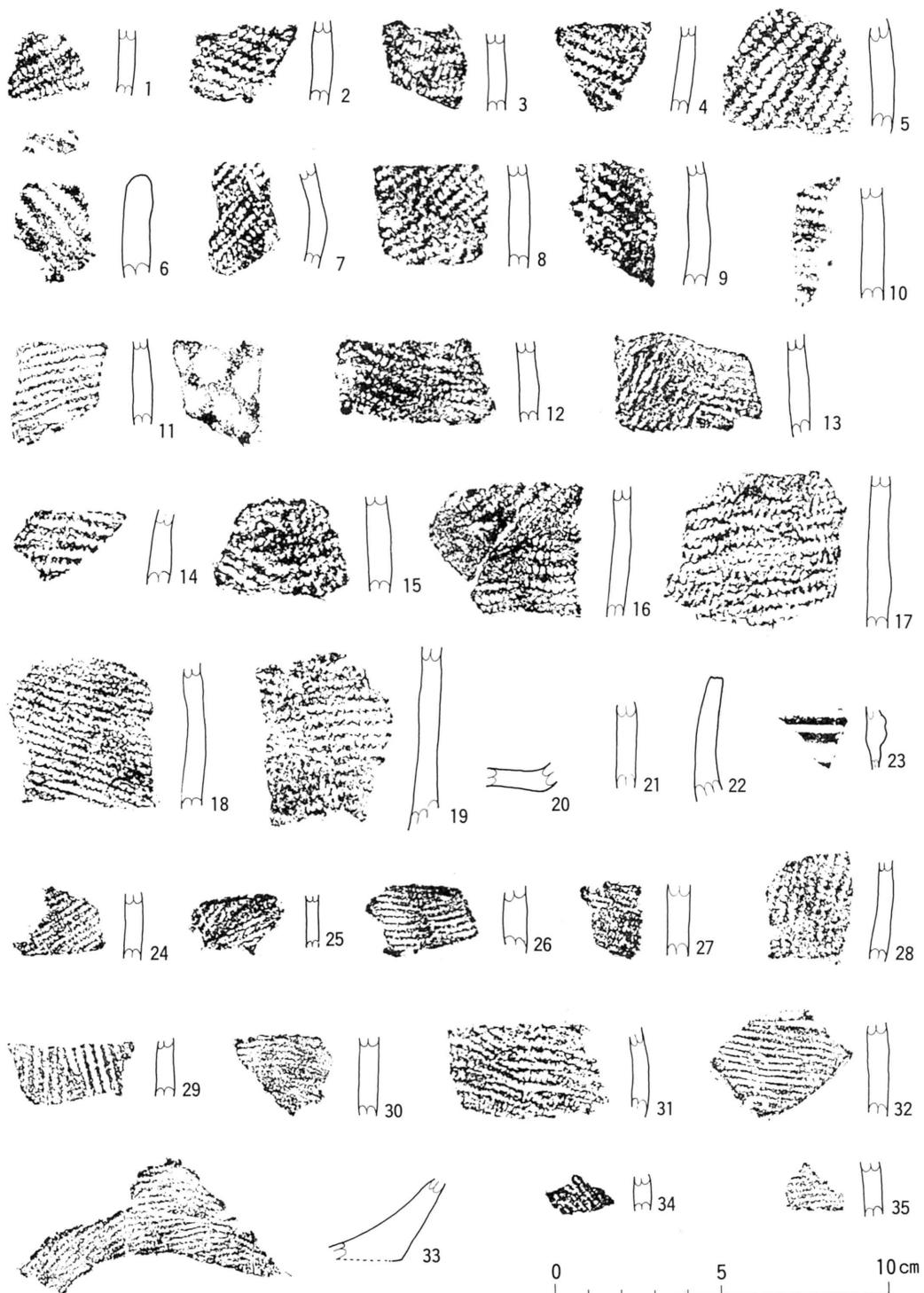
0 5 10 cm

第20図 土器拓影図(第I・II群)

白沢遺跡



第21図 土器拓影図(第Ⅲ群)



第22図 土器拓影図(第IV群)

白沢遺跡

は橙色（5 YR 6/6）を呈し、胎土に石英粒、小石を含む。器厚は7 mmである。

第4類：器表にのみ斜行縄文が施されるが羽状縄文片の一部と類似する。裏面には縄文は付されず、一部に横走する条痕が認められる。纖維が含まれ、一部土器片の器表に種子痕と見られる痕跡がある。

第5類：器面全体に磨滅があり、縄文痕不明のものもある。指頭圧痕が裏面に残る。器面の一部に列点文状の刺突も見られる。橙色の色調を呈し、胎土に若干の石英が入る。器厚は5～6 mmで薄手である。

第6類：単節斜縄文が器表に付されるが、施文は器面の一部だけに見られるようである。裏面は条痕が斜方向に付される。胎土に石英粒、粗砂などを多量に含み、もろい。器内面に炭化物の付着が認められる。器厚は6～7 mmでにぶい橙色（7.5 YR 7/4）を呈する。

第IV群土器（第22図1～35、図版21-3）

縄文と沈線による土器である。

第1類：単節斜縄文を縦位に施し、裏面にミガキ痕を有した粗製土器である。石英粒、細砂を含み、器厚4～5 mmを有する。色調はにぶい橙色（7.5 YR 7/3）である。

第2類：単節斜縄文を胴部に施し、小波状口縁を有するものである。口唇部平坦面に沈線が巡り、口縁部器表・裏共にミガキを施している。胎土は細砂を含み、褐色（7.5 YR 4/4）を呈する。

第3類：3本の平行沈線を施した精製土器小破片である。器全形は不明である。橙色（7.5 YR 6/6）を呈し、5 mmの器厚を有する。

第4類：小形の鉢片と思われるが、器全面に細縄文をやや斜方向に施し、裏面は条痕が認められる。橙色（7.5 YR 6/6）を呈し、若干の細砂を含む。

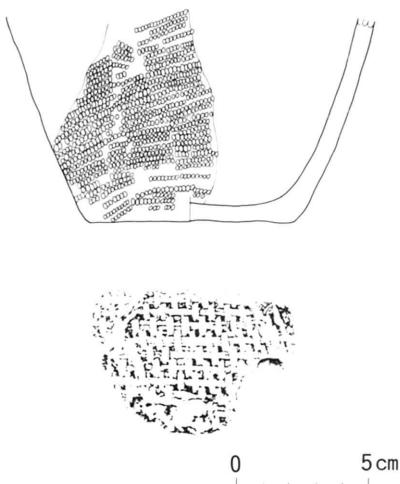
なお、H I 50周辺埋土第3層中より、鉢形土器片が出土した（第24図、図版21-7）。底径8 cmの網代底である。第IV群32～35土器片に類似する。

第V群土器（第24図、図版21-8）

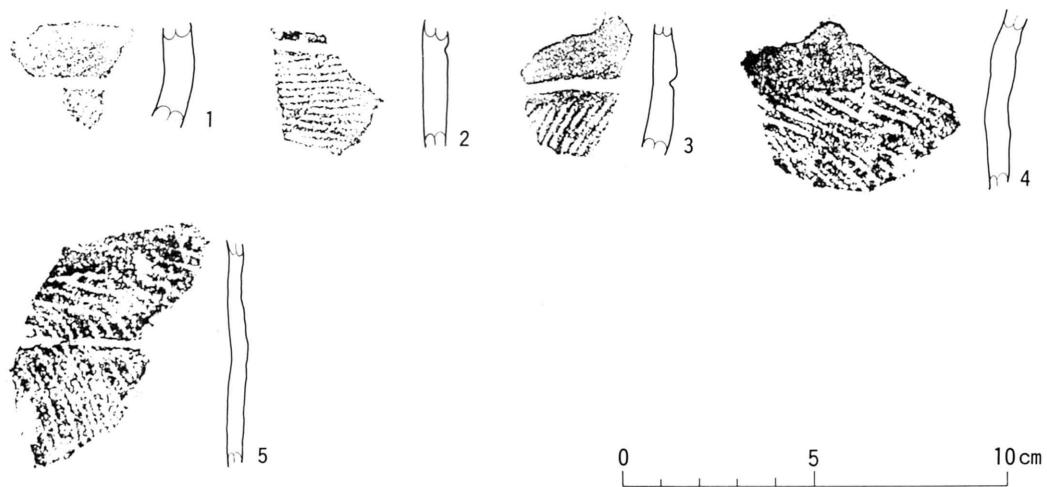
撚糸文を施した土器である。

第1類：横沈線の上部は磨消し、下部に斜方向に撚糸文を施している。褐色（7.5 YR 4/4）を呈し、細砂を若干含む。

第2類：撚糸文を施しているが、不定方向である。小形壺の小片と思われる。褐色（7.5 YR 6/6）を呈し、微粒砂を含む。器厚は4～5 mmで薄手である。



第23図 出土土器実測図



第24図 土器拓影図(第V群)

(2) 石器

本遺跡南微高地周辺埋土内から出土した石器（片）は剥片石器とその素材、および礫石器である。

剥片石器は剥片剝離技術によって製作された石器で、それによって生産された剥片と、その工程において生じた石核が、剥片石器の素材として大別できる。また、素材の形をあまり変えないで使用している石器を、礫石器とした。

本遺跡では上記の大別によるほとんどが若干の使用痕が認められるものの不定形なものが多い。

剥片石器

以下、剥片石器を5群に大別し、更にそれを細分し記述する。

出土総数は60片である。

第I群石器（第25図1～6、図版22-1）

尖頭部を有するもので、尖頭状石器といえるものである。石鏃、石槍等が含まれる。

a類：（第25図1～2）無茎の石鏃である。2点とも平基のものであるが、1は先端部が欠損している。2は側縁がやや丸味を帯び、入念な剝離調整を施している。材質は1が黒曜石である。計測値は第10表のとおりである。

b類：（第25図3～5）3・4・5は石鏃の形態を示してはいるが、大形であり、厚手でもあることから尖頭状石器と呼称した。3はやや丸味をもつ両側縁と、これによって構成される先端部をもつもので、ほぼ三角形を呈する。周縁に粗い剝離を加えている。4は直状の両側縁

白沢遺跡

第8表 白沢遺跡南台地（周溝内）出土遺物表（土器）

出土位置 分類		H C 03周溝	H H 03周溝	H I 50周溝	不明	計
I	1	1	0	0	0	1
	2 a	5	1	1	0	7
	2 b	0	0	2	0	2
	3	2	0	0	0	2
	4 a	4	0	0	0	4
	4 b	3	0	3	0	6
	5	0	0	3	0	3
II	1	0	0	0	1	1
III	1 a	6	0	1	0	7
	1 b	0	1	0	0	1
	2	0	2	1	0	3
	3	0	0	2	0	2
	4	2	1	4	0	7
	5	3	2	5	0	10
	6	7	3	0	0	10
IV	1	9	7	9	0	25
	2	0	1	1	0	2
	3	0	0	1	0	1
	4	12	1	0	0	13
V	1	3	0	0	0	3
	2	0	2	0	0	2
他		8	0	3	0	11
計		65	21	36	1	123

第9表 剥片石器数

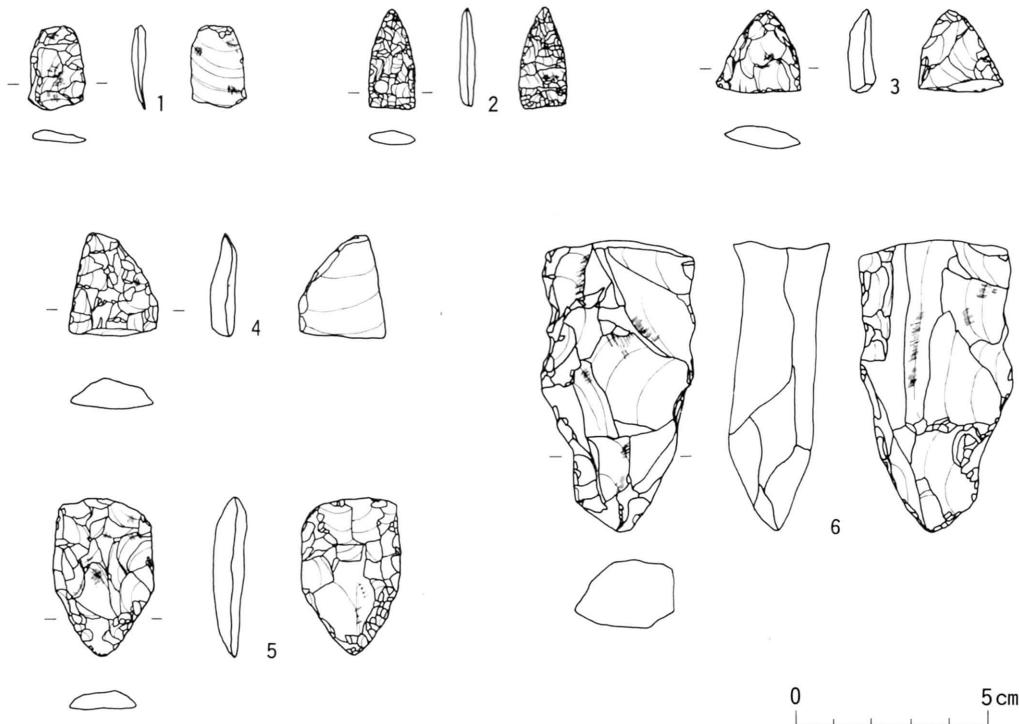
分類	I				II				III		IV	V	計
	a	b ₁	b ₂	c	a	b ₁	b ₂	b ₃	a	b			
片数	2	2	1	1	4	3	3	2	8	6	15	13	60

第10表 石器計測表 (第 I 群)

図版番号	写真番号	出土地点	分類記号	計測値				材質	遺物記入番号	備考		
				最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重さg					
1	図版22-1	H C03周溝	I a	21.5	15	3	0.9	黒耀石				
2	×	H I 50周溝	×	26	12	4	1.15	珪質頁岩				
3	×	H H 03周溝	I b ₁	21	22	6.5	2.8	硬質頁岩	No. 27	新第三紀中新生、零石—豊沢川間(?)		
4	×	H I 50周溝	I b ₂	26	23	7	3.7	珪質頁岩	No. 38	脊梁新第三紀中新世、零石—碑貫西部		
5	×	×	I b ₁	41	26	8	7.65	石凝灰岩	No. 32	×	×	
6	×	×	I c	76	40	22	66.8	凝灰質頁岩	No. 5	×	×	

と、鋭角な先端部を有しているもので三角形状を呈する。

c類：（第25図6）6は比較的大形で刺突機能を持つ石槍であろう。最大長76mm、幅40mm、



第25図 石器実測図(第 I 群)

白沢遺跡

厚さ22mm、重さ66.8gのかなり大形のものである。材質は凝灰質硬質頁岩である。

第II群石器（第26図1～12、図版22-2）

両面加工をし、両側縁または一側縁に剥離を加え、切削の機能を有したと思われるものである。石範状石器が含まれる。

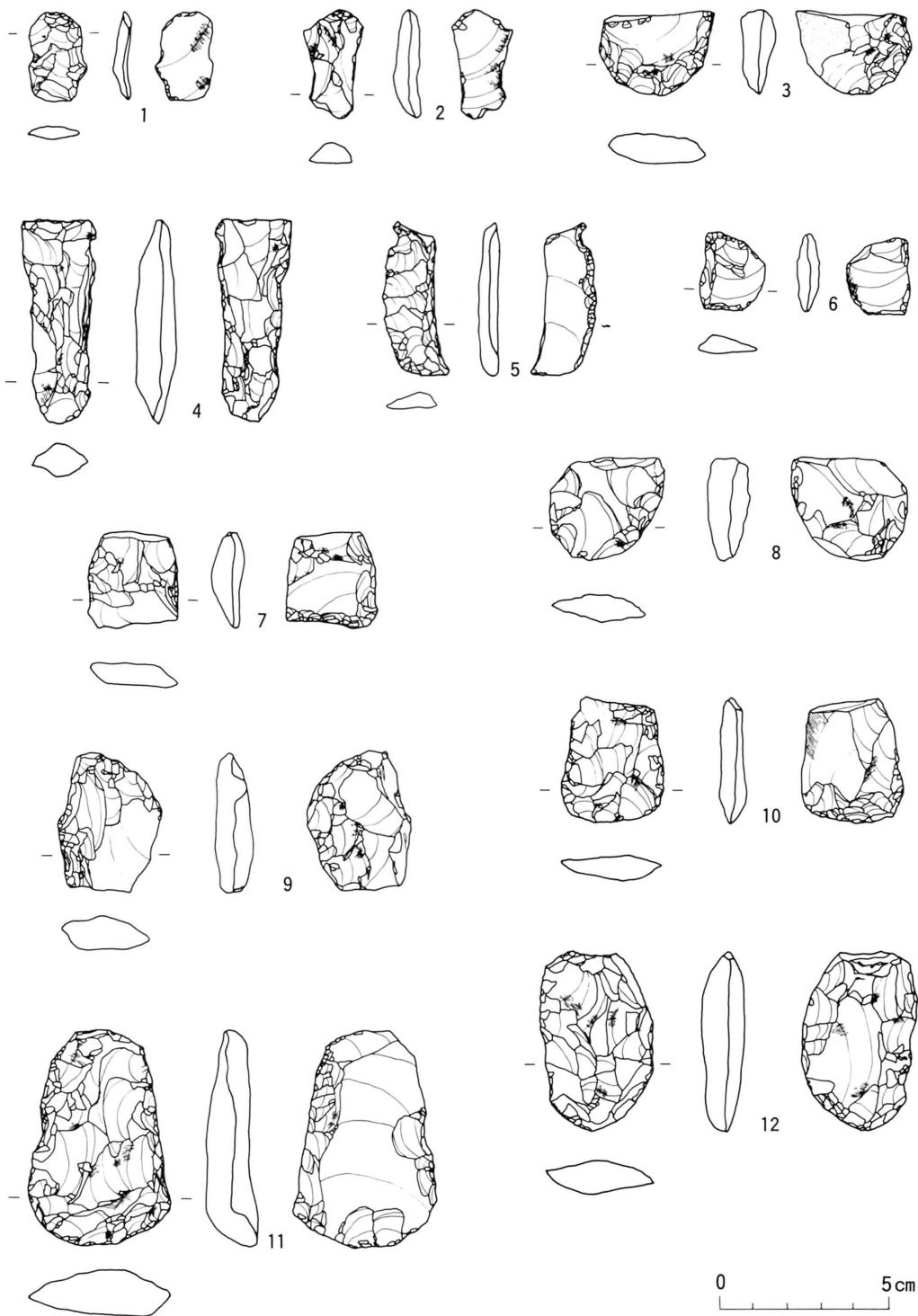
a類：（第26図1・2・4・5）1・2は両面の一側縁にのみ若干の剥離を加えているだけであり、搔器的な面もある。4は両面加工で両側縁に直状の刃部を付しているが、主なる機能は端部にあると見られる。5は石匙状のものでつまみに対する刃がわずかに丸味をもつものである。両側縁が弧状をなし、背面の剥離はつまみ基部周辺と一側縁に加えられている。

b類：（第26図3・6～12）全般にやや厚手の縦長剝片を素材としており、両面加工が行なわれている。剥離が周縁に及ぶものは片面のみのものや両面に施されるが、片面は全面までは剥離されないものなどがある。11・12以外は一部切損が認められる。3・6・8は弧状の側縁をもち、全体として橢円形をなす。両面加工であるが、部分的な剥離である。7、10は下端部にのみ刃部を有するものである。両側縁が平行で全体として短冊形をなす。下端部に使用痕が認められ、敲打切削器の可能性もある。11、12は厚手の剝片を素材としおり、両面に一次剥離面を残している。刃部角度が大きく、切削と共に、剥撃機能も考えられる。

第11表 石器計測表（第II群）

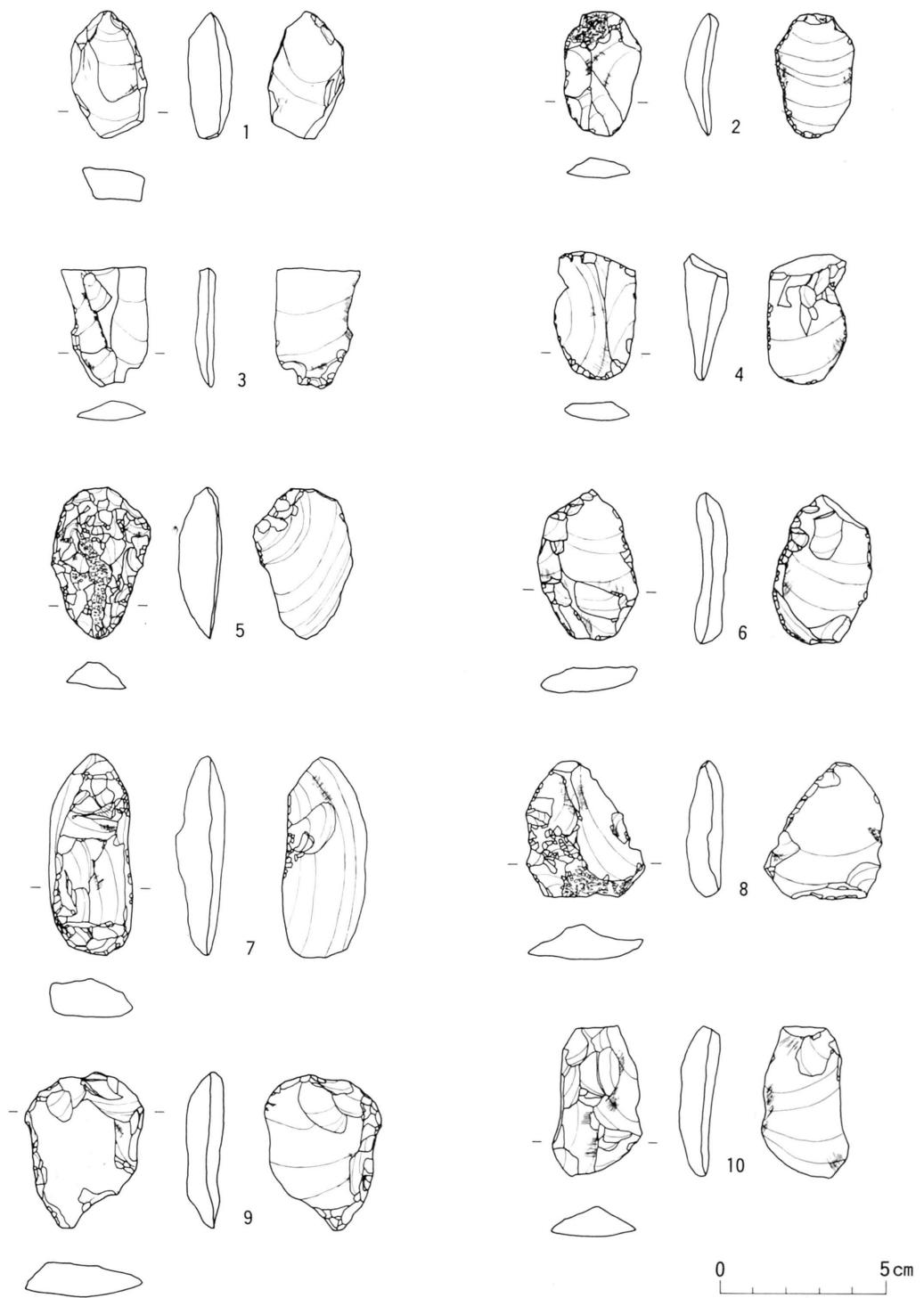
図版番号	写真番号	出土地点	分類記号	計測値				材質	遺物記入番号	備考
				最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重さg			
1	図版22-2	H I 50周溝	II a ₁	32	17.5	6	2.8	硬質頁岩	(No61)	脊梁新第三紀中新世、零石一 碑貫西部
2	〃	H C03周溝	〃	26	17	4	1.4	凝灰質 硬質頁岩	No. 64	新第三紀中新世、零石西部
3	〃	H I 50周溝	II b ₂	33	24	10	8.15	珪質泥岩	3	脊梁新第三紀中新世、零石一 碑貫西部
4	〃	〃	II a ₁	60	22	12	15.6	硬質頁岩	No. 3	〃
5	〃	〃	〃	42	25	6	4.6	石 凝灰岩	No. 46	〃
6	〃	〃	II b ₂	23	19	7	2.25	珪質泥岩	4	
7	〃	〃	II b ₃	28	26	9	6.5	硬質泥岩	5	脊梁新第三紀中新世、零石一 碑貫西部
8	〃	〃	II b ₂	38	30	7	12.3	凝灰質 硬質泥岩	(No61)	〃
9	〃	H C03周溝	II b ₁	40.5	30	10.5	15.4	凝灰質 硬質頁岩	No. 41	新第三紀中新世、零石西部
10	〃	H I 50周溝	II b ₃	36	30	8	10.4	珪質泥岩	6	
11	〃	H A 03	II b ₁	64	42	15	24.15	硬質泥岩	No. 3	
12	〃	H I 50周溝	〃	52	33	12.5	37.95	泥 凝灰岩	No. 14	脊梁新第三紀中新世、零石一 碑貫西部

白沢遺跡



第26図 石器実測図(第Ⅱ群)

白沢遺跡



第27図 石器実測図(第Ⅲ群)

第12表 石器計測表（第III群）

図版番号	写真番号	出土地点	分類記号	計測値				材質	遺物記入番号	備考
				最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重さg			
1	図版22-3	HH03周辺	III a	49	23	13	11.2	硬質頁岩	No. 36	脊梁新第三紀中新世、零石
2	〃	〃	〃	37	23	8	5.9	珪質頁岩	C	
3	〃	H I 50周辺	〃	35	25.5	6	5.3	硬質頁岩	No. 63	脊梁新第三紀中新世、零石— 碑貫西部
4	〃		〃	38	24	13	9.85	珪質泥岩	8	
5	〃	H I 50周辺	〃	45	29	13	14.6	珪質頁岩	No. 77	脊梁新第三紀中新世、零石— 碑貫西部
6	〃		〃	45	29	8	9.8	凝灰質 硬質泥岩	7	
7	〃	HH03周辺	〃	60	25	15	22.2	硬質頁岩	A	
8	〃	〃	〃	41	35	11	14.15	硬質頁岩	B	
9	図版22-4	H I 50周辺	III b	45.5	36	11	16.4	珪質細粒 石質凝灰岩	No. 71	
10			〃	44	26	11	10.3	凝灰質 硬質泥岩	9	脊梁新第三紀中新世、零石— 碑貫西部

第III群石器（第27図1～10、第23図1～4、図版22-3・4）

素材に比較的厚手の剥片を用い、片面にのみ部厚な刃部をつくり出しているもので、刃部を作り出すための剝離打撃痕は背面に加えられている。搔器が含まれる。

a類：（第27図1～10）横断面が低平な台形状のもの（第27図1・2・4・6・7・9）と、三角形状のもの（上記以外）とがある。台形状のものの刃部は台形の一斜面、ないしは二斜面につくり出されるが、ここでは一斜面だけのつくり出しが多いようである。三角形状は縁部だけのものと頂部までのものとがある。

b類：（第28図1～4）a類に含まれるものであるが、製作途中のものとも思われ、剝離も十分になされていない。

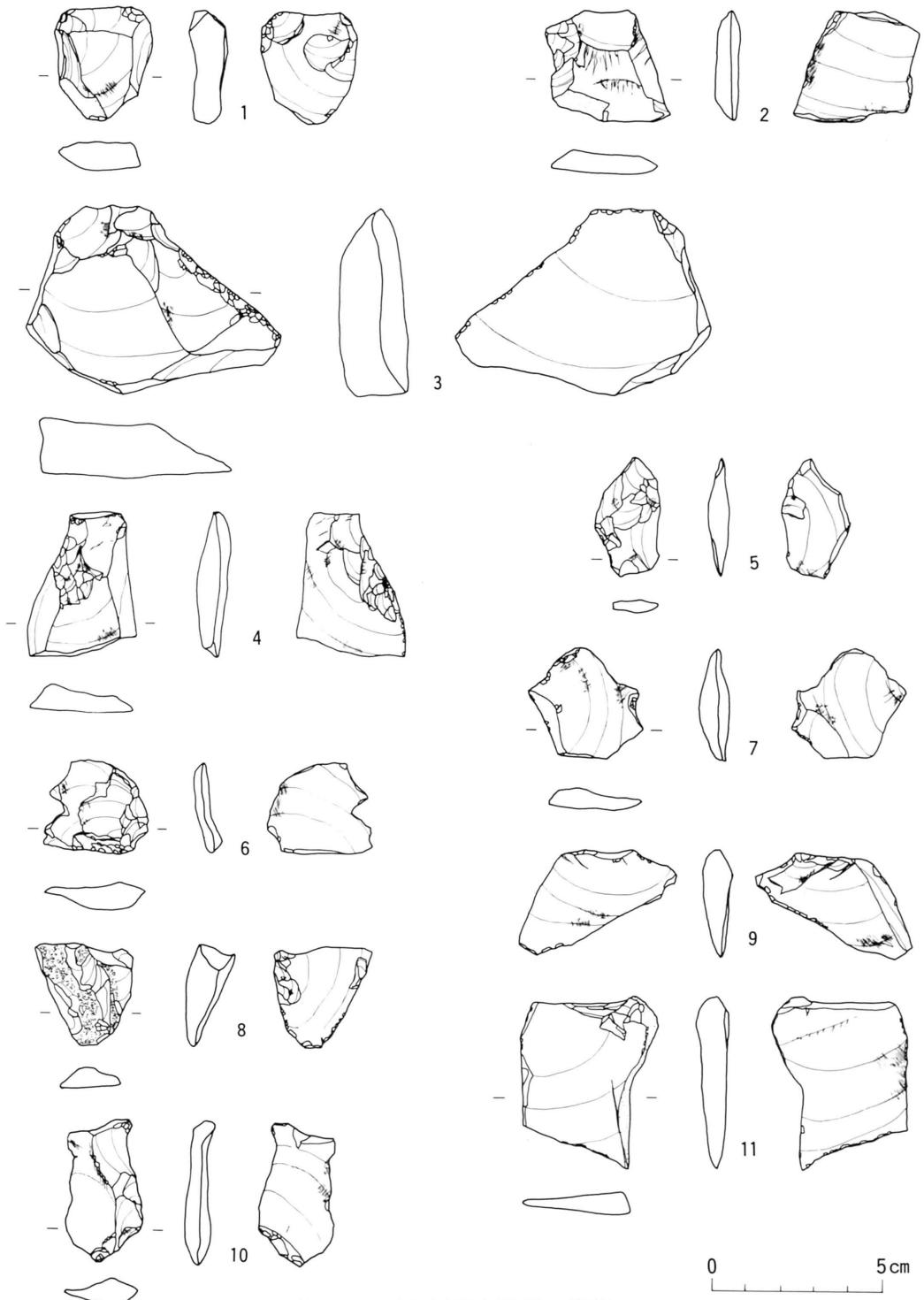
第IV群石器（第28図5～11、第29図1～8、図版22-5）

若干の剝離が加えられており、使用痕が認められる不定形石器である。両面あるいは片面からの加撃によって刃部を作り出しているもので、用途は削器、または搔器的なものと思われる。

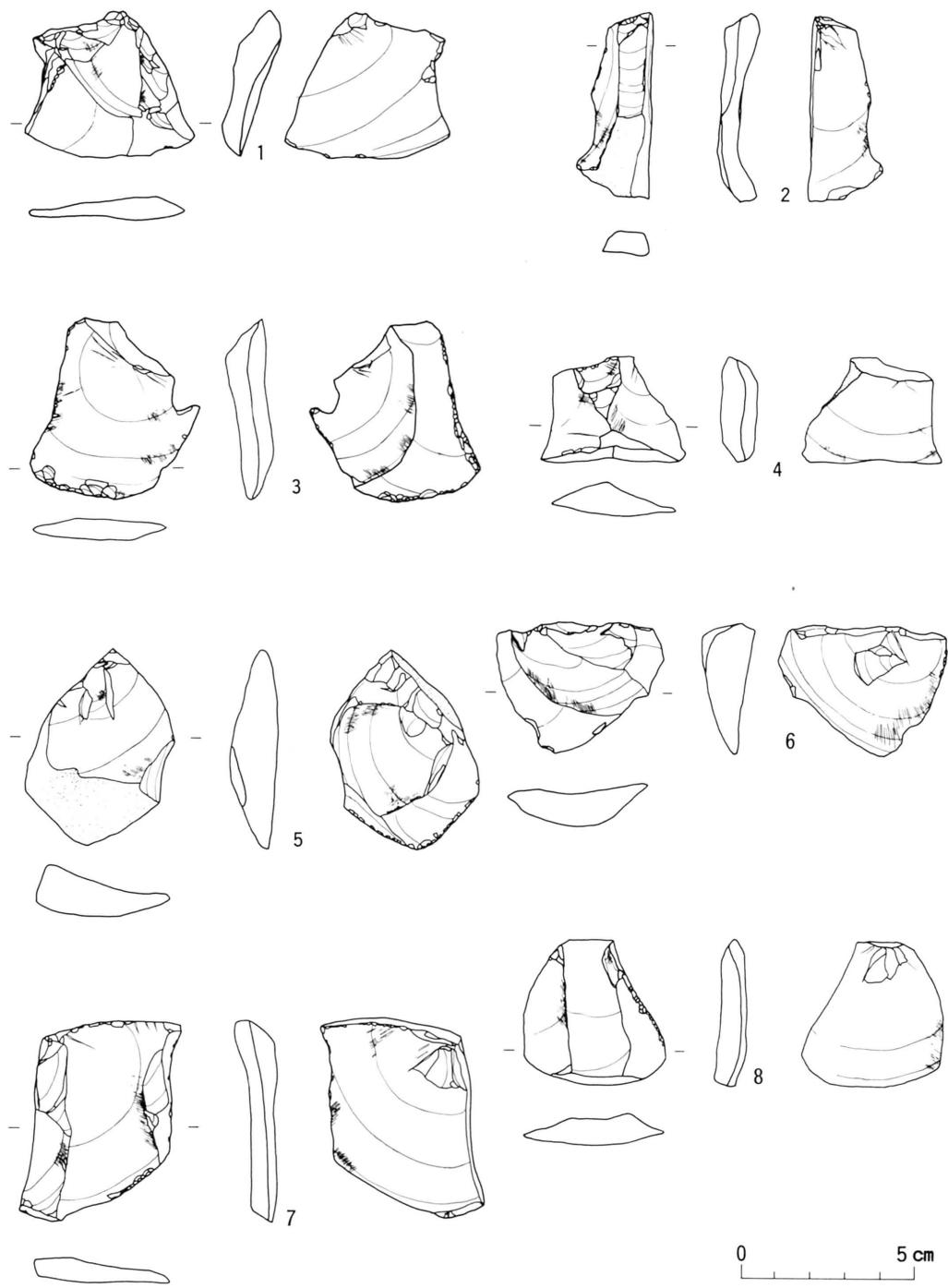
第V群石器（第30図1～13）

13片の出土をみたが、その多くは最大長5cm以内のもので、材質は硬質頁岩、珪質頁岩がほとんどである。

白沢遺跡



第28図 石器実測図(第III・IV群)



第29図 石器実測図(第IV群)

白沢遺跡

第13表 石器計測表（第III・IV群）

図版番号	写真番号	出土地点	分類記号	計測値				材質	遺物記入番号	備考
				最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重さg			
1	図版22-4	H C03周溝	III b	33	29	11	10.15	凝灰質硬質頁岩	No. 33	新第三紀中新世、零石西部
2	〃	H H03周溝	〃	33	33	7	6.8	硬質頁岩	No. 44	脊梁新第三紀中新世、西部山地
3	〃	〃	〃	55	74	20	80.2	石凝灰質岩	No. 8	〃
4	〃	H I 50周溝	〃	42	32	9	11.3	〃	No. 41	零石-稗貫西部
5	図版22-5	H C03周溝	IV	34	18.5	6	3.05	泥質石質凝灰岩	No. 60	新第三紀中新世、零石西部
6	〃	〃	〃	26	30.5	7.5	2.9	〃	No. 26	〃
7	〃	〃	〃	32	32	9	5.0	〃	No. 53	〃
8	〃	H I 50周溝	〃	30	28	12	7.4	珪質頁岩	No. 11	脊梁新第三紀中新世、零石-稗貫西部
9	〃	〃	〃	27	39	9	4.3	石凝灰質岩	No. 34	〃
10	〃	〃	〃	39	22	8	4.55	〃	No. 13	〃
11	〃	H H03周溝	〃	50	39	9.5	14.1	硬質頁岩	No. 29	零石

第14表 石器計測表（第IV群）

図版番号	写真番号	出土地点	分類記号	計測値				材質	遺物記入番号	備考
				最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重さg			
1	図版22-5	H I 50周溝	IV	41.5	49	11.5	15.9	硬質頁岩	No. 19	脊梁新第三紀中新世、零石-稗貫西部
2	〃	〃	〃	54	21	10	8.55	〃	No. 35	〃
3	〃	〃	〃	51	42	11.5	18.15	石凝灰質岩	No. 47	〃
4	〃	H H03周溝	〃	30	41	10.5	10.3	〃	No. 1	〃 西部山地
5	〃	〃	〃	54	39	13.5	24.3	〃	No. 11	〃
6	〃	〃	〃	37.5	48	14	17.2	凝灰質硬質泥岩	10	
7	〃	H H03周溝	〃	54	39	10	18.25	硬質頁岩	(No.46)	脊梁新第三紀中新世、零石
8	〃	H I 50周溝	〃	42	40.5	8.5	15.1	硬質シルト岩	No. 1	〃 零石-稗貫西部

第15表 石器計測表（第V群）

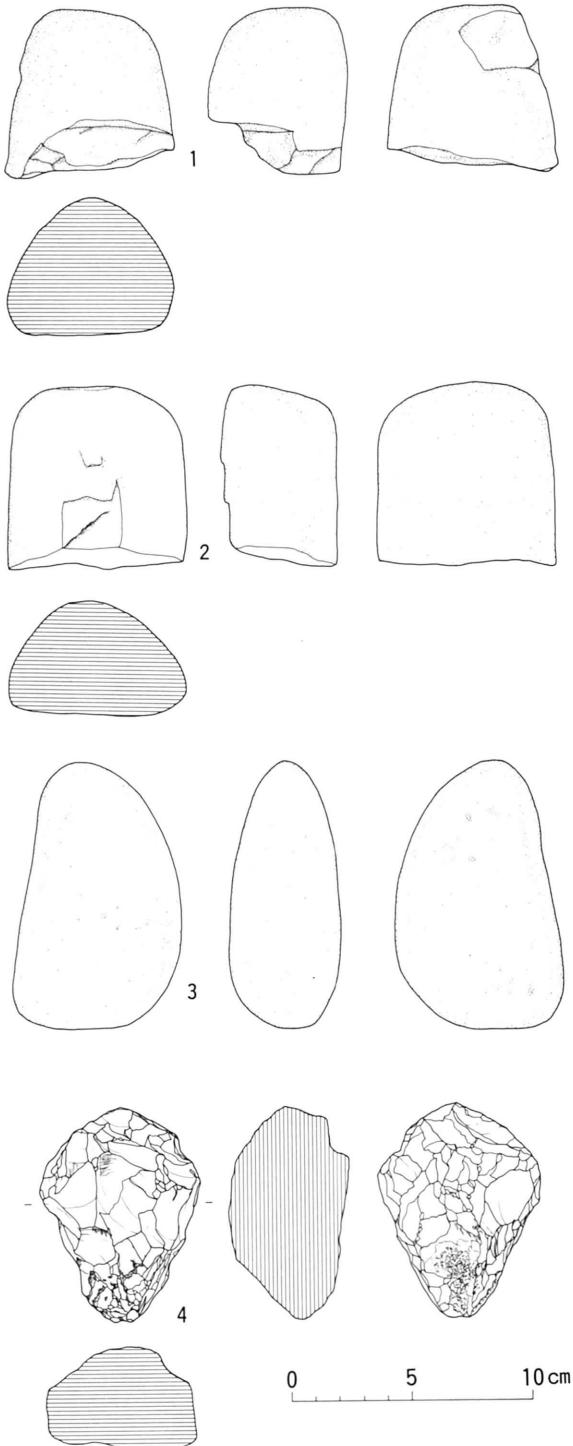
図版番号	写真番号	出土地点	分類記号	計測値				材質	遺物記入番号	備考
				最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重さg			
1		H H03周溝	V	18	14.5	5	1.3	石凝灰質岩	No. 8	脊梁新第三紀中新世、西部山地
2		H C03周溝	〃	23	17	4	0.9	硬質頁岩	No. 15	脊梁新第三紀中新世、零石-稗貫西部
3		H I 50周溝	〃	17	28	8	3.0	珪質頁岩	No. 75	〃
4	〃	〃	〃	22	35.5	8	3.9	硬質頁岩	No. 10	〃
5	〃	〃	〃	24	25	5.5	2.75	石凝灰質岩	No. 26	新第三紀中新世、零石西部
6		H C03周溝	〃	22	25	6	2.25	硬質頁岩	No. 12	脊梁新第三紀中新世、零石-稗貫西部
7		H I 50周溝	〃	25	24	6	2.65	〃	No. 69	新第三紀中新世、零石西部
8		H C03周溝	〃	40.5	21	12.5	7.8	〃	No. 24	脊梁新第三紀中新世、西部山地
9		H H03周溝	〃	32	28	10	8.7	石凝灰質岩	No. 12	〃 零石
10	〃	〃	〃	29.5	28	8.5	6.3	硬質頁岩	No. 27	〃 零石-稗貫西部
11		H I 50周溝	〃	32	39	10	9.4	珪質頁岩	No. 73	〃
12	〃	〃	〃	48	18.5	11	10.2	〃	No. 48	〃
13	〃	〃	〃	49	19.5	11	9.8	〃	No. 51	〃

白沢遺跡



第30図 石器実測図(第V群)

白沢遺跡



第31図 石器実測図(1)

素材 (第31図 4、図版23-5)

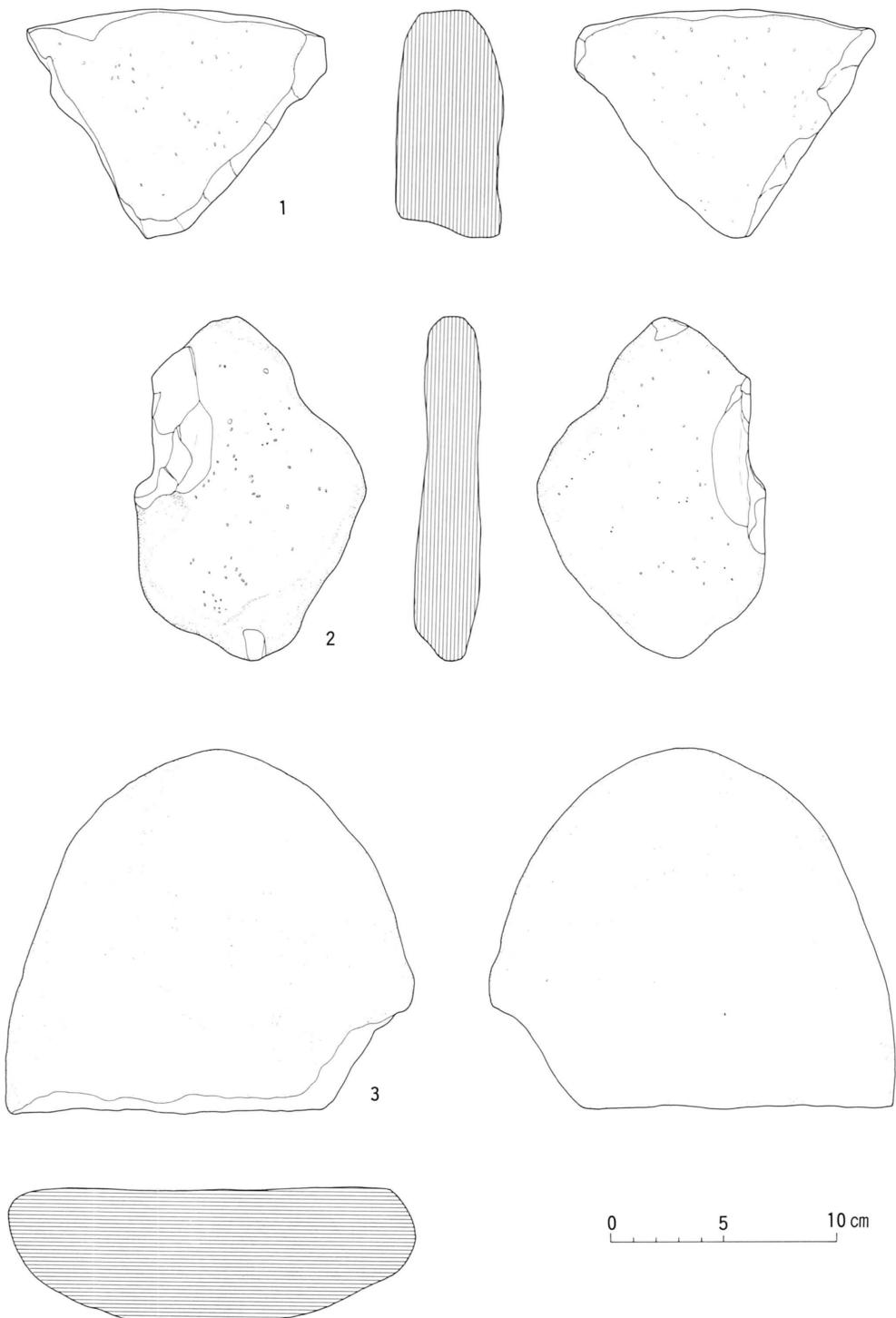
大形の石核である。最大長89mm、幅67mm、厚さ48mmを測る。H I 50円形周溝埋土から出土したもので、石質は硬質泥岩である。使用痕は観察できない。

礫石器 (第31図 1~3、図版23)

物の粉碎、磨滅、磨り潰しなどに用いたもので、いわゆる磨痕、敲打痕などを器面に残すもの（磨石、敲石、凹石と呼称されているもの）である。1・3はH I 50、2はH C 03周溝埋土中から出土したものでそれぞれ器面に磨痕を残している。特に1は側面に磨滅痕が顕著である。なお、3は器面に黒色の付着物があり、表・裏の使用面のみ、付着物の消滅痕がある。石質は1が輝石安山岩、2・3は緑色凝灰岩である。

石皿 (第32図 1~3、図版23-9)

3点出土しているが、いずれも欠損品である。1はH I 50、2・3はH C 03円形周溝埋土中から出土したものである。3点とも無脚であり、特に2は自然石のまま使用しており器表面に使用痕が認められる。3は上・下面にややくぼんだ面があり、明らかに「磨る」作業が行なわれたための使用痕であろう。石質は多孔質熔岩塊の淡緑色斜長石流紋岩であり、岩手火山活動によるものと見られる。



第32図 石器実測図(2)

白沢遺跡

〔4〕平安時代の遺構

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

B E 06住居跡（第33図、図版17）

〔遺構の確認面〕 遺跡北側の東北本線寄り、果樹園として利用されていたB E 06グリッド周辺で、表土にあたる黒褐色土層（I a層）を掘り下げたところ、竪穴住居跡の落ち込みの一辺を確認した。遺構の掘込み面は火山灰質土（II層）である。

〔保存状況〕 果樹栽培によると思われる攪乱がみられ、床面を一部破損している。

〔平面形 長軸方向〕 南北にやや長いが、ほぼ正方形であり、長軸方向はN-45°-Wである。

〔規模〕 大きさは、長（南北）軸4m30cm、短（東西）軸4mで、床面積は約15.2m²である。

〔堆積土〕 遺構内の堆積土は基本的に以下の3層に大別される。

第1層（黒褐色土層）：黒褐色の粘土質シルトで基本的にはI b層と近似しており、遺構内に約5～10cmの厚さで堆積している。土器片は含まれない。

第2層（黒褐色土層）：第1層とほぼ同じ粘土質シルト層であるが、II層の粘土を小ブロック状に含むため、やや黄褐色の色調を呈する。土師器、須恵器片も若干混入している。

第3層（黒色土層）：住居跡ピット埋土である。やや粘性があるが、1・2層と同質である。炭化片が若干含まれているが、土器片の出土はない。

〔壁〕 地山を壁とし、残存壁高は東壁で20cm、西壁で17cm、南壁で25cm、北壁で30cmである。壁の立ち上がりは全体に緩いが、東壁が若干急な立ち上がりである。

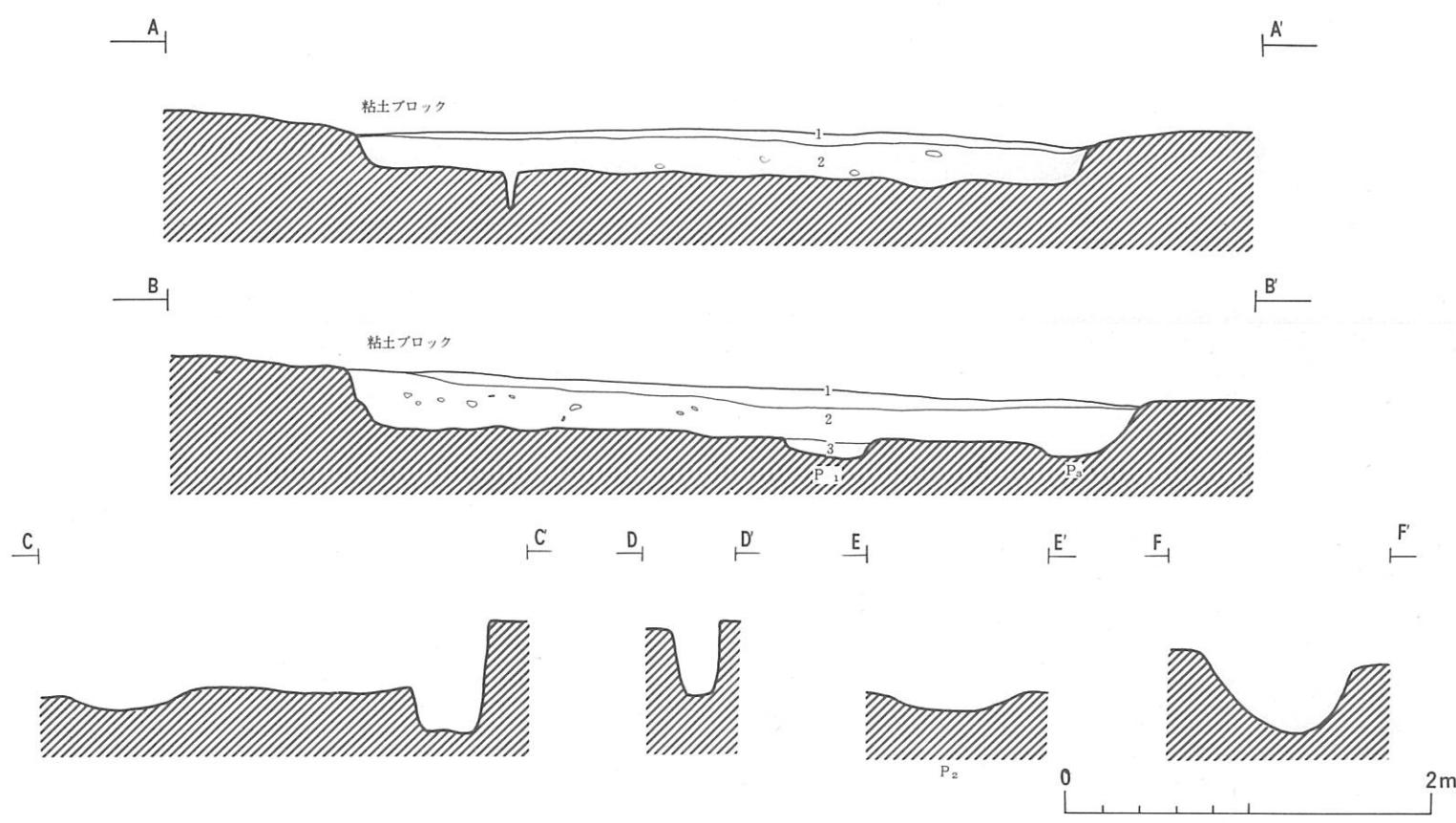
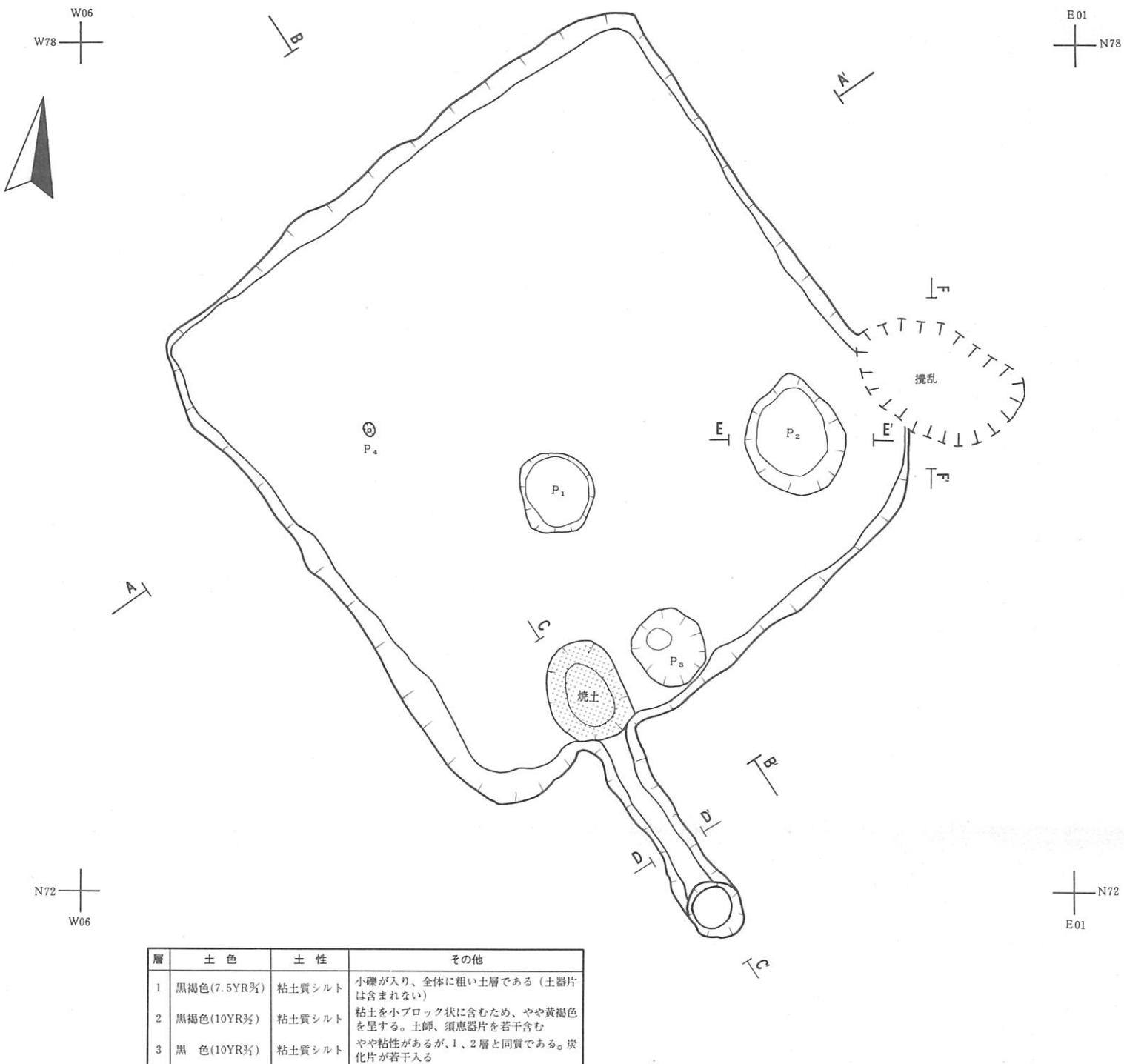
〔床面〕 全体に多少の凹凸はあるが、平坦で固くしまっている。床面東側が若干低くなってしまっており、やや傾斜面をなしている。南壁の西寄りにカマドが設けられており、その周辺は焼土が含まれ、固い面をなしている。貼り床などの痕跡は認められない。

〔柱穴〕 住居跡内の床面から数個のピットが確認されたが、いずれも配置の規則性、深さ、大きさなどからみて柱穴痕と確認できるものではなかった。しかし、西壁寄りのピット（P 4）は約20cm弱の深さがあることから、あるいは柱穴痕とも見られたが、確定できなかった。

〔カマド〕 南辺の西寄りコーナー附近にとりつけられている。燃焼部は70cm×50cmの範囲で浅く皿状に掘り込まれており、焼土は燃焼部全般に分布しており、特に燃焼部から煙道部にかけて厚い焼土となっている。

袖は左右袖共に遺存状態は悪く、わずかに地山の黄褐色粘土質土と黒褐色土の混土がブロック状になったものが見られたが、浮いた状態であり袖としての原形を保っているものとは認められなかった。ただ、燃焼部周辺に角礫（淡緑色砂質凝灰岩）が数個見られた。

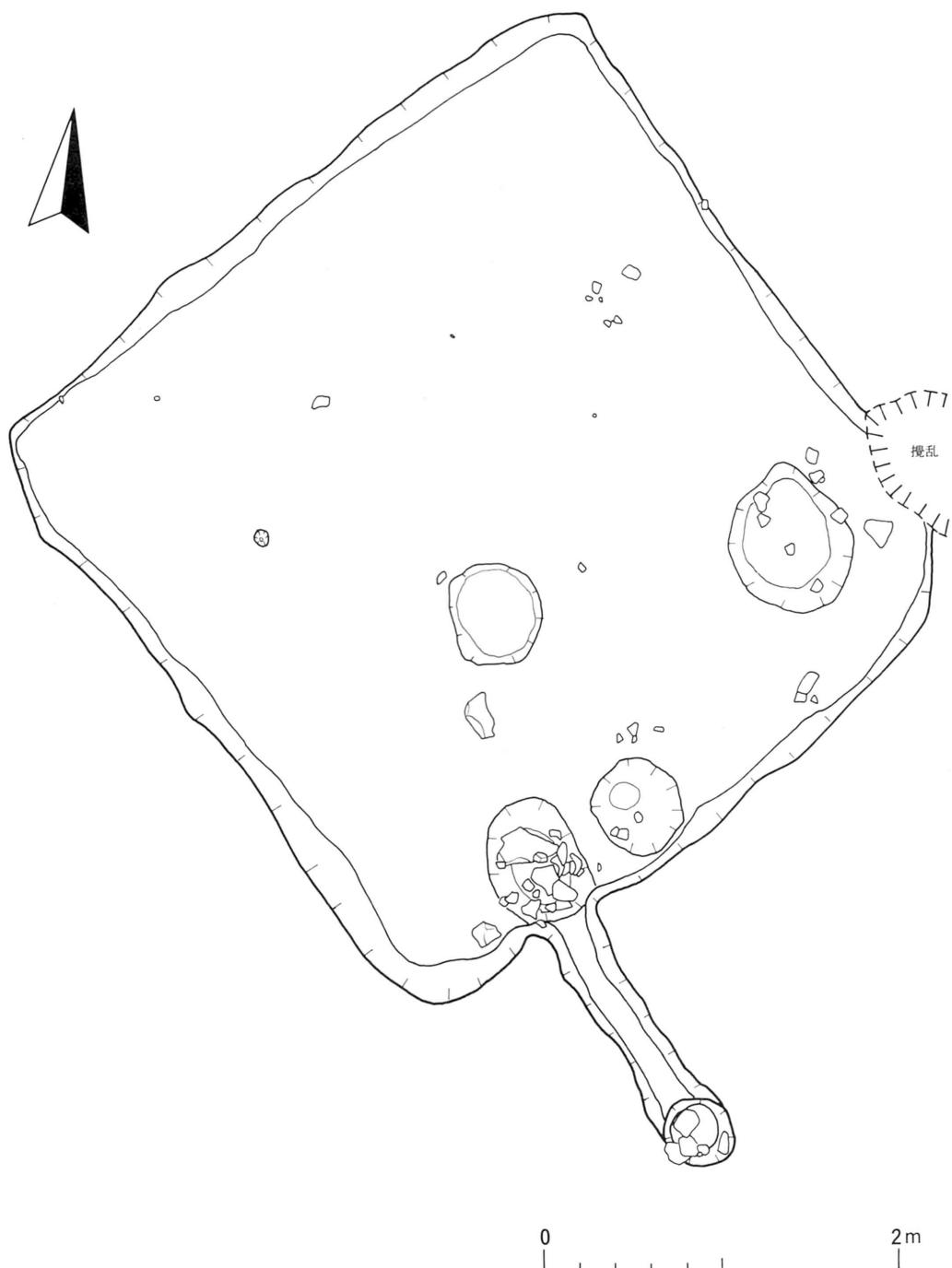
煙道部は掘り込み方式で作られており、燃焼部より緩く立ちあがり10cmの比高をもつ。煙出部に向かってほぼ水平に進み、中央で一旦立ち上がり、そのまま緩く下がって煙出部とつなが



第33図 BE 06住居跡平・断面図

白沢遺跡

白沢遺跡



第34図 B E 06住居跡遺物出土状況

白沢遺跡

第16表 住居跡別出土土器個体数

() 小破片数

住居跡	個体数	分類	土 師 器							須恵器		計	
			坏		甕					坏	甕		
			口ク口使用		口ク口不使用			口ク口使用					
			非黒色処理	黒色処理	最大径			最大径		坏	甕		
					口縁部	体 部	口縁=体部	口縁部	体 部				
B E 06 住 居 跡	個 体 数	図示遺物	2	1		1		4	1			4	13
		図示 底 部	4 (9)	2				3 (1)	1		(1)	(1)	10 (12)
		図示 不能 遺 物	4 計	2				3 (1)	1		(1)	(1)	10 (12)
		合 計	6 (9)	3		1		7 (1)	2		(1)	(1)	23 (12)
		図示遺物	13					2					15
C C 53 住 居 跡	個 体 数	図示 底 部	6 (24)	1 (5)							1 (1)		8 (44)
		図示 不能 遺 物	2										2
		図示 計	8 (24)	1 (5)							1 (1)		10 (44)
		合 計	21 (24)	1 (5)				2 (1)	(13)		1 (1)		25 (44)
		総 計	27 (33)	4 (5)		1		9 (2)	2 (13)		1 (2)	4 (1)	48 (56)
備 考		• C C 53 住居跡 墨書き 土器 2 個 体	• C C 53 住居跡 黒色処理の 土器の中 に内外 黒の土 器片 2										

る。煙道部の断面は上端25cm、下端15cmのU字形を示し、長さ 120cm、深さは、最深部で33cm 浅い個所で20cmを計る。

煙出部は直径40cmの円形で、構築面からの比高は60cmとなっている。煙出部には燃焼部に見られた角礫と同質の岩石が検出された。カマド主軸方向は住居跡長軸方向とほぼ平行である。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴と思われるピットとしてP 2・P 3がある。P 2は住居の東壁南寄りのコーナー附近にあり楕円形を呈する。大きさは検出面で85cm×70cm、深さは10cmの皿底状を呈する。埋土は住居跡埋土2層とほぼ同質であり、若干の炭化片、焼土片を含むが、土器片は出土しなかった。P 3はカマド燃焼部の左方にありほぼ円形を呈する。大きさは検出面で50cm×50cm、深さは8cmである。埋土はP 2の埋土と同様に1層のみであるが、炭化片のほか焼土ブロックが多く含まれ、また、土器片の出土も多い。P 1は住居中央部やや南寄りに位置し、大きさは50cm×60cmの楕円形で、深さは約10cm弱である。ピット壁の立ち上がりはやや直立するが、底面は傾きをもった平坦面をなしている。埋土は住居埋土2層とほぼ同質である。炭化片、焼土片は含まれない。P 4は住居東壁の南端、P 2の東方にある。大きさは検出面で 120cm×75cmの楕円形である。深さは40cmでナベ底状を呈する。埋土は均一な黒色土で、ややベトつく。焼土、炭化片、土器片などは含まない。埋土精査の結果、掘込み面は住居内埋土上の堆積層（遺跡基本土層第I層、表土下の旧地表）からであり、遺構とは関連のない新しい土壌である。

〔出土遺物〕 遺物は主としてカマド周辺とピット2から出土した（第34図）が、特にカマド燃焼部と煙出部から多く出土した。器種には土師器壺・甕、須恵器壺・甕がある。なお、縄文片が1片出土した。いずれも床直上からのものである。出土数は別表のとおりであるが、以下主なるものについて図示・記述する。

縄文土器（第35図1、図版26-2）

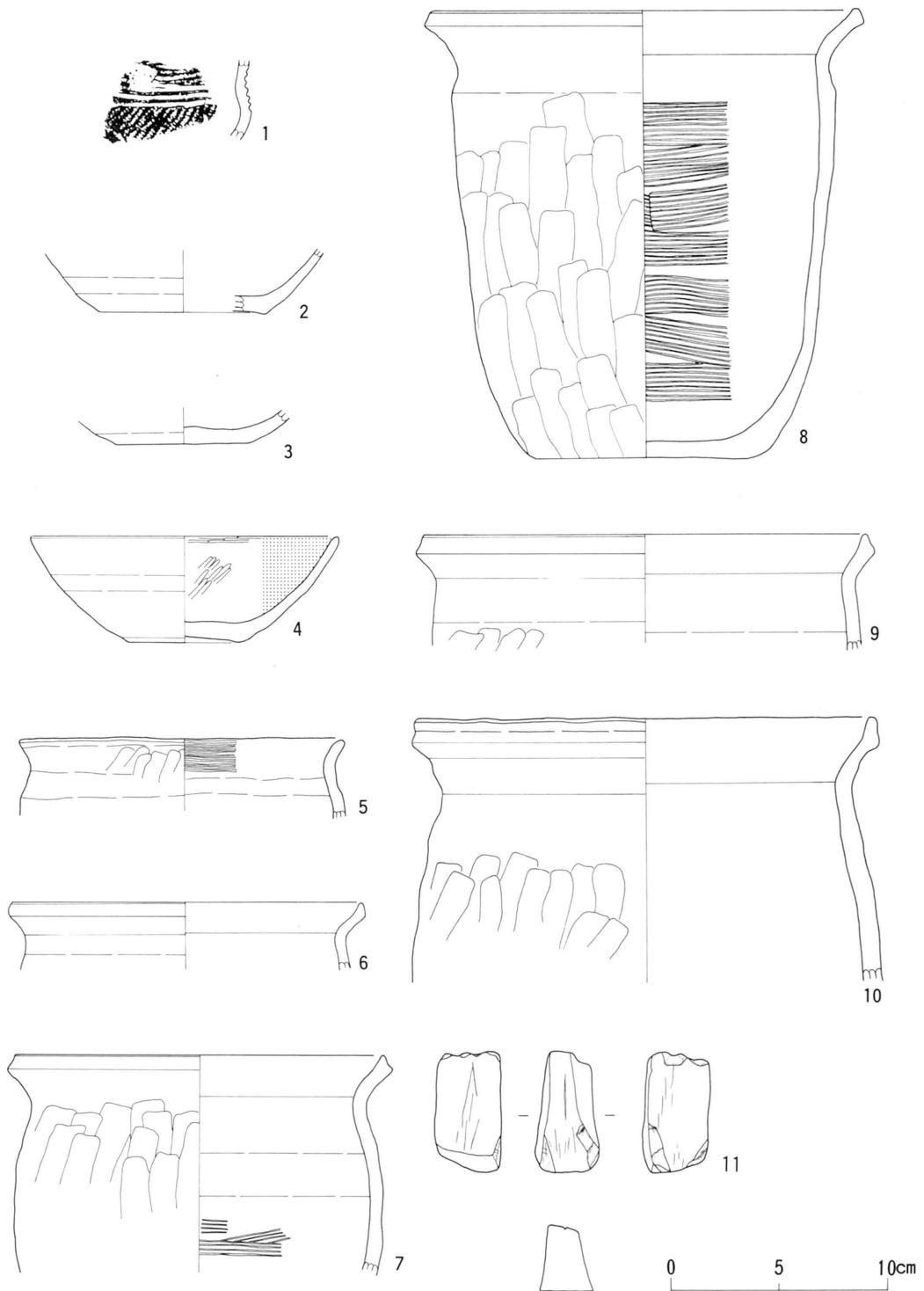
小型鉢の小片である。斜縄文と平行沈線による小破片が竪穴住居東壁やや北寄りの壁下から出土した。文様から縄文晚期（大洞C₂式）のものと思われる。

土師器

壺（第35図2～4、図版26-1） 3個体分出土したが、うち1個体は内黒処理を施した壺である。いずれも口クロを使用しており、底部切離しは回転糸切りのみで他の調整は施されていない。2・3は口縁部が欠損しているため口径は不明である。底部径は 7.5cm、6cmである。器面の色調は橙色を呈し、やや硬い焼成である。4は口縁部が約1/2欠損しているが、推定径は14cm、底径 5.2cm、器高 5.0cmである。内面を黒色処理しているが、ヘラミガキ痕は器面磨滅が著しいため、その方向等は明確ではない。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は軟質である。出土地点はカマドとピット1の中間の床面上である。

甕（第35図5～10、図版26-5・6・7・9） 製作に際し、口クロを使用しないものと使

白沢遺跡



第35図 B E 06住居跡出土遺物